

# 川柳塔



昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可  
平成二十六年四月一日発行（毎月一日発行）  
創刊大正十三年 通卷一〇四三号

日川協加盟

No.1043

四月号

## 第20回 川柳塔まつり

# 川柳雑誌・川柳塔90周年記念川柳大会

と き 平成26年10月4日(土)

開場：午前11時、出句締切：正午、開会：午後1時

ところ ホテル・アウリーナ大阪 4階 金剛の間

大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12 (近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車) 電話 06-6772-1441

《同人総会・議事》午前10時より

平成25年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告

平成26年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

《各賞表彰式・記念句会》

祝 辞 (一社)全日本川柳協会 理事長 大野 風 柳 氏

表彰式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞

おはなし 「文化人とは誰を言うのか」『上方芸能』発行人 木津川 計 氏

兼 題 「団 体」 川 柳 塔 社 川 上 大 輪 選

「降 る」 川柳文学コロキウム 赤 松 ますみ 選

「か たち」 びわこ番傘川柳会 徳 永 政 二 選

「ゆっくり」 川 柳 塔 社 西 出 楓 楽 選

「ソ フ ト」 番 傘 川 柳 本 社 田 中 新 一 選

事前投句 「輝 く」(9月1日必着) 川 柳 塔 社 小 島 蘭 幸 選

◎各題2句・勝手ながら欠席投句は拝辞させていただきます

出句締切 正 午 (午後5時頃終了予定) ※各題の「天位」に賞呈

◎会 費 3,000円 (当日頂きます) ご昼食は各自でお済ませください

◎ 呈 小島蘭幸川柳句集・記念品

《 懇 親 宴 》

と き 平成26年10月4日(土) 午後5時～7時

ところ ホテルアウリーナ大阪 3階 葛城の間

☆会 費 7,000円 (会席料理) 先着申込み 130名様

☆宿 泊 ホテル・アウリーナ大阪 8,000円 (朝食付き)

\* 事前投句および懇親宴のお申込はチラシに刷りこみのハガキ(ご希望の方は事務所)にて  
9月1日(月)までに本社事務所宛、お送りください。

\* 懇親宴のご送金(句会費除く)は同封の振込用紙でお願い致します。

主 催 川 柳 塔 社

大阪市天王寺区大道1丁目14-17-201  
〒543-0052 ☎・FAX 06-6779-3490  
振 替 0 0 9 8 0 - 4 - 2 9 8 4 7 9

# 手紙

小島蘭幸

西大寺会陽川柳大会の案内を頂くと、私はいつも故寺尾俊平さんを思い出します。63回の今年は2月11日に開催されました。

—秋深みます、こないだはほんとにありがとうございました。おかげさまで美しい会ができました。あつく御礼を申しあげます。なにしろはじめてのこと、ほわあつとしたままの二三日です—。

これは昭和61年11月2日に開催された、寺尾俊平句集「葦川」発刊記念川柳大会の俊平さんの礼状の一節です。美しい和紙をつなぎ合わせて、毛筆で書いてありました。毛筆でしかも美しい和紙に書かれた手紙を頂いたのは初めてでしたので、凄く感激したのを覚えています。

当時、私は38歳でしたが、課題「諸君」の選をさせていたのです。俊平さんのところを覗いてみませんか。記念大会は、全国から俊平さんを慕う柳友で大盛会でした。私のおこがれの川柳作家も多数出席されていました。おこがれの作家の前で披露

するので、力を入れすぎたのだと思います。今の私には考えられない程の大きな声で諸君!!と言ってしまったのです。これにはびっくりされて、椅子から10センチ程跳び上がった方もいらつしやいました。

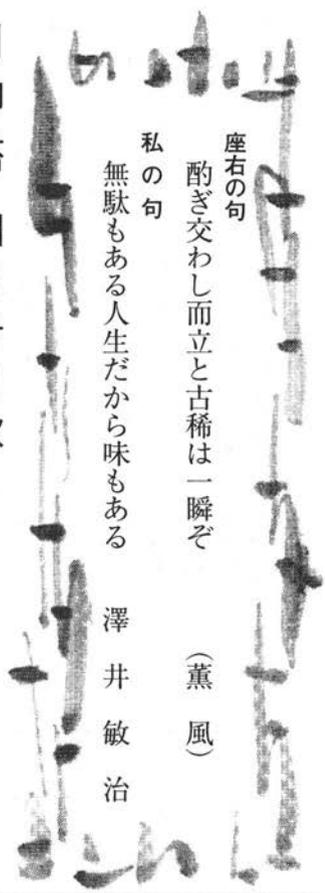
記念大会の作品です。

胎児はすでに深い祈りの貌を持つ  
地に禱りありオルガンは地を叩く  
絵馬堂の馬は禱りに哭くばかり  
わたくしの上に諸君の足がある  
よろこんでもらえて消える朝の燭  
友だちに權をあげて生きのびる

天笑  
冬二  
藻介  
荒介  
千代  
惠美子

記念大会は、最初7月に開催される予定でしたが、俊平さんの体調快復を待つて11月に開催されました。今こうして記念大会号を読みながら改めてお手紙を拝見しますと、手紙の素晴らしさ、美しさがしみじみと伝わってきます。直筆の手紙は本当にあたたかいです。

ここまで書いて私は10月4日に開催される第20回川柳塔まつり 川柳雑誌・川柳塔90周年記念川柳大会の出席者のお顔を想像していました。そこには薫風先生と並んで談笑される俊平さんのお姿がありました。



座右の句

酌ぎ交わし而立と古稀は一瞬ぞ

(薫風)

私の句

無駄もある人生だから味もある

澤井敏治

## 川柳塔 四月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「大和路の春」

■巻頭言 手紙	小島 蘭 幸	(1)
作りやすくて奥深い川柳	瀬戸まさよ	(2)
川柳塔(同人吟)	小島蘭幸選	(4)
川柳塔の川柳讃歌	木津川 計	(4)
新川柳鑑賞	麻生路郎	(45)
自選集		(46)
温故知新		(49)
水煙抄	川上大輪選	(50)
西尾 葉句抄		(71)
誹風柳多留一二篇研究		10
英語 de Senryu	吉村侑久代	(74)
江戸を楽しむ	小栗清吾	(75)
愛染帖	新家完司選	(76)
檸檬抄 「張り切る」	竹治ちかし・大内朝子共選	(80)

## 作りやすくて奥深い川柳

瀬戸 まさよ

昨年の十二月、句集『震災川柳』を読んだ。津波の大きな被害を受けた南三陸町の旭ヶ丘地区と歌津地域の方々の詠まれた川柳二百句、殆どの人が川柳は初めてということだったが、季語のない川柳は作りやすく、お互いに頷き合い笑い合ふことが心の糧につながったとのことである。予想を超える作品が集まったことも当事者の驚きと喜びであったとか。数句を紹介したい。

被害者の心の雪は解けぬまま 阿部 亮一  
被災して相談事は山とあり 黒澤 達風  
取材陣家にくるたび大掃除 柴田みや子  
大津波人情までも流し去り 三浦 徳子  
何気ない日常嬉し青い空 佐藤香代子

ところで、川柳は人間諷詠であり奥を極めるほど難しいといわれている。少し前の話になるが、沢山の佳句をものにされている川柳塔同人の岩津ようじ氏の句が朝日新聞の天声人語に載せられた。

かみそりといわれた人の紙おむつ

「屋 根」……………池 森子選……………(83)  
一路集「カンパ」……………夏目一粹選……………(84)  
「はつらつ」……………佐々木満作選……………(85)

■エッセー「紫の椅子を羨む」……………

評論「薫風曼陀羅」……………

『麻生路郎読本』余滴……………(20)

初歩教室「苦 勞」……………

川柳塔鑑賞……………

水煙抄鑑賞……………

民族の詩歌(22)……………

せんりゅう飛行船(40)……………

三月本社句会……………

句会燦燦……………

各地柳壇(佳句地十選/前たもつ・矢倉五月)……………

四月各地句会案内……………

柳界展望……………

■編集後記……………

井上一筒……………(111)

梅崎流青……………(102)

谷口義……………(104)

三好專平……………(105)

新家完司……………(106)

朱夏・勝弘……………(130)

座右の句  
去りぎわにだけ喝采があればよい (楓 楽)

私の句

会いたくてあなたに合わす周波数 島 田 千鶴子

「いい句ですな」と言う人も多かったが、親しい柳友の野村静雄氏は言い過ぎと洩らされた。野村氏は薫風師から「野村さんの句はいいね。麻生路郎先生の句風に似ている」といわれていた。田辺聖子著「川柳でんでん太鼓」に載せられている野村氏の句は次の句である。

これ以上悪さが出来ぬ顔で寝る

私が「作句にどのぐらいかかりますか」と野村氏に尋ねたことがある。「一句に三日はかかりますな」との返事をいただいた。かつて、薫風師の句が五句朝日新聞に大きく載ったことがある。巻頭句は

酔いざめのこれも汚職のダムの水

このとき、薫風師は「五句作るのに一月かかったな」と言われたことが耳に残っている。数年経って薫風師の七句が、やはり大きく朝日の誌面を飾った。題名は師弟。巻頭句は

温泉で生まれたときの顔になる

このときは、一週間でできたそうである。推敲に念を入れているベテラン作家、問口の広い川柳であるが奥行きまでの道は遠い。

# 川柳塔

## 小島 蘭 幸 選

米子市 吉 田 陽 子

如月の空に希望のまだ淡く  
いい香り素通りさせぬ花売場  
遠い空親子で思いあっている  
頑張らなくていいよ時々自分にも  
好まざる不協和音も生きる音  
伸ばしては切るジnkクスを持たぬ髪

和歌山市 柏 原 夕 胡

鏡の中に別人が立っている  
杖もまた杖に頼りたがっている  
サングラス掛けて自己防衛をする  
凧いでくる夫の寝息聴きながら  
切り札の涙が効いたのは昔  
南風吹いてふわっと浮いてみる

堺 市 柿 花 和 夫

人生はゼロサムゲーム悔いは無し  
ノーサイドの笛がヒト科に届かない  
木枯しに背を向けるのも生きる知恵

消去法で選べばゼロになる候補  
聴牌って口三味線が弾みだす  
ゲームセットを静かに告げる通夜の経

富田林市 片 岡 智恵子

奥の手は千秋楽に出すつもり  
そっとして置きたいわりもあると知り  
騒ぎから戻った朝の目玉焼  
空気読みすぎて自分を小さくする  
七福神まいりと洒落て食べ歩き  
時に吹き矢もとんでくる握手会

橿原市 居 谷 真理子

化粧して寒い世間に出て行こう  
古くさいメイクほどこす魔女日和  
迷い子になっちゃったので墓参り  
怖いのだ必死にキバを剥いている  
からっぽのでのひら息を吹きかける  
強く強く願うこの世に生まれ出た

大阪市 谷口 義

雨の日のさくらのちが惜しくなる  
トイレ休憩はわたしのためにある  
笑いながら言ってみようかと思う  
めんどうだから本当のことを言う  
そんなこと考えていたのかくもり  
お互い様が向こうからやって来る

和歌山市 木本 朱夏

開運のグッズ集めてまだひとり  
金平糖ほどの鋭さならすこし  
両の手で春の兆しを抱き寄せる  
ほろ苦いチョコであなたを確かめる  
コンニャクの裏も表も顔が無い  
右に振れ左に揺れて海を見に

吹田市 山本 希久子

じゃんけんで開けてのひらから春に  
桜には元気な姿見せておく  
8%へ一円貨の重み  
個人情報私の弱さすっぱ抜く  
八十歳を前に足踏みしています  
パスワードひとつで開く薔薇の花

橿原市 安土 理恵

肩の雪黙って払い合っている  
ちよっと顔出してわたしを売ってくる  
追い風を待ってるわたくしの気弱

ギザギザの肋は挫折したところ  
甘やかな記憶愛していた頃の  
風花の空を仰いでいる扉

堺市 楽原 道夫

踏切の向こうのシャイな大男  
物真似をすればするほど空元氣  
カリツとするまで揚げている音符  
二等辺三角形は世知辛い  
花びらを切手のように舌にのせる  
豹柄にすっかり馴れてきたサクラ

松江市 石橋 芳山

ナビに従い潜水艦になつている  
日に何度転がり穴へ落ちてゆく  
負けた負けた誰とも話したくない  
つまらない男に乳酸が溜まる  
禁猟の森で棒切れ振り回す  
風評のどこまで運ぶ黒い羽

鳥取市 森山 盛桜

世の中を動かしている不等号  
密告とリークは違う正義感  
性分で伏せ字を推理したくなる  
朽ちるまで回り続けるソノシート  
ドンマイが殆ど効かぬ御時世だ  
いつからか依怙地になった一家言

大阪市 田 浦 實

独り言聞いてくれます生駒山  
熱爛で今日の命の仕上げする  
力まずに生きて行こうと写経する  
ピルの谷間の安らぎ呉れる地藏さま  
取りあえず散歩をすると飯うまい  
全没が慢心病に効くんです

香芝市 大 内 朝 子

春空へ心の蓋のボンと開く  
やわらかい陽射しフェルメールの世界  
周波数びつたり合ったのが縁  
再会へときめくわたくしの春よ  
菜の花の海でわたしもバタフライ  
人間て転んだままでいられない

鳥取市 両 川 無 限

他人とはドア一枚の距離を置く  
マンネリを脱ぐ三月のカレンダー  
生き上手遊び上手でよく眠る  
恋敵僕よりちよつと背が高い  
ずかずかと踏絵蹴散らすハイヒール  
天辺で吠えているのは亡父だった

八尾市 宮 崎 シマ子

寒さに負け老いにも負けて春炬燵  
海外赴任梅が咲いても帰らない  
成人式あいつ美人になつてたよ

料理上手な男に私すぐ惚れる  
老いの我儘同調くれる人が好き  
桜咲く頃孫に花嫁さんが来る

大阪市 古今堂 蕉 子

励まさず落ちこまぬよう手紙書く  
限界の先に小道が見えるかも  
良い意見さすがとでもがせめぎあう  
沈黙は金おばちゃんには通じない  
遺言状開ければあつという仕掛け  
曲らねばあなたに添うていけません

松江市 川 本 畔

約束をころり忘れて蝶遊び  
なるようになるさと袋閉じている  
ときどきは疎むことあり血の濃さよ  
嗜みころす哀しみ誰もわかるまい  
血縁と聞けばいとしい芋の蔓  
ポケットに握りしめてる春の鍵

藤井寺市 鴨 谷 瑠美子

アルバムの中で感傷的になる  
時効には妻はなかなかしてくれぬ  
幸せ過ぎる笑い皺だと言っておく  
わたくしは雑草だれも振り向かず  
人恋のこんな静かな夜もある  
手ごたえはかすかにあつて冬を脱ぐ

鳥取県 細田裕花

静電気ビリッと忘れ物気付く

縁あってライバルという仲である

エレベーター袖すり合うも無表情

冬野菜雪の恵みがしみてきた

イエスノー シンプルに考えてみる

しんどいと言えば我慢の糸切れる

豊中市 江見見清

家電みなスマート妻は外に出る

反対の声なくドラマにもならず

英雄の乗る馬いつも馳けている

お出かけに頭に乗せる髪がない

天秤で測る葉は効いていた

網棚の眼覚しついに鳴り終える

東大阪市 北村賢子

独り居へ動く金魚が居てぬくい

ほころびかけた蓄いっぱい陽を当てる

寒波襲来馴染みの猫も顔見せぬ

花一輪今日一日の幸もらう

刻まれた皺に行き続けた誇り

何はともあれ今日も笑って生きられた

尼崎市 長浜美籠

ワンデイバス乗り継ぎ雪の湖西線

訛聞く鄙びた駅の麵どころ

気がついた時では遅い自己暗示

九紫火星石橋叩き渡る主義

判断はこの目と耳で確かめる

先々で笑顔に出合う佳き日なり

高槻市 島田千鶴子

鬼やらい私の中の鬼も追う

愛想よく飲ませ本音を語らせる

焦ることない七十の誕生日

妥協してのんびり暮らす策もある

曖昧な言葉で包む思い遣り

水ぬるむ雑用どつと押しよせる

弘前市 稲見則彦

あの夏が恋しく思う冬木立

耐えながら確かな春を寒立馬

味よりも猪口を見せたく蕎麦を打つ

自分史の隙間を埋める薄氷

四面楚歌キリトリ線の中にいる

一人用鍋が今夜も運ばれる

和歌山市 福井菜摘

プライドを守るラインで和を保つ

雑念を捨てて肩の荷軽くなる

深追いはするなど遮断機が下りる

叶わぬ夢胸にたたんで黄昏れる

マイウエイもう雑音は気にしない

無印になって地域の輪にとける

京都市 高島啓子

昨年の続きひきずる毛糸玉  
蹲踞したまま春はまだ来ない  
主婦は損だと思えなくなつた  
澄みきつた空のどこかに毘がある  
敵陣に乗りこまないと始まらぬ

京都市 西村益子

鬼は外心の中にもバラバラと  
散歩マップそぞろ歩きはこのコース  
お雛さまやつと出たねと亡母の声  
会話あるうちはオーケー老い二人  
本命のチョコはとつくに買つてある

京都市 藤井文代

もう飲むなとグラスの底に鋭い目  
ノーコメント咳がひとつのくさび打つ  
直接には言わないことで余地つくる  
ひそひその方が話は盛り上がる  
涙出る余裕あります悲しまぬ

京都市 榎本宏子

春の森恋も語つた青春賦  
中流の生活下げる消費税  
食通も妻の薄味我慢する  
巡礼も観光化してバスツアー  
元氣出るお好焼きにマヨネーズ

京都市 三宅満子

メジャー行き妻のサボート語学力  
世界遺産ご飯味噌汁胸を張る  
人肌が恋し湯タンポ抱いて寝る  
新年の目標忘れ冬籠り  
作つては壊す税金無駄使い

亀岡市 井上森生

おおよその寿命は生きてやる氣力  
ありがたや喜寿に馬力が盛り上がる  
孫たちが爺と崇める果報者  
孫たちの命を膨らますオメデトウ  
喜寿と癌私の立派な肩書に

長岡京市 山田葉子

開くのがこわい小部屋が胸にある  
遺言を書いて出直すことにする  
ブライドをチラチラのぞかせる帽子  
弁解は顔に大きく描いておく  
体重が増えたぐらいで悩まない

八幡市 今井万紗子

この先のもしにも備え眼鏡拭く  
老いの身に非常袋のいる若しも  
ルビ振つて若しもの事をとどめとく  
いつか来る若しもの時は穏やかに  
人生パズルオンナの勘で埋めていく

大阪府 阿野 壽美子

笑いをば誘う人来て事運び

せせらぎの音に癒され目をつむる

恋心直接言えずレターから

子の願いこれがラストと甘い親

スキージャンプ翼ある様どこまでも

大阪府 池上 清治

お首まで風呂につかれば歌も出る

雪まつり寒さ忘れる立ちうどん

寒い朝雪踏みしめて受験生

誕生日何も来なくてメールだけ

年が明け寒中見舞読み直し

大阪府 井丸 昌紀

にぎやかな振り装っている孤独

あやふやに事を治めるいぶし銀

OKの合図とずっと思ってた

酔うほどに友はじわじわ引いてゆく

黙々とゲームする子の深い闇

大阪府 岩崎 公誠

百歳に長生きのコツ教え乞い

断片の記憶ひとつが邪魔をする

老化度を測るスマホを持たされる

リケジョたち人気で理系ひかり浴び

再診で新病名をまた貰い

大阪府 江島谷 勝弘

七億もいらん一億あればいい

突然に天井回りダウンする

泥泥の話聞かされウツになる

もしも今五十代ならどう生きよ

お正月一度ハワイで過ごしたい

大阪府 榎本 日の出

七億円当れば命縮むかも

ストレスも恋もみそ汁飲んで

子や孫に縛られながらまた楽し

脱線すると喜ぶふたりきり

頑張れと言わず一緒に歩く影

大阪府 榎本 舞夢

初孫の成人式に弾んでる

寒中見舞増えて我が身を引き締める

二人居て元気ゆつくり楽しもう

節分は鬼と仲良く居るつもり

誕生日期待してますサブライズ

大阪府 大川 桃花

ちよつと後でが偉い騒ぎを引き起し

不寐に年齢聞きに来る女

此の頃の家電寿命短なり

抵抗力あげるしかない予防法

おばあちゃんが即戦力の道の駅

大阪市 奥村 五月

学校で居眠りしても塾ハシゴ

俺逝けば妻はやれやれ言うだろう

寿命まで預金持つかと悩む夜

父母は逝き地蔵さんだけ残る里

元気です医者ハシゴがまだできる

大阪市 笠嶋 惠美

一日は夫を見舞い賀状出す

三日朝葬式出して初七日も

感動のナレーシヨン有りさすがプロ

満点の葬儀が出来て悔いが無い

寿命まで計り知れない人の縁

大阪市 神夏磯 典子

尋ねたら返事をくれた春の風

快適な床暖房が愚痴を吸う

祈っても祈っても欲が湧いてくる

錆ついた心を癒すかすみ草

したたかな薬一本に縋ってる

大阪市 川端 一步

花の下飲んで歌って消費税

春四月二円切手がよく売れる

日々楽し今日ルノワール明日ダント

妥協する今日は秤を忘れよう

あとがきを読んで買うくせ直らない

大阪市 熊代 菜月

補聴器に頼る八十路の仲間会

アリの列何があつたかまわれ右

あきらめず頑張りすぎずまた一年

日向ぼこ誰のものでも無い自由

まだ米寿あしたへ夢のフラダンス

大阪市 小谷 集一

金で済む話へ金の無い悩み

ポジティブに生きて心に捻子を巻く

ライバルのお蔭で若さ持続する

まだ役に立つと信じて四股を踏む

手付かずの夢へ助走を繰り返す

大阪市 近藤 正

透かし彫り塔の水煙天女舞う

春一番安保揺るがす名護勝利

原発ゼロシユプレヒコール輪の一人

若者が古民家に住む村興し

早や三年フクシマの春まだ遠い

大阪市 坂 裕之

弱点をしっかりと意識して進む

悩み事あつてぼちぼち生きてます

此処まではみんな自分で決めて来た

今日いち日やつて駄目ならまた明日

雪解けも間近お日様暖かい

大阪市 佐藤 忠 昭

一塩が不味い料理を引き立てる  
炒り卵三つは多いと減らされた  
母の味妻の味覚に慣れ過ぎた  
こりゃ不味い妻の体調悪いかも  
嫁の味不味いと言えず飲み込んだ

大阪市 澤田 定子

立春もまだ冷い風にさらされる  
車窓より見えるハルカス明日行こう  
研究者長い黒髪ほほえまし  
フィギュアを飽きずみている回転美  
日の丸が何時上るだろソチ五輪

大阪市 津村 志華子

三食をおいしおいと欠かさない  
錠剤をきつちり飲んでまだ元気  
天国にゆく覚悟なら出来ている  
大阪はわたしが土に還るとこ  
花筏 時も流れる吉野川

大阪市 津守 なぎさ

デパ地下のセールに走る独り膳  
山間の雪甘酒に癒やされる  
好物は甘酒なのに飲めぬ酒  
雪景色外出禁止骨粗しよう  
茶の間から応援祖母のソチ五輪

大阪市 寺井 弘子

五時からの惣菜詰めるエコバッグ  
消費税アップに妻の知恵袋  
突つ張つたジュニアにスマホ教えられ  
梅一輪春はまだかと老いふたり  
生き甲斐は温めの爛に焼きするめ

大阪市 原田 すみ子

手足心伸ばすわが家の極楽湯  
ジグソーパズル日々の明暗埋めてゆく  
幸せを握る拳が固くなる  
失敗を巻き戻したら私消え  
浮かんで消えるあぶくの言葉達

大阪市 板東 倫子

新春の挨拶に来た初雀  
おもてなしの話へ男も口を出す  
逆もまた真なりと言う処世術  
万年細胞研究中はかつぼう着  
豆の数長い来し方秘めている

大阪市 平嶋 美智子

国民の思いにそわぬ金バッジ  
それぞれの夢を目指して始発駅  
金の卵と言われた頃の高い夢  
立腹に笑顔つくれる歳となり  
今日の事今日に済ますと枷をかけ

大阪市 伏見雅明

咳をする人の隣が空いている  
満々の酒によく映えルミナリエ  
穏やかな口調だが引き下がらない  
相応に理想も歳も取っていき  
満腹の信頼を置く山の神

大阪市 松尾柳右子

病院でばったり合った近所人  
寢床就く一日たつの早いです  
カラス鳴き何だかいやな気持だな  
爪切りが気になる昼の日射しきて  
カーテンを締めて昼寝の主人なり

大阪市 升成好

天と地の大きな対話稲光り  
以下同文一位と以下のこの格差  
趣味多彩中途半端の見本なり  
酒の味知らなかったら家が建つ  
葉代ゼロの暮しがむつかしい

大阪市 山崎君子

チューリップ紅白可愛い朝の陽に  
ヘルベスの痛みに耐えて手紙書く  
娘はやさしお昼のパンを届けくる  
年とれば年齢を忘れる誕生日  
縫いぐるみ犬かお猿かわからない

大阪市 吉内タカ子

立春でも持て余して重ね着に  
欠かさずにグワツと一杯の力水  
暖味も使い分けます笑い好き  
大阪弁ゆつくり余生騒がしい  
誘い水カラオケ嵌まる身の軽さ

堺市 奥時雄

物忘れのシヨックお笑いごとでない  
営業のノルマが作る胃潰瘍  
刑務所に近いがお世話にはならぬ  
独房はカプセルホテルよりもマシ  
慰謝料の額によつては許します

堺市 加島由一

倍返し地蔵と名付け拜んでる  
この波に乗りたいたい株の乱高下  
マスコミの言うほど悪くない暮らし  
重ね着を一枚減らしスパーへ  
春が来る春が来るぞと牡丹雪

堺市 源田八千代

善くもまあ御足とは言い得て妙だ  
就活を励ますメッセージ添えて  
鴉が豆狙わぬうちに塵に出す  
立春へ暖簾に色紙春の色  
在宅介護公私の支援あればこそ

堺市 齋藤 さくら

大根のお礼ですねんチョコレート  
カルチャーで年を忘れる程はしゃぎ

日本一長いつり橋渡り終え

足腰にご褒美あげる露天風呂

金メダル茶の間でエール送ってる

堺市 澤井 敏治

煩惱の数だけ豆を食う二月

気がつけばぼつと咲いてる梅の花

温い日はせめて机上を整理する

赤貧のころ思いつつ古書整理

平成だつてこどもは夢を抱いている

堺市 遠山 唯教

成人式晴れ着の孫が華になり

米二合研ぐしあわせがある暮らし

いやだったスマホにすぐにはまり込む

飽食の老いにやさしいアラカルト

三ツ揃いのチョッキが脱げず難儀する

堺市 内藤 憲彦

連名で呆けんようにと絵馬に書く

時どきは自分を替めて前を向く

夢捨てず大きなラッパ吹いている

ゴミ出し日屋根のカラスに会釈され

パソコンの得意な猫の手が欲しい

堺市 村上 玄也

アドバイス戯言にして悔いている  
落ち目だと知って右腕去って行き

老化した身体に突如ヒビが入り

太い指スマホの操作ままならず

ど忘れを笑っておれぬ老夫婦

堺市 矢倉 五月

ちよつと無理していますよと言う鏡

ゆつくりと開く華待つ父の目で

パワフルな友がどこでもチョイ眠る

苦手だと言うてた椅子も馴染み出す

自動ドア誰も拒まぬのも恐い

池田市 栗田 久子

きらめいて生きていかねば年なりに

増税の前駆け込みという出費

暮らしぶり成人病が見えてくる

受け継がれ地域になじむ和の料理

温情と気づけば無視はできません

和泉市 横山 捷也

理想論だけで結論出ないまま

ド忘れをなじって仲の良い夫婦

煩惱を写経の文字に閉じ込める

基金して優越感に浸ってる

お参りが先よと露店通り抜け

泉佐野市 山本蛙城

交野市 森本弘風

売れすぎてゴーストライター燻り出す

昭和史の二・二六も雪の朝

老妻の義理チョコ一つ歳らしい

お金より労力欲しい雪下し

研究室白衣にもなる割烹着

茨木市 島田誠一

河内長野市 植村喜代

不発弾抱えたままの古日記

生きる欲あつて証の手術痕

B面にまだ希望有り老い賭ける

敵失の好機にゃ乗らぬ生一本

産直品訛りも買った道の駅

茨木市 藤井正雄

河内長野市 梶原弘光

師の句碑を訪う尾道の坂のぼる

人使い上手社長の作業服

人脈が変わり左遷の寒い冬

ライバルを招き幸せ見せつける

絨毯に踵が沈む緊張度

大阪狭山市 矢野梓

河内長野市 木見谷孝代

出来たての春を探しに行く散歩

路味噌に重ねる想い母を恋う

割烹着に替えて張り切る夕支度

血圧の話に助言どつと来る

大雪に転ばないでと声かかり

あいまいにグレーゾンを生きる知恵

割烹着リケジヨのおかげ日の目見る

河内長野市 黒岩靖博

下戸のくせ誘われ介護する役目

結局はまだ呑み足らず理屈こね

椅子よりもホームコタツで過す冬

五輪まで呼んでくれるな閻魔さん

妻の愚痴反論しては風呼ぶ

河内長野市 坂上淳司

孫帰り翁媪の小正月

母白寿古希の息子に百度石

同郷の絆引き裂く再稼働

文箱から金釘流の軍用箋

回らない鮎屋で妻の誕生日

河内長野市 谷久美子

娘の夢と絆を結ぶ割烹着

背伸びして買ったスーツでクラス会

福島に戻れぬ子等が巣立つ春

片付かぬ未練が部屋を埋め尽くす

好きな物好きだけ食べ葉漬け

河内長野市 松岡篤

還暦で椅子取りゲームから降りる

出る釘と言われる程の根性を

鼻歌が出たら頼もうあの事を

お人よし遺産の額が語ってる

老脳に恋や株価は良さそうだ

河内長野市 村上直樹

書き初めという自分へのラブレター

負担増年金減も耐えて春

永遠の0説いて尽きない愛と生

胸襟を開けば鬼でさえ仲間

五十年やつと連理の枝に花

河内長野市 山室光弘

原発に故郷取られ侘び住まい

待ち侘びる春がそろりと恵方巻

玉虫の色で装う大人たち

沙羅ちゃんは天使の翼胸に秘め

酎二杯手柄話が夢遊病

河内長野市 山岡富美子

春の風邪アベノミクスの圏外で

生きたとはタッチパネルの檻の中

パスワード忘れ真昼の闇をゆく

生姜湯と午後のお茶です雪催い

ワイルドに春一番がやってくる

岸和田市 岩佐ダン吉

それなりの理屈をつけてよく転ぶ

雲を見る他には策がありません

ありがとう流れる汗と見る夕陽

出直そう心ゆくまで手を洗う

前だけは向いて来る日待っている

岸和田市 堤 楯代

コルセット支えてくれるお友達  
こつこつと杖のリズムで歩いてる  
雪けつて飛んでる夢で眼がさめた  
雪雲は見ているだけで冷えてくる  
めずらしい雪に喜ぶ都会人

四條畷市 吉岡 修

OB会六十歳のニューフェース  
あつ春だ風も木の芽もまんまるい  
何よりのはげましたったその目線  
月下美人ほんのり咲いて待っている  
アベノミクス運引き寄せた人もいる

吹田市 太田 昭

補聴器で妻のつたない愚痴を聞く  
俗世に染まり煩惱捨てられず  
ビニール傘忘れたままのクリニック  
八十を過ぎて絆を確かめる  
平均寿命こえて真つ赤なシャツを着る

吹田市 大谷 篤子

朝迎え今日も気合を入れておく  
沙羅双樹仰いで心穏やかに  
クロゼット老いを仕舞つてクラス会  
この笑顔味方に越えてゆく試練  
地図ない人生ユニークに生きる

吹田市 木下 敏子

水仙を活けて玄関春になる  
あの時の我慢忘れてよく喋り  
輪の中で丸く育つた三姉妹  
楽しみのまるがついてるカレンダー  
独居にも馴れて節分鯛焼く

吹田市 須磨 活恵

傘寿の器傘寿の夢を盛る  
杭になり打たれてみたい好奇心  
寒椿エネルギツシユな赤が好き  
二兎を追ういいえ一兎も無理と知り  
豆まいて心の鬼も追いはらう

吹田市 瀬戸 まさよ

努力して尚運もある五輪ああ  
真つ青な冬空私まで晴れる  
独りです時間たつぷり長電話  
干し柿の高値に思案長いこと  
雪のない土地だから雪の思い出

吹田市 野下 之男

都政には何か旨味があるらしい  
応援で花が咲いたか飛ぶは飛ぶ  
ノンアルで静かな夕餉出来ました  
富士山が僕を見ているこちらこそ  
あの人に物言えなかつた縁の下

高石市 浅野房子

立春は過ぎたが雪が降るこの世  
ご馳走もないのに喉がかわきます  
ナポレオンチョコならいいと舐めている  
エアコン無しで過せる日を待っている  
回りくどい直接言つて下さいな

高槻市 井上照子

年だけの豆来し方をふりかえる  
我が娘にも陰で頭を下げている  
菜の花のおひたし春をもう食べた  
不意の客いそぎ片付け押入れへ  
知恵の輪がとけて安堵の胸なでる

高槻市 指宿千枝子

お日さまに起きて夕日にありがとう  
プランターの水菜しやきつと自己主張  
増税へ物色買をしています  
この先を考える八パーセント  
今日を書き静かに閉める日記帳

高槻市 片山かずお

しんしんと降る雪音までも覆う  
これも個性ですと貰いてる頑固  
目立たないところを買われて脇役に  
ラッシュ時の戦士は生氣溢れさせ  
ガンバレが過ぎて無理強いさせている

高槻市 初代正彦

笑み絶えぬ孫が主役のマイホーム  
入れ食いの潮目に独りまだ坊主  
寒くても夢中にさせる奴風  
ひどい顔どこ吹く風のブルドック  
お辞儀にも滲み出ているお人柄

高槻市 杉本義昭

欲一つ捨てれば軽くなる余生  
聞き流す術心得た妻といる  
盲導犬寄り添う姿いじらしい  
始まりは野茂英雄氏のトルネード  
初恋は語ればいつも美しい

高槻市 左右田泰雄

人生の余白に咲いた返り花  
おみくじに吉と出ました甲午  
乱舞する雪に心を洗われる  
雨戸閉め乍ら三日月眺めてる  
負けん気の強さじゃ負けぬ向う傷

高槻市 富田美義

芋粥を分けて食べても心満ち  
手も足も我が意で動く有難い  
エンディングノートで命惜しくなり  
甦生して歓迎なのか思案する  
夢一つヒソソリ抱いて独り生き

高槻市 富田 保子

一円を誰が拾うか見るベンチ

恥かしくて隠して食べた麦弁当

スローライフ卒寿白寿は通過点

新年会同じ顔ぶれ同じ愚痴

一人でも呆けたらあかん老い仲間

高槻市 原 洋志

レスポンス少し遅れて老い進む

もういいかい泡消えるまで目をつむる

ぬるま湯に一人芝居の正誤表

下馬評をちよつと横目にマイウェイ

残る世の今どきのあたりおでん鍋

高槻市 安田 忠子

国体に出る孫見たくて蔵王まで

モアイ像のような樹氷見る蔵王

鍋かこみワイワイ旅の同期会

ほがらかに死を語り合う旅の宿

敬老パス忘れて払うあほらしさ

豊中市 池田 純子

お留守番ママのセーター抱いて待つ

髪染めた孫にハローとおじいちゃん

お散歩もスマホに管理されている

鬼の面今年は婆がかぶる番

割烹着大発見を見てました

豊中市 藤井 則彦

欲深い人ほど情に脆くなる

午年とも知らず寡黙に生きる馬

喝采を受けて苦勞も報われる

赤ちゃんも夢かうつつかおんぶ紐

第一歩出し間違えて行き着けず

豊中市 松尾 美智代

春はそこまでやって来てます風の音

いい物を見せてもらったきり絵展

私を変えてくれてる青い空

すつと糸通り楽しい針仕事

人間てすごいと思うオリンピック

豊中市 松村 里江

福笹をかつぐお人と会釈する

問う人も答える人も皆マスク

月一のお喋り会でうさ晴らし

会場は駅直結のシニア向き

旅づかれいこいは君の胸の駅

豊中市 水野 黒兔

ぶらんこは錆び団地から子が消える

祝われて白寿の顔はもう菩薩

見上げては塔の高さを確かめる

一本のワインふたりに早い春

真夜中も地球は回りやがて春

富田林市 中井アキ

ターニングポイントだった胡蝶蘭  
初恋の疼きが残る城下町  
掌を副えてお願い申し上げ  
残高と余命駆けっこしています

榎山のシグナル見て見ぬ振りをする

富田林市 山野寿之

皆出席妻に感謝をありがとう  
孫が来る日は小躍りのフライパン

遊んでも遊び足りない大落暉

言の葉の欠片集める春の耳

決断は妻でうろろする私

寝屋川市 籠島恵子

座右の句を忘れていない人恋し

片寄った生き方これはこれでよい

ある時は変な人にもなっている

お取り寄せするほどでなかった名菓  
寺の名は忘れたけれど寒椿

寝屋川市 富山ルイ子

苦しさを分かち持つことむつかしい

強い意志持ち続け老い生き続け

神仏に祈る日心おだやかな

電気毛布強でベッドにもぐり込む

かすかなる春の足音耳すます

寝屋川市 平松かすみ

ふくよかに卒寿が描く仏様  
食欲があつてじいちゃんパーズデー(八十七歳)

刺激すぎ老人会で観たおはん  
童話なら悪人みんな退治され

カップルのまた逢う日までガラス越し

寝屋川市 森茜

しんしんと山ひとところ椿の朱

三日月に吊るす詫び状父へ母へ

下水道詰まる奥深いおはなし

新しい眼鏡で説法聞きにくい

ときめきがほしくて風のなかを舞う

寝屋川市 山本三郎

神仏に願いいっぱい書いた絵馬

高齢化ステップ低いバス走る

柔肌に触れても見たい春の風

舞うように別れを惜しみ桜散る

あの人を忘れるために旅に出る

羽曳野市 安芸田泰子

ひとことがとてもうれしい老いの耳

一つ聞き二つ忘れて老い円し

結び目は少しゆるめのお付合い

捨てられぬ訳は言えない古手紙

口封じされた時から人嫌い

羽曳野市 宇都宮 ちづる

寒暖差きつと桜も迷つてる

はじめての雪に手袋濡らす孫

娘の再就職一役買つて孫の守り

三日前出会つた人の名が浮かぶ

冷蔵庫買い替え決めた消費税

羽曳野市 徳山 みつこ

寒椿マネーゲームに縁がない

ヘアメイク中身貧しいままでいい

バラよりもタンポポと気が合う私

しっかりと根を張るためのストレッツ

蜘蛛の糸切れないように気をつける

羽曳野市 永田 章司

潮時と周りは言うがまだやる気

お国自慢度が過ぎますと鼻につく

肩書に幅が付いたらひまな日日

朝粥がおいしくなつて老いを知る

復興の予算に群れる不埒者

羽曳野市 三好 専平

好々爺むかしは怒髪が多聞天

町医者 of 漢方薬で冬を越し

シリウスに住んでみたいとごねる人

お酒さえあればよかつた若い頃

春の風女のように愛くるし

羽曳野市 吉村 久仁雄

念仏に耳傾けて駄馬でいる

かけ引きが下手で正論強くなる

思い出は負けたゲームの中にある

恥一杯さらしてからの聞き上手

玉子かけご飯が好きでまだ一人

東大阪市 笠井 欣子

咳込めば母思い出す生姜糖

いいチャンスあつてものがす老いの足

線香の香もいとおしい一人部屋

孫子来て後片づけば老い一人

メス持てば鋭い外科医の白い顔

東大阪市 佐々木 満作

春風が頬撫でて来る心地好き

水温む身体冬眠から醒める

舞台数踏んでも本番の恐さ

ピンチから開き直つて得た勝利

ここ一番いつも神から見放され

枚方市 安達 忠央

八十路入り暇にはならぬ医者通い

黄信号消えないままの我が暮らし

早春にやつと蠟梅雪に映え

どれよりも大事にしてる古カバン

大使館ワインの在庫競いあい

枚方市 海老池 洋

消費税などに動じない米寿  
揺さ振りへ毅然と守らねば国土  
詫びもせず日本へ黄砂2・5  
原発が昔あつたという未来  
あの世から見たい千年後の世界

枚方市 小林 わこ

雑学の森で彷徨う一人っ子  
がんばれと応援くれる森が好き  
森においてよいつも守ってあげるから  
森のくまさん一しよにうたった仲間です  
新緑の森の思い出もつ二人

枚方市 伊達 郁夫

病床のペンは命を走らせる  
先送りばかりしている残尿感  
駅ひとつ歩いて若さ取り戻す  
羽のない天使がうちで昼寝する  
雨宿りあなたも迷い子さんです

枚方市 寺川 弘一

薄味に慣れて金婚まで続く  
フィクシオンと書くとはんものらしくなる  
見る度に新鮮になる遺産富士  
歳かなあハルカス出来て行く気せぬ  
店仕舞安ものだけが売れ残る

枚方市 二宮 紫鳳

水仙の香りほのかに寒便り  
穏やかに生きて残り火抱いたまま  
寒風を切つてハミングツリーリング  
恵方巻きパントマイムの古い二人  
イキの合う和音楽でて老いの旅

枚方市 二宮 山久

寒風の中に水仙咲き競う  
春近し庭の小枝につがい鳥  
里帰り昔ながらの鳩時計  
夕日落つベンチ寄り添う二人連れ  
新春を祝う夫婦の旅の宿

藤井寺市 伊藤 アヤ子

義理チョコのお返し高くつきました  
もてなしをしたくて餅を搗きました  
定年後のライフワークは川柳  
もう咲くよ天満宮の梅の花  
冬牡丹寒さに耐える綿帽子

藤井寺市 太田 扶美代

二ノ月の町に溢れている詩情  
白髪の素敵な男ひとになりました  
いくつもの箱に分けすぎた幸せ  
難関突破へ風邪を引かせてなるものか  
無理矢理に咲かされている冬の花

独り居に頼山陽を口遊む

藤井寺市 鈴木 いさお

雪ふわりふわり失意の肩に舞う

ふと亡母の吐息と紛う千の風

適量をまもる長生き致し度く

住み慣れた河内がやつぱ好きやねん

藤井寺市 高田 美代子

大阪にあしたは消える雪だるま

ぶっちゃけた話に酒が旨い夜

温度差を考えている羽根布団

人間は人間愚かさと弱さ

未来図を描いて今更を笑う

藤井寺市 津田 シルク

惚けたくはないが億単位で減び

ケーキ三個食べたので二個分歩く

父さんの背中目があり怖かった

焼芋の古新聞にヒント得る

飲み過ぎぬようにと仏壇にビール

藤井寺市 増井 ヨシ枝

波平さんの声がきこえる浄土から

永遠の0読み観にゆきまた涙

それとなく心くすぐる文がくる

苦勞した話美化して老いの坂

躓いたは足軋んだのはワタシ

体調良しさがき牛蒡リズムミカル

音たてて覚悟いいかと老いが来る

体感温度信じ着脱くり返す

叶うなら今のまんまでもう少し

照れ屋さん妻にはエチケツト見せず

藤井寺市 吉田 喜代子

観梅に行くに行けない花粉症

節電にもサマータイムの逆をする

大阪で久し振りです雪明かり

浴槽に浮かぶ乳房の穏やかさ

春よ来い木の芽も風を待っている

藤井寺市 若松 雅枝

春の陽気続いたあとで雪景色

チンしたら今日のメニューが完成し

一年生もう友達がたんと出来

酒断ちのあとで貰った吟醸酒

足弱りテレビの旅で間に合わす

松原市 森松 まつお

九割は妻が喋っていて平和

売れ筋の一番白い割烹着

細胞が若返るのは酒である

横丁の赤ちようちんも節電中

不可解な人だ些細なことでゴネ

箕面市 酒井紀華

一日中にここにこしてゐる誉め上手  
もしかして君はわたしの守護神か  
燃えた日の想い出だけで生きてゐる  
好きな人みな逝つてしまつた天の川  
目の前に好きな人いてりんご剥く

箕面市 出口セツ子

眠い目をこすり応援してゐるソチ  
子よりも手のかかる夫威張つてゐる  
残余命大切にしてよく笑う  
旅美食日々楽しんで老いの日々  
心だけ老わないうちに恋をする

箕面市 広島巴子

冬籠りしてます私喪中です  
お茶の間のシネマ立つたり座つたり  
ソチ五輪メダルがあつてほつとする  
初節句祝いに添える割烹着  
開花まで友とも少しかくれんぼ

守口市 井上桂作

新春は寒さお和らぎよい気分  
今年こそ古代史学が歴史通  
熱い歩いて歩く練習まず課題  
ほけ防止短歌を詠んでお正月  
年賀状五十通とはうれしいね

八尾市 内海幸生

きこちなく歩いて明日の夢を追う  
明日のこと想うな花よ咲きに咲け  
山茶花よ誤算だつた春の雪  
横向けた顔は鏡に映せない  
造花では仏も横を向くだろな

八尾市 高杉千歩

年金保険こんなに長生きしようとは  
火も水も潜つて米寿万華鏡  
何も彼も時効八十八生き直す  
夢数多ひと日ひと日が愛しい  
ど忘れで朝のお経が終らない

八尾市 寺川はじむ

あれもこれも水に流して支え合い  
情報の海を躍動するスマホ  
おでんの具さえ皆それぞれに自己主張  
強面を提げて真摯なブルドック  
息切れのアペノミクスにへばる株

八尾市 村上ミツ子

亡夫ともおしゃべりせずには恵方巻  
立春へ呼び戻された大寒波  
大雪を味方につけて受験生  
メダルなくても上村愛子素敵  
自分のためにチョコレート買いました

八尾市 山根 妙子

八十を機に今年で辞すと賀状来る

開花日の予報はやばや寒の内

旅ガイド蟹から桜へ替えてくる

咳込んだ背に優しい手があれば

強運もチャンスも備えソチを飛ば

大阪府 桑田 ゆきの

世の移りオレオレ詐欺も手を替えた

ソチで翔ぶ紗羅ちゃん世界に誇らしい

増税が春を遅らす寒い日々

いよいよ日本の力出す五輪

割烹着STAP細胞希望の灯

大阪府 野田 栄呼

ブレッシャーにならぬ応援実を結ぶ

厨房へ男退職後のゲーム

容姿より今は元気を掴みたい

幸せへ一歩いっぽの医者通い

電化して山積された薪が泣く

大阪府 初山 隆盛

思いっきり地球を突いた試歩の杖

一歩出ずれば想定外の風に逢う

句会ゆき歩く目標消化する

一族の血が生温い国を見る

老いひとり夜の影絵の中にいる

大阪府 米澤 俣子

スタップ細胞待ち焦がれてる若返り

半音を下げて呼吸はスムーズに

良し悪しをまだ聞き分ける両の耳

精いっぱい生きてこの先五里霧中

四季のない横文字いっばいの花屋

神戸市 伊勢田 毅

ぬくぬくの図書館で古い舟を漕ぐ

寒鮎の骨まで食べる古希の会

夫婦も他人時には痛いことも言う

鶯の声うつとりと野天風呂

十代があっけらかんとメダルとる

神戸市 白川 淑子

もう恋は圏外繋がらぬ電話

珈琲の香り私に戻る場所

あと少し夢を見させて下さいな

時々はチェック意地悪婆さん度

ほどほどの幸せそれが手強いぞ

神戸市 山口 美穂

こっそりと姿を消した老いた猫

毒舌が戻り恢復したを知る

ウォーキングいつもの人に会い安堵

一病二病三病口は達者です

どこか変年金下る税上がる

神戸市 山崎 武彦

世界一笑顔美人の妻と居る  
まっ白な兎のキャンパスに明日がある  
場の空気読めぬ男の一本気  
気付かれぬようにポツクリ逝くつもり  
縁側で他人扱いされている

神戸市 山田 婦美子

師の無事に心温まる年賀状  
芹の香の春を寿ぐ朝の粥  
いつの間にも古希を越えたか顔の皺  
一本の皺にも過去の自負がある  
何はなくとも健康揃う鬼遣い

明石市 糀谷 和郎

身の丈にちよつと背伸びの夢を持つ  
故郷の空気に触れて弾む毬  
吹けば飛ぶ蚊にも子があり親がいる  
帰還場所あるから今日も討つて出る  
磨かねば直き錆ついてくる心

芦屋市 黒田 能子

化粧完璧お出掛け用の顔になる  
両方の言い分なるほどと思う  
書くことがまだある人生の余白  
あっさりと認め失敗軽くなる  
真っ白なページへ筆が踊り出す

芦屋市 竹山 千賀子

ひらめかずA4サイズもて余す  
忘却の彼方に置いて来た誇り  
スマイルの隣にチャンス待っていた  
手術後の痛み和らぐナースの手  
健康法白寿の母が言う重み

尼崎市 市坪 武臣

金銀銅茶の間で弾むソチ五輪  
リストラのパパは決断主夫となる  
咲きたくて生きているのだ雑草も  
半世紀あこがれ続くサユリスト  
ふる里にまだお袋が居る至福

尼崎市 軸丸 勝巳

食べるのも街に出るのも不安な世  
旅の膳勿体なくも残す歳  
STAPよ早く早くと急かす老い  
雪おろし知らず炬燵でみかん剥く  
富士山に噴火はいらぬあの姿

尼崎市 春城 年代

遠い汽笛が耳底にある寒の月  
聞いて忘れる繰り返しても朝が来る  
夫の残したすべてが心和ませる  
鶴を折る亡夫の手先の器用さよ  
祖父の中庭さんかんの鈴なりに

尼崎市 藤井宏造

登り坂鋭角になり歩き出す

予報士がやや得意気に明日の雪

独り居は二度寝三度寝はばかりず

オレオレから助けてくれた通り雨

飲み友が手招きをする立ち飲み屋

尼崎市 藤岡りこ

就活にやっと笑顔を持ち帰る

モナリザの微笑みほどの当りくじ

ぎこちなく初孫抱く手見つめられ

バラエティー芸人だけが大笑い

介護するその優しさを煙たがる

尼崎市 山田耕治

コツコツと朝シヤンの香が抜いていく

ご丁寧に一覧表を載せている

先に出た若者ドアを引いてくれ

味噌汁が薄いと文句言わせない

先に寝た母裏口は開けている

加西市 金川宣子

カリスマのハンドバワーうさんくさ

今でしようカリスマ講師勝負時

再生へ捨て身のマウス人の為

知らぬ間に喪中葉書で消えていく

口ポットも嫌な仕事に油切れ

川西市 西内朋月

暴れ馬静かにさせるのは女

タッチするたびに少なくなる預金

献血の出来ない歳になつている

包丁の切れ味試す指の先

腕を組む貧乏神が離れない

川西市 山口不動

当分はネクタイ締める予定ない

飛び乗った女子専用に立ちつくす

孫達の名前まちがえブーイング

談判の強い味方に妻がいる

思ひ出はカサブランカの花に似て

川西市 米原雪子

おいしそう入歯でそつと噛んでみる

陸上げの魚踊つて皆笑顔

片付けの作業を止める古日記

オリンピックテレビから目が離れない

見馴れないスポーツ見れてオリンピック

三田市 石原歳子

朝一番驚いたのは雪景色

びつたりだ母の形見のワンピース

家計簿へ貢献します大根葉

病院で同志を得たと話し込む

後期でも後期になつた気はしない

三田市 上垣 キヨミ

感謝してのびのび生きる老春譜  
啓蟄に待ったを掛ける戻り寒  
窓開けて仏に見せる雪景色  
父と子が比べ合ってるチヨコの数  
自分史に綴る幼き日の記憶

三田市 尾崎 一子

震災の絆繋いでいる汀  
しあわせをお馬に乗せて来る賀状  
やんわりと愚痴の相手も出来る歳  
春の雪溶けて地中の芽が伸びる  
抱きしめる抱きつく命温いこと

三田市 北野 哲男

四分六の六が味方と楽天家  
じわり効く漢方薬のお世辞聞く  
まといつく蔓もやっぱり生きる術  
肩の荷をしはし下ろしている酒場  
ポストから霜見て戻る休刊日

三田市 久保田 千代

ポイントの切換えきかぬ生真面目さ  
世の中の音を感じて生きてたい  
好き嫌い微妙なところ揺れている  
あれこれと思う心に雪積もる  
スポットの中で自分を見失う

三田市 福田 好文

多兄弟知らず知らずに妥協癖  
世間体ばかり気にして狭く生き  
肩書きを病室までも持つて来る  
マドンナが逝って気抜きのクラス会  
バイキング体重計は見逃さぬ

三田市 堀 正和

一日のスタートを切るヨッコラシヨ  
ピーヒョロロこはのんびり春の浜  
本日のおすすすめメニュー試食する  
いい噂七十五日持ちません  
明日に向け紙ヒコキを折ってます

篠山市 酒井 真由

少女A脱兎のごとく炎の如く  
娶らぬひとへ末期の水を口うつし  
思いつきり叫んで愛に飢えている  
ベガサスを追うて小さなつむじ風  
まぼろしの愛を紡いで雪が降る

宝塚市 田中 章子

沖繩へまるで異文化見るような  
長寿の地なるほど思う食文化  
すさまじい古稀三十人の同窓会  
百聞は一見オスプレイの音  
戦跡にひたすら青の空と海

西宮市 秋元 てる

雪国の生れで冬の陽のとりこ  
皆出かけ辞書と紅茶と春の陽と  
顔見知りだけの人にも句を勧め  
卒寿にも小さな冒険要ると言う  
リハビリへ離れて従いて来てくれた

西宮市 足立 茂

出来ない親が子供にするしつけ  
呉服屋の社長は今も五つ玉  
飲むたびに企業秘密が盗まれる  
安いけどコロモばかりのトンカツ屋  
無駄話だけで終った打ち合わせ

西宮市 緒方 美津子

パソコンと競いはしない硯箱  
物忘れゲームのような日日となり  
一周忌心の喪服まだ脱げぬ  
庭の梅愛した父の葬二月  
歯医者よりやつと賀状が来なくなり

西宮市 片山 忠

スマセンだけが取り柄のずるい人  
根性の色紙ほかした定年後  
無精髭似合わないから無精髭  
寂しいと仲間に告げた日の迂闊  
アバウトだけどひとりじゃとても暮らせない

西宮市 亀岡 哲子

長寿へと望み大きく組み替える  
金紙のメダル貰ったことがある  
よう笑ろた一日だった灯り消す  
ハルカスの窓開け星を掴み取り  
鋭角に吹く二ヶ月のビルの風

西宮市 西口 いわゑ

地球の隅で泣いて笑ってかくれんぼ  
えんぴつと夢育んできたノート  
山茶花がきりりわたしも負けられぬ  
生きるのはゲームのようにとはいかぬ  
応分のしあわせでいいみかん剥く

西宮市 牧 淵 富喜子

美しい鳥が来ていて動けない  
震災の年に生まれた孫十九  
縁のない夕ウなぞ深夜聞いており  
口惜しさが無いと言ったら嘘になる  
シクラメン長い電話がまだ続く

西宮市 山本 義子

これ最後のジャンプになるか冬桜  
いま暫し恥かきながら生きるとしよ  
人間っていつ化けるのをやめるやら  
まだ女 かすみ草にも恋ごころ  
国なまりいつか話そう過去未来

西脇市 七反田 順子

雪国の仮設住いを思いやる  
半分こお菓子だけではありません  
公募展人間模様も見ています  
義理チョコも本チョコもない素浪人  
特攻隊語り部のない鹿屋基地

姫路市 古川 奮水

今年こそ張り切りながら如月か  
ローザンヌバレエ優勝いい春だ  
六甲山天然雪の綿帽子  
白鷺城黒田官兵衛街飾る  
お水取り春の絆に梅開く

奈良市 阿部 紀子

柿右衛門乳白色の余白の美  
生き甲斐は見る聞く食べる先ず元氣  
子を連れて税務署行って鉛貰い  
子の自立寂しいけれど我慢する  
富士山にダイヤモンドの日が昇る

奈良市 岩本 浩二

妻の槍的を外さず突いてくる  
雛祭り我が家にはつと春が来る  
仏壇の饅頭消える点と線  
バックカスと握手してます週七日  
凡凡と当たり外れの無い余生

奈良市 大久保 眞澄

ひなたほこ猫に教わる一等地  
救急箱探してる間に血が止まる  
義父逝つて墓地セールの手際よさ  
ガラポンははずれ世話役には当たる  
義理チョコ効果茶飲み友達ばかり増え

奈良市 加門 萌子

呆けるのはわたしが先と思し召せ  
夫から花束が来た夢の中  
段々と旅友減つていく悟り  
子や孫に威張る戦争越えて来た  
また快挙日本の頭脳誇らしい

奈良市 辻内 げんえい

メニュー表示幹事の苦勞ひとつ増え  
危ない橋渡らず生きる歳となる  
生き甲斐は孫の成長見る至福  
冷蔵庫より外で冷やせる奈良の冬  
早朝の電車の温さホツとする

奈良市 天正 千梢

川柳の種もひとつに絞つてる  
兄ちゃんはいちゃんらしい顔写真  
談話室喧しすぎてまとまらず  
一人寝は淋しきものよ寝付かれず  
日蓮さん今日も寒かる綿帽子

奈良市 米田恭昌

孫が早ヤリケジョになると頼もしい

口きかぬ子もメールには大きな目

気短の堪忍袋つぎだらけ

高齢出産何もはにかむ事はない

ヒートショック防ぐ手だての二番風呂

生駒市 飛永ふりこ

梅の香がけなげに春を呼び覚ます

米寿からストンと染みる言霊を

おはようを天へ届けるシクラメン

お互いがほどよい距離で手の温み

ふきのとうウフフと天へ背伸びする

大和郡山市 坊農柳弘

手の届く処に春を遊ばせる

思惑を見透かされてる春の雪

朱に染まるゆとり残して春がすみ

桃は移り気身ごもる術を風に問う

打ち解けてみれば気分は春うらら

奈良県 中原比呂志

金銀銅それを飛び越す合格証

予備校の努力へ今朝の速達便

白黒の世界で都会の弱い足

深呼吸あまい空気はよい知らせ

ミステリーツアーに詰めていく荷物

奈良県 渡辺富子

母が来る予感ふっくら煮る小豆

温度差のある愛ですが夫婦です

あれ以来妻は張り切り割烹着

車椅子花のトンネルンルンと

一円貨わくわく出番待っている

和歌山市 岩本美智子

立春の霞もやはり痛かった

鬼退治強くなれよと豆いわし

政治家の思考回路に灯火を

三寒四温差がつきすぎる温暖化

開会式やっぱりロシア大きいわ

和歌山市 上田紀子

税務署にすんなり通らない数字

切り株の芽が伸び明日を掴まえる

魂を撫でてやりたい日の疲れ

真実はひとつ世の中どうあると

パンジーと一緒に歌う春を待つ

和歌山市 喜田准一

一節の唄に人生鏤める

紐解いた歴史現世を映し出す

落ち込んでおれぬ人生峠道

元気かと幼き友が夢に出る

静観へ適度な距離を空けて置く

ゆつくりと歩いてタンポポと出会う  
和歌山市 楠見章子

ミニスカートが階段登って若さ  
あれこれ今熟年の真つ盛り

一枚のカード未来と遊んでる

銀河へと続くふたりのハイウエー

和歌山市 坂部紀久子

人生の足跡記念日の重さ

年金の幅の振り子が油切れ

在り来りの色を変えたい旅カバン

消印有効亡夫からの返事待つ

一番解り一番解らない自分

和歌山市 武本碧

ミレ一の絵真似して気取る野良仕事

ユニークなご縁で続いている二人

父母のDNAかよく笑う

日記帳の嘘はとくに読まれてる

戻りたい橋を記憶が通せんぼ

和歌山市 玉置当代

松の内までは静かにする喪中

川沿いを日課と励む歩数計

神々が宿る山から祭り笛

三の矢にちょっと油断をした誤算

火の海を渡った母の反戦歌

和歌山市 土屋起世子

オレオレに負けない策を練っている

春のドア明るい日射ノックする

置き忘れた財布三日も儉約す

加齢とは気付かず免許更新中

少し気を抜いてふんわり玉子焼き

和歌山市 福本英子

鬼へ撒いた豆でも野鳩嬉しそう

坪庭も雪化粧して友を待つ

他家さまの子に金をとれ銀をとれ

大雪に今朝はメダルの話ゼロ

和歌山市 古久保和子

赤ペンを握った鬼の目がかすむ

削除キー欲しい日もある早寝する

小学校で覚えた九九が立ち止まる

不器用な夫が作る粥の味

定位置に塩も胡椒も有る平和

和歌山市 堀富美子

一病へ嫁の温さのちらし寿司

逝く順序間違えたのか死を悼む

その日まで今日のリズムで終りたい

美しい山ばかり見た子のギャップ

子のテリトリー疎ましく嬉しくもある

和歌山市 松尾和香

海南市 堂上泰女

持ち前の器量脳にも風入れる  
耐えて生き糧にしている母の笑み

山仕事父の楽しみ雨打つ暮

不器用な人生趣味に助けられ

富士山は五合目老いの山登り

和歌山市 松原寿子

ありがたい言葉が深く胸を刺す

さりげない瞳が的を突いてくる

風花がふわふわ自我を消してゆく

返信へ一首を添える友がいる

春風といつもの道で握手する

岩出市 藤原ほのか

バランスの極み煌めく夫婦星

色彩も添えてバランスとっている

はかり売りして私の夢紡ぐ

じつくりと煮込んで旨み引き立たす

遠い日の記憶迪れば母の声

海南市 小谷小雪

衣更着の五臓に沁みるしじみ汁

欲はまだマグマだまりにあるらしい

蘇生器のありかを脳にインプット

万金に相当します子のメール

母の言葉また立ち止まらせてくれる

何が良いかとデバ地下の息子から

黒潮の海から春のプレリユード

成長をしたか拗ねなくなった孫

水仙の健気笑顔を誘い出す

皮算用の年金へもう予約

紀の川市 宇野幹子

断捨離へ十二単を脱いでゆく

ポケットの中で温める正誤表

せっかちな釘で急所をまた外す

頼りない男と三日目のおでん

スマホ抱きしめ少年の吹き溜り

紀の川市 北山絹子

二人して明日のドラマを組み立てる

飛ぶ鳥に空の広さを問いかける

ガーリックに委ねた父の長寿法

紛争の火種が今に飛んでくる

ちらほらと花の便りが届く旬

紀の川市 辻内次根

カビ削いで食べる丸餅のぜんざい

部屋に張る紐一本の生乾き

生きていて緊張がある朝の霜

妻の手をとって記憶を散歩する

なめ味噌の味で元気が目を覚ます

田辺市 岡本昇

糠漬けは和食文化の始発駅  
糠床にしつぱり漬けた人間味  
色褪せたのれんに自負の味がある  
上棟式重いローンの第一歩  
後添いという幸せの女坂

橋本市 石田隆彦

二歩引いて妻の買い物運ぶ役  
旅に出て知る人の情風の色  
軽い怪我のうち論してくれた母  
白旗はまだまだ上げぬ一万歩  
個の力倍倍になるマ스ゲーム

鳥取市 池澤大鯨

無口ならいっぱい注いでやればよい  
喋りたい人に喋らせておけばよい  
しゃべらないシャイなお方はお人形  
留守の居間テレビが喋りつつけてる  
深夜便きょうも独壇場つづく

鳥取市 奥谷彩子

枯野にも春待つ地下の根っこ達  
生き生きと生き支え合う手が温い  
ノラの夢叶わぬままに老いた靴  
ジオパークの海眼下見下ろす父母の墓  
友との絆確かめ合って長電話

鳥取市 加藤茶人

人間ドック酒もタバコも止めなはれ  
ハートには夢ポーチにはインシユリン  
老いて尚税金払う身を誇り  
無理するな持病が俺の羅針盤  
どちらでも良い尊厳死安楽死

鳥取市 岸本宏章

先ず複線新幹線は夢の夢  
祝日の日の丸見るとほっとする  
横着の味ロポットはまだ知らぬ  
ガリ勉の知識忘れるのも早い  
最悪のケースも覚悟して挑む

鳥取市 岸本孝子

立春を過ぎてこころは桜待つ  
あれだけの人も歯医者はいやと言う  
有り難や三度三度の食事待つ  
歯応えのある物食べて脳鍛え  
ほっとする椅子が待ってる縄のれん

鳥取市 倉益一瑤

だとしても一たす一は二にならぬ  
隕石よあれは宇宙の忠告か  
失敗のみやげ話があたたかい  
子守唄戻らぬものを追っている  
八起き目は小石握って立ち上がる

鳥取市 鈴木一弘

迷い舟星のリードで港入り  
振り向けば空席目立つ指定席  
おめでとう賀正うれしい卒寿はる  
水鳥は名残りのこして旅をする  
父母のリードで育つ優良児

鳥取市 竹口清信

預金残のこる寿命で割ってみる  
特定の秘密保護なら我が家にも  
一人なら自由でいいなとも言えず  
飴ばかり鞭は一つも無い我が家  
いい事が続き過ぎて心配だ

鳥取市 土橋はるお

風評が流れる橋に立っている  
お茶が出そうしばらく正座して待とう  
ソチ五輪先ずは羽生に期待する  
孫の手が痒いところを掻きに来る  
無礼講にのんだお酒は旨かった

鳥取市 永原昌鼓

風向きで天狗も鼻を低くする  
二度とない今日しつかりと弾まねば  
寒椿もうすぐ春を告げている  
春一番吹いて凍土がゆるみ出す  
介護の手空いて緩んだ老いの籠

鳥取市 中村金祥

孫女房女房よりも世話をかく  
旬のもの供え氏神おもてなし  
タブレット孫に習って脳磨く  
倍返し期待は出来ぬ消費税  
年金暮らし景気支える策がない

鳥取市 夏目一粹

自転車に乗れなくなつて歩いてる  
席ゆずられて遠くまで行けそうだ  
お月さま連れて帰って千鳥足  
やさしいと言われ笑顔を絶ちました  
ありがとうすぐ言う人のもどかしさ

鳥取市 西川和子

ライバルがそこに居るから惚けられぬ  
追い付けばまたライバルは先になる  
私も三毛も地球の上に生かされる  
丸い地球で争い事は似合わない  
争いへそのエネルギーを輪にしよう

鳥取市 春木圭一郎

生活のリズム生まれる家事のコツ  
家事仕事終わりを決めて手際よく  
イクメンは家事の時間も自在なり  
朝時間決まった所作を繰り返す  
焼き立てのパンで笑顔になる人も

鳥取市 平尾 菜美

砂漠道エゴと歩いてきりが無い

日々努力おかげか野菜よく売れる

嫁姑レシビ笑顔にぶつけ合い

たぐり寄せ子等へと灯す母の愛

満ち足りて言える努力にありがとう

鳥取市 福西 茶子

腰の位置高くないので純和風

延命か自然か言うてくれぬポチ

見え見えの世辞にも会釈してしまう

割烹着私は妻の顔で着る

貫禄は付いたと語る帯の位置

鳥取市 前田 楓花

芝居でも耐える女は似合わない

愛犬がボスの私に媚を売る

物差しは短いけれど生ききった

人様に一番いい物をあげる

義理よりも情で生きてる山の村

鳥取市 吉田 孔美子

凍る朝不動姿勢で送り出す

凍雲が落ちない限りウォーキング

窓叩く凍雨 娘は最終か

あれを生きていた シベリアでの凍餓

牛肉をもつと食べよう春や春

鳥取市 吉田 弘子

立春へ気分だけでも心地よい

皇后さま寒水仙に重ねみる

妻母祖母三役しかと意識して

喜怒哀楽すぐ顔に出る未だ未熟

いつの日もありがと感謝締めくくる

倉吉市 猪川 由美子

原発が台風の目だ争点だ

元総理と組み選挙戦異様だね

親子鑑定ずつと育てて今更ね

腕一本膨大な額稼ぎ出す

憂さ晴らしに毒混入は許せない

倉吉市 牧野 芳光

北風に毛虫も体ねじ曲げる

掌の温さ夢の続きを追ってみる

不発弾頭の中に降ってくる

刺し違えでできる覚悟はできている

灰色で包み込みたいことがある

倉吉市 山中 康子

没頭は息子夫婦のおくりもの

没頭は無我の境地で心地よい

没頭という最高のおとし穴

没頭は世間を忘れ忘れられ

付き合いは任せ没頭する八十路

米子市 後 藤 宏 之

回復の音がかすかにする景氣  
しがらみが静かな音で寄せてくる  
あの世でも値上げのもよう消費税  
ほめられた術後の音に大笑い  
リーダーはとにかく米を食べている

米子市 後 藤 美恵子

窓際が居心地のいい鉢の花  
割烹着家事をするためだけじゃない  
愛の球いくら投げてでもファールされ  
明かり消え限界村となつてゆく  
汚染水蓋した場所に流される

米子市 竹 村 紀の治

おめでとうひとり祝う七十九  
ほんやりと帰る港の灯が点る  
福豆をつまみに鬼の手酌酒  
我儘も言える相手が居てなんぼ  
ソチ五輪睡眠時間捧げます

米子市 中 原 章 子

人並みの裏に上中下の意識  
目の前の壁を扉にするチャンス  
死ぬまでは青春希望捨てられぬ  
奥歯かみ腹に力を入れて待つ  
限られた歳月だから愛おしい

米子市 成 田 雨 奇

賢げなやつらがみんなストレスだ  
目薬をさして一日終つたなあ  
ひと粒の飯を大事に食う雀  
熊の血を引いたか冬はよく眠る  
事務力はあるが生活力がない

鳥取県 石 谷 美恵子

初詣でぐらい神さま信じたい  
私からわたしに選ぶ旅みやげ  
笑い声立てて命をふくらます  
和装展酔うてしびれる女坂  
手袋は嫌い如月の手が荒れる

鳥取県 岩 崎 和 子

風邪引いて気持載らずの恵方巻  
入浴も出来ずちらつく雪眺め  
積雪が全く無くてほっとお茶  
残すもの無いが家計簿日記帖  
海辺の恋佐藤春夫の歌が出る

鳥取県 齊 尾 くにこ

二つ三つ抜けて百点には遠い  
いつまでも続くはずないパラダイス  
嘘でなく事実でもなく気持です  
言い訳をしてほしいのになだ無言  
しあわせの近くにいと知っている

鳥取県 竹 信 照 彦

雪搔きをせぬと体力落ちてくる

食っちゃ寝であちこち錆が浮いてくる

老化には負けてはおれぬさあ歩く

柳友の若さを句会からもらう

雪が舞う負けず芽を出す花も咲く

鳥取県 鳥 越 鬼 一

水仙の花も香りも雪の中

寒に知る温度差1の暖かみ

雪国じゃ20センチは小雪です

温暖化ブレイキかけよこの寒波

あしたが在れば未来はいらない

鳥取県 西 谷 悦 子

人生いろいろ消しゴムいつも要る

過ぎ去れば凸凹道も愛着が

まだ生きるドライフラワーにはならぬ

書きながら心の奥を探っている

こころ美人が一番と癒してる

鳥取県 松 川 行 男

ホクホクしてるおみくじ引けば吉ばかり

エビス様祝辞にくるのを待っている

手を合わすそこに神様居ったはず

方言でいい言葉おもてなし

泣いて生まれ笑って死のう人生だ

鳥取県 山 下 節 子

今の世は優しい人も信じられん

手土産は幼き頃の母の味

人生ゲームルールどおりに上りたい

老いてまだ現役でいる台所

笑い皺深めて祖母は百を超え

鳥取県 山 本 正 光

日日暮らす家族の愛に気付かず

頑張ってます好い爺と言われたく

ワンマンと言って家族が攻めてくる

まだ呆けぬ終点の無い趣味ひとつ

米寿です片思いです許されよ

松江市 小 川 注 湖

寝転んで川柳つくる幸思う

和食ブーム健康メニュー世界飛ぶ

世界地図広げてテロの国思う

平成の子ショートパンツの脚長い

経済学空気ただとは言えぬ世に

松江市 錦 織 禮 子

十代の台頭五輪進化する

信号ヘダツシユの力失せている

ひとときの炬燵充電したらしい

即席の舞台に和むステーション

果てしなくロマンを届け陽は落ちる

松江市 藤井寿代

繩とびの輪から夕日が消えたまま  
浮き雲に明日を問えばケセラセラ  
ほんやりと見えてきた私の未来  
半音を下げて夫がついてくる  
やっと今なくてはならぬつつつかい棒

松江市 松本知恵子

足音の私知ってる友と会う  
大寒の部屋にきんきら陽が届く  
大橋を渡れば白い出雲富士  
そわそわと山の新芽の伸びる頃  
君を待つ本屋でしばし拾い読み

松江市 松本文子

身代りになれずごめんね娘の病氣  
残り火をかき立てもせず注ぎもせず  
憧れた人はさっさと逝きました  
一滴の涙激しい滝になる  
白鳥が二羽雛たちは何処にいる

松江市 三島 崧 丘

妻というライバルが居て今がある  
小春日の風はシフォンの匂いする  
這い上がる谷が男の貌にする  
図書館へ心美人に会いに行く  
口止めをされたお酒の独り言

出雲市 石倉美佐子

弟のように思うた人も寒空に  
箱庭の橋も同じ陽があたる  
夫と同じ小指を一寸火傷する  
一日を杖を突かずに歩けたら  
オリンピッククの涙々に私も

出雲市 伊藤玲子

初午の太鼓に桃もほんのりと  
匂袋ポッケに臥せる友見舞う  
向きあえばほっとけないわ老い哀し  
掘り返す鍬の先から春の声  
道草の楽しさ淡い恋拾う

出雲市 小白金 房子

一つ星拜む夜明けの道を踏む  
ご神灯迎え戴く朝の森  
合せ鏡母娘で選ぶ春の色  
寒の水仕込む我が家のみそづくり  
掛軸も替えて花鳥へ春を見る

出雲市 岸 桂子

言葉一つに今日は反省させられる  
夜行バス明日に向う客になる  
先輩が掲げた旗を守らねば  
ポランテア終り涼しい風に会う  
生きている夢中になれるもの抱いて

出雲市 多久和 敬子

広島市 岸 本 清

どこ迄も優しい雲に従いていく  
ほろほろのハート繕う木綿針  
血圧がどんどん上がる待ちぼうけ  
晩学の机に眠り誘われる  
本を読むだんだん心広くなる

出雲市 竹 治 ちかし

今日もまた似たような違う日を終える  
朝酒を妻が酌するお元日  
朝酒が飲める程度のお正月  
飲んで寝て起きて飲むからお正月  
昨日のウロコを貼っておく日記

出雲市 富 田 蘭 水

老いるほど哲学の味一しきり  
川柳の歴史も知らず天をとる  
活断層該当平和狂う日々  
生き方を大内兵衛の額が押す  
観光の続く出雲路大遷宮

島根県 伊 藤 寿 美

山桜桃<sup>やまざくら</sup>亡母の匂いを連れてくる  
揺り椅子と亡母の匂いが残る部屋  
寒の水汲み置く亡母が居た昭和  
過疎バスは風とわたしとランドセル  
独りになってしまった森の樹の根っこ

ああ僕もこんな感じか冬木立  
百均の袋を提げて乗るタクシー  
好奇心財布に入れて街に出る  
スーツ着て地べたに座るヤングマン  
お隣も夜更かししてるソチ五輪

竹原市 岩 本 笑 子

川一つ隔てて陽差し届かない  
生命線時々なでている夫だ  
コーヒータム今日一日が無事終る  
夕陽朝日畑に感謝して夫よ  
息抜きも兼ねてバスに乗ってます

宇部市 平 田 実 男

バイキング皆食べ過ぎた顔で出る  
不祥事をマニュアル通り詫びている  
淋しさはツーカーだった友が逝き  
冷や飯を見返す時のバネにする  
清い票だけで当選出来そうです

東かがわ市 川 崎 ひかり

いい予感やる気スイッチオンにする  
ホップステップもうすぐつぼみ開きます  
地産地消費真心添えておもてなし  
落ち着けと柱時計が時を打つ  
夫婦でも全て見せてる訳じゃない

松山市 古手川 光

未だいける思うが足腰が謀反

面の皮少々厚くして生きる

呑気にしてゐる訳ではないと蝸牛

スマートフォンに弄ばれているヒト科

民放のアナ育ててるNHK

松山市 宮尾 みのり

まだ若さ残るか歌う早春賦

せめてもの花のたよりをたぐり寄せ

悟りには遠く未練がまだ疼く

割り勘へ割り勘なりのエチケット

冬眠をしてしばらくはやり過ぎ

大洲市 中居 善信

天安門あれから好きになれぬ国

人間の深いところに棲むマグマ

沢田研二の声に艶あり気を貰う

強いものに巻かれる個性細すぎる

臆病でまだ覗けない甕の中

西予市 黒田 茂代

孤独が好きなんです月もわたくしも

いつも鬆が入るわたしの茶碗蒸し

母の糸通らぬわけが今わかる

見栄捨てて素直に聞こえないと言う

耳学問すぐに誰かに話しく

高知市 小川 てるみ

紅梅二輪庭にほんぼり灯すなり

思いの外主婦を泣かせる指の傷

足腰が達者なうちにパスポート

ごめんねが言えず唇かんでいる

忍耐が寄る年波になえて冬

高知市 小澤 幸泉

曇り空指で明日の夢を描く

自分史にあふれた過去がしゃべり出す

子どもらの育ち明日は何もない

休日の酒と料理と雨の午後

病床の椿春まで待てるかな

唐津市 坂本 蜂朗

髭を剃り髪梳く今日の医師美人

散髪のはげは背筋も伸びている

趣味の会まだ生きるぞと背伸びする

補聴器を外して今日は読書する

散らかった書齋で我を取り戻す

唐津市 山口 高明

再稼動薦める識者阿世の徒

横文字で書いた表札子の新居

心から笑える明日くるだろか

幟絵の鐘馗がにらむ五月晴れ

横顔が奇麗だなんて褒め上手

熊本市 永田 俊子

百歳の胸に川柳塔の返り花  
やさしさに甘える長寿の偏頭痛  
過去未来高齢者らの玉手箱  
出し切った力はこれだけノラの唄  
影法師も疲れたらしい冬の道

熊本県 岩切 康子

用心のマスク終日愛用す  
寒満月私の愚かさ覗いてる  
二本杖それなり筋の凝りが出る  
三食の支度苦にせず脳回路  
苦の事情自分慰め立ち向かう

札幌市 小沢 淳

至近弾どかんどか人も他人事  
仕合せな人の吐息を聞いている  
もう少し煮込むと味の出るわたし  
伝来のつぼがひび割れ座が和む  
転んでも誰も起こしてくれません

札幌市 三浦 強一

LED余命比べて止めにする  
後期高齢話題に消えていた色気  
人畜無害人妻も寄ってくる  
蓄財はないが蓄思い出がある  
黄泉へ行く余力はちゃんと残してる

黒石市 相馬 一花

深爪を切ると湧き出る猜疑心  
手探りで娑婆を駆け抜く駄馬の足  
悪魔から天女を守るバリケード  
戦争を知らない軍事評論家  
ほどほどの意味を知らないストーカー

弘前市 浅田 隆樹

雪かきの背中に妻がタオル入れ  
雪解けの水雪かきの汗知るや  
厳寒の朝亀になり鶴になる  
近頃のイチゴは妻と半分っこ  
鼻水も出した女は信じます

弘前市 今 愁女

朝 昼の雪掻き春を掘り起こす  
菓舗にはもううぐいす餅にさくら餅  
暦は春、ここいちばんの寒気団  
窓辺には金の花びら福寿草  
百歳を独り暮らしのたくましさ

弘前市 岡本 花匠

五十年ぶり邂逅の貌驚喜する  
囁む音の倅せ語るすこやかさ  
ガスコンロ替えて安全妻の味  
カラオケの人生観に酔い痴れる  
不躰な雪にとまどう春四月

弘前市 須郷井蛙

青森県 松山芳生

答案紙この一枚が運不運

弁当に今日の合図が書いてある

広告の裏は使わぬ現代っ子

欲張りは決してしないカスミ草

参観日ママの合図で二重丸

弘前市 高瀬霜石

ほくだけのために咲いてるような梅

三食を二食ときどき微調整

憎からぬ奴め ケチャップ・マヨネーズ

ハイハイと言っているからハイじゃない

馬耳東風背広を脱いだだけのこと

弘前市 高橋洋子

真冬日の青空背筋ピンと伸び

節分を待つて色紙を春の絵に

長電話都合よく来た宅配便

ケイタイに閉じ込めました逝った友

物忘れ時々あつて黄昏れる

弘前市 福士慕情

振袖はみんな自前の顔をする

居睡りか聴いているのかクラシック

今が匂思う先から老いてゆく

気配さえ感じさせない友の自死

死亡広告切り取っておく予定表

天皇が通る昭和がかしこまる

胸襟を開き樹海と対峙する

一冊の句集が繋ぐ人とひと

ひと粒のなみだが鬼を黙らせる

讚美歌のリズム神へのエピソード

さいたま市 星野育子

天神の梅に願かけサクラサク

初めて子に褒められ引越しをする

世の仕組みを知って軸足が揺らぐ

原発も辺野古も札束ではノー

男性が変われば増える女性議員

東京都 岸野あやめ

多情多恨知る人は知る世の掟

わたくしのカルテは五センチの厚さ

悲しみは心の底に九十歳

齢九十頭ふらふら世の習い

買物の前にたしかめてる財布

東京都 まえで とよこ

鬼のお面わつと泣く児をさがしてる

福豆のほどよく炒れてお面つき

選挙カー「本人です」の旗へ雪

選挙演説ききいる傘へ雪つもる

ソチ開会式ころにうかぶ六年後

横浜市 小野 旬多留

人っこの匂いがしない北の端(下北雪の旅大間)  
ストーブ列車義歯にはするめ無理でした

バスガイドラジオ代りに聞く眠り

豆まきも話題にならぬ夫婦箸

くだらないテレビ離れるソチ効果

横浜市 菊地 政勝

呆けてるがカネ勘定は合ってます

ストレスを増やす考えほどほどに

日向ほこ体内時計遅れだす

長生きはいつまでなのか俯瞰する

清貧の庭に万両頼もしい

可見市 板山 まみ子

ご先祖のルーツネットで調べあげ

細胞よ元気できてと肉を食べ

大寒に冬眠したい灯油高

ファイナレはどうなることか老い二人

君が代が聞こえてこないソチ五輪

犬山市 金子 美千代

除菌殺菌免疫力も弱くなり

十代のソチ答も並はずれ

寝たきりの母がほどよくボケて良し

年だからなんて言い訳しなくて

受付をまかされ笑顔スタンバイ

犬山市 関本 かつ子

張切つて出掛けてみても三千歩  
腕組みをされると駄目かなと思ひ

掛持ちの受験に鈴が忙しい

子供等と望遠鏡の視野でいる

チョコよりもお酒気の利くお嫁さん

愛知県 早川 遯行

妻の後無言でカート押しながら

我が家にも手摺がほしい梯子段

がたがたと昭和の音で開く雨戸

掃除の手臍繰りのある本に触れ

ピンボケの写真をどうもありがとう

第33年度 夜市川柳 課題と選者

	題	選者	出句締切
第1回	無駄	稲村 遊子	6月20日
第2回	避ける	村上 氷筆	7月20日
第3回	化ける	鴨谷 瑠美子	8月20日
第4回	転ぶ	矢澤 和女	9月20日
第5回	策	岩田 明子	10月20日
第6回	こだわる	三宅 保州	11月20日
第7回	打つ	川上 大輪	12月20日
第8回	傾く	日野 愿	1月20日
第9回	吐く	高瀬 霜石	2月20日
第10回	勘	黒川 孤遊	3月20日
第11回	横	田中 新一	4月20日
第12回	狂う	小島 蘭幸	5月20日

ハガキに3句(投句料 1年分 3,000円)  
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2丁16-3  
河内 天笑 宛

# 川柳塔の

## 川柳讚歌

(112)

木津川 計

昨日の心きようは少うし前を向く

小林 わ こ

懐しの高峰三枝子は「湖畔の宿」で古い手紙を「昨日の夢と焚きすて」たのだ。しかし井上靖は古い日記を焚き捨てたところから、佐藤春夫をして激賞せしめた出世作「獵銃」を書き始めたのである。

死の前にした母から「焼いて頂戴」と渡された母の日記を蕎子は読んでしまった。「をぢさま、穰介をぢさま」と今は亡母の不倫相手に娘は女の業に涙して手紙体の名作を井上靖に書かせたのだ。わこさん、「昨日の心」を何にせよ生かして出発するのです。

ぎりぎりの賞味期限のおすそわけ

安芸田 泰 子

「ぎりぎりの賞味期限」の品を泰子さんがおすそわけしたのか、されたのか、で意味は異なる。前者なら、腐らすのはもったいない。日頃のお札、と気が咎めたが差し上げてはっ

とした。後者なら、呉れるのならなぜもっと早く呉れないのか、在庫一掃めいた先方の意図が面白くない。上げる方、貰う方、おすそわけは難しい。しかし余日のある賞味期限の品ならこの句にならない。泰子さんは僻目の上にも川柳がなり立つことを心得ている。

街に出て杖つく人の多いこと

山 本 蛙 城

僕も杖をつき始めたから蛙城さんがよくわかる。こんなにも杖に頼る老人がいたのか。

そんな老人を描いて読売文学賞受賞詩人・天野忠さんの「路上」にも同感する。

「よく通る路で／よほよほした老人とすれちがう。／おや／あの人はまだ生きていたのか／と思う。／そしてホッとする／（アレにはまだ間がある……）／よほよほした老人もチヨロリとこつちを見て思う。／（でも、どっちが先か知れたもんじやない……）」

前から横今やうしろに居る夫

古今堂 蕉 子

蕉子さんの快調がこうも続いては困る。この「讚歌」が蕉子オンパレードになる。

亭主像を描いて秀逸。恋人像はどなたの句だったか、「レストラン飯屋屋台と恋進む」を名句とするが、亭主像を年代経過でとらえてこの句は古典になろう。さる日、僕は一人

語りを終えて自著のサインセールをしていると蕉子さんが挨拶して下さった。人品いやしからぬご主人が確かに後ろに居られた。

結び目の固さは母の愛だった

鴨 谷 瑠美子

死別は別に、故あって幼少時、母と生別した男の子は母を慕う。そんな子が作家になると少なからず、女性を美化し、情欲でなく純愛や献身の対象として描く。

「愛染かつら」の川口松太郎、「君の名は」の菊田一夫は共に母の顔を知らないまま育った。長谷川伸に水上勉、寅さんも母を恋い続けた。「母性と純愛」の係わりだ。柳田国男の「妹の力」に似た母の力の結び目の固さ。

内視鏡で覗かれている罪と罰

柿 花 和 夫

女体の神秘にめざめた僕は中学生の頃、衣装を透して裸が見える眼鏡はないかと真剣に思った。恥ずかしのわが、キタ・セクスアリスである。

閻魔大王にもその気があったのではないかと僕は勘ぐる。大王は浄玻璃鏡で亡者の生前の行い、そのすべてを見る。そのついでに……。誰に限らず人間は罪深い。和夫さんがどんな罰を受けたのかを僕は案じる。

〔上方芸能〕誌発行人

# 新川柳鑑賞 (26)

麻生 路郎

旧友を訪えば脇門くぐらされ

(一 浪)

旧友を訪ねたところが、自分の知らぬ間に、産を成して堂々たる邸宅に住んでいた。そして、「まあ上り給え」と脇門をくぐらされたと言うのである。オヤオヤ、こんなことなら訪ねて来るんじゃないかと、いささか侮蔑と羨望を感じたと云う句である。

落ちぶれた友へお櫃のまんま出し

(小松園)

友情のこまやかさがよく出ている。「お櫃のまんま出し」がこの句のいのちである。落ちぶれた友のガツ／＼して喰べている情景が眼に浮んで放れない。

三等を見てたら二等で来やがった

(谷 水)

久しく会わない友を駅のプラットホームに出むかえた。

東京へ出て、出世をしていると聞いたが、大したことはあるまいと三等車とまるところへポヤッと立って待っていた。やがて汽

車が停った。

「オーイこだ、ここだよ」

と云いながら二等車から降りて来たというのである。スマートな風采でボストンバッグを提げている友を見た時、田舎にすっ込んで自分の姿のみすぼらしさがなさけなかつたのであろう。

「来やがった」と云う語は下品な言葉ではあるが、この場合の二人の關係がこの語によってハッキリあらわされていると云えよう。

俺の齡桶なら輪替える自分

(柳 葉)

とうとう停年が来た。一寸疲れも覚える。シヤニムに闘つて来た人生に対して反省したのである。この句を読むと一抹の淋しを感じさせられるではないか。

そうだ。輪替えて余生を大いに楽しむ必要があるらう。

おまわりさんを若いと思う程に老け

(不 二)

おまわりさんが立っている。学校を出たばかりの若者にしか見えない。若いなア、あんな若さで、巡査の仕事が出来るかしらと思つたのである。ただそれだけである。ただそれだけであるが、この句からは巡査よりも、むしろ老人の心のうごきがハッキリとうけとれるところに興味がある。

箸を割る手つきに老いは争えず

(茶 仏)

軽いスケッチの句であるが、一抹の淋びしさが漂っている。自分ではそれほど老いこんだとは思ってられないのであろうが、ハタから見ると、箸を割る手つきさえ、いかにもたど／＼しく、矢張り年の加減だंनाと感したと云うのである。

お前はまた若いと理屈負けかかり

(文 秋)

若い男はなか／＼負けてはいない。「でもそれは……」と理路整然と論じて尽きるところがない。

「そ、それは君の云う通りかも知れないが、それは一つの理屈であつて、現実はそのようではない。いずれはそれが判る時代が来るよ。君はまだ若い」と最後の逃げ路でイキをついたのである。大ていの論議はこんなところで落ちつくものであることを巧くつかんでいる。

風船の残念乍らしなびて来

(薩 城)

ただ単に風船がしなびたと詠んだのに過ぎないが、構成上擬人法を用いて「残念乍ら」と表現したところに句の生命がある。しかも風船のようにプラプラしているうちに、いつの間にか、朽ちはててゆく人間性を諷刺している点を称揚したい。

# 自選集

小島蘭幸

みかんむくみかんの匂いする妻よ  
大雪の中を出て行く趣味ひとつ  
僕は泣く情熱という輪の中で  
復活の証しの赤い帽子です  
師の句碑と一緒に撮ってくださいか

新家完司

くたびれたスーツ現役記念品  
法律に触れてはいない大欠伸  
だいじょうぶ自分の守りはまだ出来る  
春はまだ峠の向こう膝疼く  
ブータンへ春を迎えに出かけよう

恒松町紅

よたよたと杖が離せぬ部屋の中  
うっかりとしているうちに日は過ぎる  
元氣そうですねと遠い便り来る  
ペン立てがいい句作れと言っている  
盃が持てる老骨小さな欲

津守柳伸

花嫁の父が緊張する挙式  
祝福の鐘は二月の春日和  
風船と鳩大空に舞うサブライズ  
留袖のスピーチ二分腹七分  
ご両親四人揃っている挙式

遠山可住

十七センチの雪東京が動かない  
一流という名に騙されやすく出来  
再会の握手いのちを温め合う  
俺が先に死ぬ筈だった冷蔵庫  
若かった辞書に介護の文字が無い

都倉求芽

定期便のように親日派の寒気団  
屋根の雪ずしんと甦ってくるニュース  
間接照明影法師がおらぬ  
ペランダは枯葉 南の窓は春  
非常口に一番近い病室で

土橋螢

中天に月を浮かべて凍りつく  
取りあえず頭を低く会釈する  
トランプでリハビリというゲームする  
もうすこし行くと地獄が見えてくる  
冷凍の蟹を解凍して食べる

西出楓楽

前 たもつ

紫の気品に負けて赤を着る  
今夜のおかず鱈にしよう春立つ日  
ひと言が不足をしたり余つたり  
飾りすぎた言葉でついた深い傷  
引き算と割り算ばかりする余生

仁部四郎

政岡 未延子

明治からを学んで戦後民主主義  
憲法が口語だ戦後民主主義  
皇室が近づく戦後民主主義  
もう少し節度が戦後民主主義  
育てよう信じて戦後民主主義

波多野 五楽庵

三宅 保州

たった一人の女を想う冬の海  
足萎えてはずまぬ穂をもたされる  
ほころびた心をそつと縫い合わせ  
雪しんしん恨みが少しずつ消える  
哀しみの深さへそそぐ月明かり

林 瑞枝

宮西 弥生

お神楽へ名医笑つて手を合わす  
ソロバンを避けて掴んだ青い鳥  
温故知新風が想い出連れてくる  
悠々と雲に序列の無い流れ  
恋をする位置は月ある舟溜り

五体点検朝きつちりと二十分  
一生分飲んだ盃箱に詰め  
いつからか土を忘れた両手見る  
八十年やつと自分の道が見え  
お見合いから神に守られ金婚式  
スポーツの種が芽生えるおうらんこ  
艶のある声でアルバム語つてる  
サムライを引きずっていて肩が凝る  
手から手へ女系が繋ぐ雛の餅  
フルムーンはつくり寺へ行ってきた  
足して二で割り切れません妥協案  
母さん救けてと言える母さんもう居ない  
ハードルをいったん下げてみませんか  
月夜の蟹も私も命削いでいる  
順不同だろうと思う余命表  
楽にならなると損ないばかりする  
意識の範囲に生きて還付金  
縦糸の強さにはころびが笑う  
酔いさめて女聖女の顔になる  
西成を出た人と会う本気

蛭死す

八木千代

暗渠にされた蛭の川を知っている  
コンクリートでも川浪は立っているよう  
捌け口はひとつ海へとまっしぐら  
迷い出た蛭わたしのてのひらに  
蛭死すまわりに明り漂たなづわせ

両川洋々

化け切れぬ尻つぼきれいに洗つとく  
人ひとり死んだら予算付きました  
明日はまだ生きるつもりの未来地図  
ケセラセラ金は無いけど死にはせぬ  
男でしよ萎えた五感に濁を入れ

板尾岳人

豚の爪真赤に染めて旅立たせ  
もしかして地獄の割れたのはきのう  
公園のゴミ箱にあるのは未来  
懐に聖書を抱いて行く高野  
侘び寂びの言葉一つもない聖書

奥田みつ子

同じ月同じ想いで眺めても  
道端のちさい花にもある誇り  
梅咲いていつきに春の庭となる  
デスマスクどうなろうとも今生きる  
八十路来てやっと自分が分かりかけ

河井庸佑

スランブの闇焦らずに耐えて抜け  
親友の心読み切れないで逆恨み  
組み立てて部品が残り悩ませる  
転勤で住めば都と根を下ろす  
一筋縄で行かぬ相手と身構える

川上大輪

不束な娘未だに不束で  
コンマ以下の長蛇の列に僕もいる  
嘘ついてまた人間に戻される  
腐敗臭のするプライド捨てなさい  
面倒な事は聞きたくない微熱

小西雄々

頭陀袋中から鬼の声がする  
二度三度魔女が乗ってた羅漢の手  
背伸びして誰にも見せぬ隠しごと  
恋人の欠伸に紅茶まずくなる  
蛇穴を覗く勇氣は持っている

斉藤 焔

梅一輪咲いて茶の間を和ませる  
そして花束をしっかりと抱く渚  
赤い実がぼとりと落ちていく別れ  
文学の森に心を遊ばせる  
春雛びよびよいのちの音を抱く

久津抄

(つづき)

熱海市 三谷圭角

尾長来てピラカンサスを裸にし

家畳み表札燃やす悲しさよ

樹木葬それもいいなど見て廻る

名利の裏に無縁の石の山

江南市 脇田雅美

解体の前の古家が浮かばない

我がままに少しはやんちゃ言ってみる

再生紙だってプライド持っている

履く靴はあっても履いて行く場ない

愛知県 榑嶺志

この桜また見れるかと問う患者

我が子より幼き医者に腹立たぬ

大学医世間に触れず歳をとり

今都会育ち山村雪想う

山鹿市 三谷たん吉

新成人なのに気になる老後だけ

こんなもん勇気をくれる選者の句

温故知新

『谷垣史好句集』より

春ざわざわ一級河川まだ眠り

苛立ちをしずめる句い古本屋

脂ぎった顔で福祉を論議する

はしゃいでる酒はさみしいことがあり

真夏日に汗をかかない偽善者め

千発の花火を見てもふっ切れぬ

空缶を蹴とばし俺の夏終る

会う場所は少しキザだが紀伊国屋

君の不幸は社内人事に詳しすぎ

研修という名で昼の露天風呂

暮らしとは日々ガラクタがふえるなり

あみだくじ生きてゆくとはこのような

ひとはみな友情という腐れ縁

ほつといてと言われて男ほつとけず

鼻の穴性善説を信じよう

靴下に昔なつかし穴があき

さみしさが少し紛れる君の鼻

五十過ぎて中途半端な貯金帳



川上大輪選

貝塚市 吉道 あかね

鬱の字を微塵切りする冬の底

柵を断ち切りました糸切歯

人間でいたくて一本線を引く

世間さまの物差し捨てて日向ぼ

桜草の鉢植えをかう年金日

未使用の笑顔をひとつ持っている

岡山市 丹下凱夫

わたくしが黙っておれば済む話

里山のような父です無口です

白壁に波紋が揺れている旅情

エンディングノートに書いておく辞世

仏にも鬼にもなれず呑んだくれ

やわらかい風だ土筆が顔出した

山口市 中前幸子

誰も振り向かぬ冬の日の風ぐるま

透明な夜の空気と同化する

焦点をぼかすと見えてくる死角

昇華したたましい人魚姫になる

終点に来て乗り換えるバスが無い

嫌な自分を消すように降るぼたん雪

岡山市 藤成操 江

また一つ反省積んで陽が落ちる

約束が微妙にずれてからの雨

荒波は黙していれば遠ざかる

言い訳を通せば根っこまで枯れる

意地少し捨てて話に添うてみる

来た道はどうあれすべて愛おしい

佐賀県 真島久美子

どこで手に入れたのだろう雪の白

変わらない街へ私のまま帰る

新しい恋が一番いい葉

傾いた私をスカートで隠す

すっぴんになれる所が泣く所

ひらがなに戻せば見えてくる素顔

わたくしの愛は只今加温中

岡山市 永見 心 咲

忘却のふりするマグマ抱いたまま

肩の力抜いたら膝が折れる莖

くすり指合せゲームから降りる

吊り橋の真ん中霧が晴れるまで

清水も濁流も抱く河である

岐阜市 平 野 あずま

肩書を外し人間丸くなる

宴会で友達ごっこして遊ぶ

妻の留守まないた乾く台所

失敗はしても無駄にはせぬつもり

一枚の切手で足りぬ春の章

尊敬も反発もした父の言

神戸市 能 勢 利 子

若いネと言われる度に出る元氣

飲み出すと空気読めなくなる恐さ

スーツケース家の近くは引きずらぬ

こっそりと飲んだお酒が水くさい

バレンタインゴディバ待つてる仏様

渋滞になると運転ママがする

篠山市 石 田 久 子

店じまい話し相手もへりました

吊し柿砂糖がわりの戦時中

共白髪自然に声が高くなり

聞き役に徹して愚痴を聞き流し  
柔らかな夫婦になった熱いお茶  
引退出来ぬ主婦業の丸い背な

八尾市 中 岡 妙

水をさす指はだあれもとまらない

振り回す拳いつでも酒のせい

きげんよう飲める酒かであるんやで

つぶやきが増えて吐息が深くなる

先に逝く行かぬ私の負けですか

思いきり生きてやるぞと背伸びする

河内長野市 大 島 友 子

引き合う手緩め相手の出方見る

夢枕会いたい人は現れず

吊り橋を渡る勇氣は置いてきた

チクツと胸刺さる言葉は埋めておく

雨男に合わせ私も今日は雨

忘れた頃噴き出す妻の休火山

松山市 栗 田 忠 士

さびしいないつでも鬼の役回り

影だけが知るわたくしの独り言

叩かれて叩かれて出る杭の意地

約束を破ったままのブーマラン

断捨離へしがらみだけが纏い付く

はすに切るなんと小気味のよい言葉

京都市 清水英旺

コンビニで命をつなぐ独り者  
あしたから荒波が待つ成人式  
血圧計心の揺れを読んでいる  
郵便受けにことんと落ちたままの過去  
あの世では苦勞知らずか笑ひ遺影

大阪市 宇都満知子

お帰りとメガネも曇る暖かさ  
近くでもつい自転車が悪い癖  
雪が舞うでもアクティブに出かけます  
目も耳も春の訪れ待ちわびる  
使い良い冬は重宝割烹着

大阪市 柴本 ばっは

筍掘りもうむずむずとする土  
実家では今日もたけのこ料理です  
もう春よふさぎこんでちゃ駄目ですぞ  
やんわりとこなす眼鏡に変えました  
DNA脚の短さまで同じ

大阪市 高杉 力

補佐代理副とれぬまま退職し  
どっちやねん牛肉たっぷり野菜カレー  
待ち受けの孫を見せ合う齢になり  
食卓にデパ地下産が二三品  
妻の留守おでんの鍋を温める

大阪市 寺本 実

楽にしる悩みすてると他人事  
さあ買つて在庫一掃福袋  
資産ゼロ貧乏神にほめられる  
息子とはつかず離れずけんかせず  
居酒屋を出る時までの正義感

大阪市 栃尾 奏子

春うらら鬼も口もとほころばす  
花冷えに少し反省するわたし  
初恋をのせてレンゲの花いかだ  
思い出になつたら許しますか  
臆病でした引き出しを開けてみる

大阪市 藤田 武人

根雪まで溶かしてくれよ春の風  
守護神の手から勝利がこぼれます  
義理チョコに義理で返せずシャネル買う  
鬼の目が最初に影を見つけ出す  
混浴の相手は丸い月と猪口

堺市 近藤 治子

老いの坂亡母を鏡にして登る  
ばりばりと仕事が出来るかっぼう着  
万華鏡色艶やかに揚羽舞う  
正直な鏡がちよっと物足りぬ  
買物に料理洗濯ほけ防止

堺市 羽田野 洋介

受け答えまだ大丈夫酔ってない  
何よりもまずふところに相談を  
飲むほどに何故だか馬が合うお人  
次の角曲れば明り見えるかも  
自分から引いた一線越える羽目

池田市 上山 堅坊

政局を語りわいわい繩のれん  
夫婦だから言っていけないことがある  
序でにと核心をつく怖い人  
高血圧ボン酢でたべておく刺身  
勘違いしたまま生きる怖い日日

泉大津市 助川 和美

「フロワキマシタ」音声にハイ独り者  
電車内みなうつむいてスマホする  
自分にも出会いを捜す披露宴  
野良猫に懐かれてついエサをやる  
アイラブユーだけで一生いけぬもの

貝塚市 石田 ひろ子

蠟梅の香りに肩の力抜く  
ちよつと贅沢花屋の春を買いました  
スマホより紙の匂いの文庫本  
ジムよりも年相応のウォーキング  
ポイントの5倍に負けて無駄を買う

豊中市 貝塚 正子

樹に残す生きた証だ蟬のカラ  
もうアカンお箸こけても笑えない  
子守唄ラジオに頼む午前2時  
生真面目を絵に書いたよな白いシャツ  
なせばなるなればなつたでくたびれる  
モンスターばかりが住んでいる我が家  
憎めたらナイフになれる女です  
病院を元気に渡り歩いてる  
蓋開けた話の種が飛んで出る  
後悔の涙で洗うのはこころ

寝屋川市 岡本 勲

八十路きても卒寿できぬ欲の皮  
腹の中見えぬおかげでまだ夫婦  
幸せにするに誓ったはずなのに  
訳ありの野菜笑っておすそ分け  
馬車馬の如く働き粗大ゴミ

寝屋川市 鈴木 楽鬼

良い助言あって原石光り出す  
鬼は外言つても妻は出ていかん  
口上手世渡り上手逃げ上手  
覚悟などいらぬ人生なるがまま  
本当の男になつて死ぬつもり

羽曳野市 藤原 大子

明日の糧食べて喋って笑うこと  
向き合って話せば強氣出てしまう  
恐いのは私自身にまとう影  
物忘れだんだん慣れてまあいいか  
てにをはにこんな迷い受けるとは

八尾市 田邊 浩三

見事な薔薇頂戴したが刺はある  
引き際も見事だったと言われたい  
この杖にこんな世話になろうとは  
腰痛にひたすらプール歩く喜寿  
電子辞書さがしてる間に佳句は消え

大阪府 小栢 こずえ

平等に朝が来るから素晴らしい  
足腰に呪文をかけてウォーキング  
菜園と花壇が自慢春を待つ  
自然から命の鼓動寒暖差  
あきらめない決めつけないで参加する

大阪府 神野 千恵子

どちらかが堪忍してる好夫婦  
お転婆も晴れ着を着るとホで笑う  
結んでも開いても好し赤子の手  
日記帳時どき過去の窓開く  
空を見ることを忘れたスマホ族

大阪府 高木 道子

ヒロインの裁縫の手の付焼き刃  
遠慮が過ぎる半透明な方  
庭石の凹みアドリブではないね  
さりげなく善人面して寺の門  
立春に肩組み直す風と雪

神戸市 玄番 美恵子

この冬はチョット違うとカラス鳴く  
未来像覗いてみたい万華鏡  
生き方を少し軽めにギアチェンジ  
バレンタイン手作りチョコは一人だけ  
句会終えあすは忘れるペンと紙

神戸市 松井 文香

この辺で軌道修正してみるか  
どこであれ置かれた場所で咲いてみる  
親離れ子離れふつと哀誘う  
辛い事一ツ増えたら幸となる  
でまかせのような言葉にある誠意

神戸市 山根 弘子

軽率に返事したのが命取り  
とろとろと居眠り誘う長談義  
大人しい妻がいきなり離縁状  
口下手な夫からもらういいヒント  
冬衣一枚脱いで春を着る

加東市 安達 厚

元氣そう見えても悪いとこばかり  
年賀状私が減つて妻が増え  
どこよりもいいのはこたつ老いの冬  
いつどこでどんな形で逝くのやら  
雪の朝ジグザグに行くランドセル

篠山市 佐々木 勇

欲しいのは平和弾など捨てなさい  
寒風をお守りにする受験生  
スイッチをオンに新聞流し読み  
うっとり空の世界にいるお経  
オンとオフ便利に馴れてメタボ中

三田市 足立 つな子

老いて尚心身ともに磨きたい  
ダイヤ婚更に未知へと馬駆ける  
事始め一步を重ね華咲かそ  
落ちつけぬ食べ放題へ友と行く  
不器用で忘れられない損な性

三田市 上田 ひとみ

未来など考えている産声と  
抱きしめる優しさ強さ温かさ  
今はまだほんやりです世の中も  
穏やかにその微笑みが続くよう  
見てごらん楽しい夢はそこそこ

篠山市 北澤 稠民

携帯の絵文字が読めず孫に聞く  
羽根のばすやっぱり妻の留守がよい  
米づくり試行錯誤がまだ続く  
今のうち元気で医者のはしごする  
気になるとそこから老いていきそう

宝塚市 丸山 孔一

発車ベルお先にどうぞ次を待つ  
遅れても前へ行つてりやそれで良い  
物欲は減つても美人だけは好き  
胃カメラを飲んでるままで医者が聞く  
何かある今朝の味噌汁ちと鹹い

西宮市 福島 弘子

格安の宇宙旅行を待っている  
ご近所さん程よい距離が効いている  
気兼ねない二度寝を猫に起こされた  
日本の理系女世界を唸らせる  
レモン煮るマーマレードは春の味

南あわじ市 萩原 狸月

朝寝坊車内で化けて御出勤  
妻不運俺に見込まれこの苦勞  
アホやなあ大阪弁が温かい  
接待費香水匂う領収書  
この俺に余程のことか借りに来る

奈良市 尾畑 なを江

目にゴミが決まりもんくの嘘で逃げ

紙つぶて投げると猫の大はしゃぎ

お互いに辛抱したは自分でず

嘘ばれて新たに嘘をつくお人

ふる里の想い出元氣湧いて来る

奈良県 谷川 憲

同病が意外に多い待合室

ほど好い四季だんだん減ってきた日本

胸底に洗い切れない染みがある

汚染水データに鈍くなる恐怖

資格マニアびつしり埋まる名刺くれ

和歌山市 福呂 秀子

梅の花心待ちして凌ぐ寒

今朝もまた亡母エプロン動きだす

思いやり心にゆとり持たされる

炬燵中寒さに甘え時が過ぎ

白梅に亡父面影庭に見る

紀の川市 楠原 富香

ファイトの灯もやし尽くしてする握手

頂点を極め後ろが気に掛かる

介護終え手持ち無沙汰の手が寒い

少しづつ夢に近づくかたつむり

人間を洗えば過去が見えてくる

田辺市 小川 イセ

初仕事やはり地下足袋はきました

幸せ日記今日の頁もびつしりと

三世代孫の片言和む膳

雪の中名もない草も春仕度

疲れたらゆつくり座る円い椅子

鳥取市 大前 安子

不器用を汗が庇ってくれました

パニックは病が病連れて来た

負けたこと昨日のことよ玉子焼く

おろおろするな雪いつまでも降りはず

寝不足の顔へ朝日がぶつつかる

鳥取市 高原 かおる

楽隠居しゃべって飲んで食べている

隠居部屋在った筈だに物置に

ストレスの激しさ春の走るみち

日本酒を呑んできたのが寝てしまふ

ちびちびと酌んで昭和の安来節

鳥取市 山下 凱柳

子はいないのにおれおれと詐欺電話

懐炉入れ温めてみるか冷えた仲

秘密法窺い知れぬリスク負う

八十八か所巡り冥土の土産とす

没ばかり今年も酒量増えそうだ

倉吉市 岡崎 美知江

人生を作る明日の種を蒔く  
狂おしく明日を探す木偶の鼻  
実る夢ゆつくり飲んで風を待つ  
無器用で月に向ってひとり言  
公約は玉虫色の空手形

倉吉市 中村 毅

STAPのロゴ入れ売るか割烹着  
遅いぞと神に呼ばれて初詣  
かぶりつく恵方巻きなら許される  
私の心の鬼に豆を撒く  
童謡で介護施設に四季を呼ぶ

米子市 野川 宣子

三が日何も変らぬ幕が開く  
あれこれと続く中身のない話  
おばあさん無駄な抵抗よしなさい  
夫への感謝のチョコに赤リボン  
美肌クリームせつせと擦る風呂上がり

鳥取県 橋谷 静江

想い出があつて捨てられぬごみの山  
友からの相談に乗り胸痛む  
向かい風吹いて私を困らせる  
立春がすぎて寒さ身に堪え  
春の花咲き出した朝大雪だ

松江市 武島 千代枝

無沙汰詫び仏の方へ掌を合わす  
年金の身も受けて立つ消費税  
竹笹の雪跳ね返すあのパーワー  
遅ればせながらも動く古時計  
私の五体修理がとぎれない

松江市 山根 邦代

惚けたかな思う時あり笑うのみ  
全身に気を巡らせて蒲団出る  
炬燵板物欲しそうに待っている  
この寒さ人恋しくて電話する  
下手な字を待つてくれる友が居る

雲南市 松本 昌

試着室自分がいやになる姿  
だまされてだまして夫婦五十年  
悔みとは自分をさらけ出す言葉  
おみくじは凶で当たった一万円  
ありがとう素直に言える子に育ち

岡山市 前田 恵美子

心根に少し紅さすお正月  
福の神きつと笑顔が好きなんだ  
野菜好き体の中を化粧する  
福を呼ぶ心の扉開けておく  
何事かあつた時には温い夫

瀬戸内市 東 横 ますみ

小さな芽は迷うことなく天めざす  
夢を抱き夢を散らして行く余生  
駄馬なりに親の背中を子に見せる  
憂きことは済ませ明日へと向ける靴  
迷う程運命線が太くなる

岡山県 田 中 恵

風ゆるり遊び心をそそのかす  
足腰の迷いが醒めぬ春炬燵  
かごめかごめいつも後ろに君が居た  
薔薇の花欲が絡んでから迷う  
浮き雲がわたしのそばを離れない

竹原市 若 年 幸 子

山の向こう希望の文字が呼んでいる  
恋だろか心ざわめく春風  
割烹着リケジヨ古くて新しい  
梅ほころぶほつと春めく風の彩  
瀬戸の春金波銀波のノリで来る

竹原市 土 井 輝 恵

着膨れをヒートテックに笑われる  
故郷を恋うて墓地だけ譲り受け  
投票所出ても夫婦は無口なり  
どなたのですか男の仮面落ちて  
上澄みを飲んで美味しい言うまいぞ

宇部市 高 山 清 子

気遣いをしてもされても出る疲れ  
体調をリモコン操作出来るかな  
人手不足町内役に出る卒寿  
ダルマの目入れて公約忘れさり  
頑張りも程度むずかし老い卒寿

大洲市 花 岡 順 子

鼻肩目に見てもものんきなのが息子  
大海を知らないままの養殖魚  
張り切るとパニックになる膝小僧  
あちこちのガタ張り切って見たものの  
七十五日波紋の中にいる独り

今治市 渡 邊 伊 津 志

能天気あつげらかんとアツパツパ  
もの言わぬ会話もあって秋夜長  
風にさえ斧を構えるいぼむしり  
冬の風見えないものに目を凝らす  
醸し出す語彙が景色を映し出す

香南市 桑 名 孝 雄

オレ流でやるとあれから五十年  
やり残すことも子等への試金石  
動いて読めて飲めて歌ってもう少し  
右顧左眊してる間はない日が落ちる  
以下余白あちこちシミはあるけれど

弘前市 高森 一吞

予定表妻の都合で走ります  
メール来る答えは妻の長電話  
眠ってる妻の癖で調度いい  
寝不足でメダル観たさのソチ五輪  
一人酒なぜか無口で泣き上戸

塩竈市 木田 比呂朗

ポケットももぞもぞと動く春  
ケータイがなぜか日差しに背を向ける  
安堵するやつと発芽のプランター  
耳打ちで気づいた妻の誕生日  
ふと気付く増えたサブリの使用量

つくば市 嶋本 喬

橋立の松の声聞く並木道  
歩きつつ五十三次奇想の絵  
化物も漫画もルーツ北斎か  
病院がちがうよ老母は美容院  
入居して友達できた白寿母

横浜市 川島 良子

若い氣でいるから膝が笑い出す  
健康が自信過剰にしてしまう  
少しだけかじった知恵の邪魔をする  
介護するされどちらも紙一重  
もう少し時間下さいもう少し

横浜市 長島 亜希子

縄文杉目指し階段昇り降り  
旅仲間鍛えてるかと電話くる  
断捨離と言いつバーゲン気にかかる  
知ってるのにクイズの答え出てこない  
山頂のにぎり味噌汁星三つ

佐渡市 高野 不二

女房の句を作っては見抜かれる  
悪口が聞こえぬ耳で丁度良い  
一人歩き行きたい所へは行けず  
宝くじ当たった話ばかり聞く  
アベノミクス税金だけがもろに来る

豊橋市 藤田 千休

リストラの切り取り線にいる派遣  
増税に筋肉痛の春財布  
付け睫毛美人でしようと反り返る  
今日もまた妻とゴキブリデスマッチ  
摩周湖が今日も居留守を使う霧

長岡京市 日置 みどり

預かった犬に連れられ一万歩  
地理音痴時々なびに騙される  
野暮用が日々の淋しさ払いのけ  
私より働きの食洗機

大阪市 浅井公平

何事も学ぶ始めにまねてみる

老人に時代の動き早すぎる

句作りがいつのまにやら生き甲斐に

妻の味いつも食べたいアンコール

大阪市 内田志津子

瞬きがノーのサインと決めてある

巫子の舞神のお告げがありそうだ

血圧に今日の機嫌を問うてみる

時を待つ固い蕾にみえる意地

大阪市 梅里南天

マスクして小学生の顔が消え

その空気君が吸うたび色づいて

喉寒したまに演歌を口遊む

窓越しの幸福駅は通過駅

大阪市 太田としお

お正月また一年が速くなる

愛してる僕が言うたら皆笑う

元気でいたい笑う喋って考える

ユニークな発想新しい結果

喧嘩種なくなつてから会話なく

赤紙で行かせた人と行つた人

世の中にいろんな人居てわれも居て

新しい笹持ち帰れ福つれて

大阪市 大治重信

大阪市 前川善之

食卓を囲む鍋にもサイエンス

老いの身に招待状の来ない幸

きり絵観賞ごちそうさんと味がある

追いかける人の欲には果てしない

大阪市 松田聰

買いためを無駄にせぬよう食べすぎる

ひと月があつという間に過ぎてゆく

マンションが竹の子のよう増えてゆく

年輪をきざんで背中丸くなる

大阪市 吉田知之

おさなごの笑顔に心パツと晴れ

よろよろと空元気つけ老いの日々

成人式日にちがずれてややこしい

川柳で時代の流れ読んでいる

堺市 梅木澄空

衣食住足り貧しい物は何だろう

もうちよつとオシヤレをせよと言う鏡

ニックネームについて方言で返事する

カレンダー剥がすと春が見えてきた

少子化はゆがんだ政治の反映か

入院で看護師さんに癒される

認知症予防の良薬575

ねじれこそ民主政治の象徴だ

堺市 増田わこう

堺市 山崎 早苗

通学路朝を喜ぶ人がいる

ベランダの洗濯物が怒る朝

値下げ待つブランド財布握りしめ

今日は雨歯医者行くのは止めとこう

堺市 大和 峯二

しあわせになりたい老後惚けられぬ

モーツァルト聞いて心を充たして

魔法かけ解決したい汚染水

古希なのにひそかに忍ぶ恋心

泉佐野市 稲葉 洋

百点をとったテストの薬半紙

何飲んで何を塗ったのその若さ

おいとまの時そろそろか寺の鐘

花見客今季も二人減る宴

河内長野市 辻村 ヒロ

出掛けると言い聞かせてる膝と腰

無理させるバネはちよっぴり曲げておく

立ち話足が時間を決めてる

趣味ひとつ増やした刺激古希祝い

河内長野市 藤塚 克三

どうするか母が明かす先ずは酒

表向き我が家の顔は私です

一円を拾う暮らしは四月から

片思い好きを殺した胸のしみ

河内長野市 穂口 正子

隠しても惚れた心が弾み出す

行間を読み過ぎ一人疲れ出る

かみさんの愛嬌でもつこの飲み屋

納税は古里が良い蟹が来た

河内長野市 渡邊 修

おばちゃんは本音トークに笑いこけ

飛車角を抜いても詰まぬへば将棋

初舞台子役一人がのびのびと

最後までパパの手料理手をつけず

岸和田市 中岡 香代

限定の誘いに乗れば大火傷

焼酎でじゃぶじゃぶ洗う今日の憂さ

コンビニが独り暮らしの冷蔵庫

老眼鏡ずらして見詰め合う二人

高槻市 三谷 白黒

独りだと料理するより寝ていたい

大衆魚いつのまにやら高級魚

収入にあわせてレシピ楽しんで

ありがとやっこのごろ言えだした

豊中市 荒木 郁子

お互いに菌痒く思うことが増え

意地通し平行線の老夫婦

おいとしか呼ばれぬままに半世紀

しきたりの苦い経験語りぐさ

豊中市 荒巻 夢

靖国の裏で一粟動き出す

借金を富士より高く積む馬力

冷気吸い明けの明星ひとり占め

ろう梅の五つ六つ咲き書く便り

豊中市 源田啓生

生と死の狭間でしばし生きてみる

寒い夜は妻と二人の玉子酒

老いの気を養うための愚痴を吐く

一つずつ血潮の滾るものが消え

富田林市 肥山一文

燃えすぎて忘れてしまふ息抜きを

彼女からもらったものは春の風邪

ピルの森中を抜けたら女神像

人事部の評価が漏れる壁の耳

寝屋川市 荒川鈍甲

ねんごろにする人は来ず春の宴

押し競饅頭何百年の楠とやる

オリンピックを儲けの種と見る悲哀

文楽よりはカジノ文化か都構想

羽曳野市 磯本洋一

嫁ぐ日の目出たい筈が寂しくて

ローンあり仮設で払う老夫婦

仮設にて小さな春を待つ家族

俄雨日傘を握り雨宿り

羽曳野市 安本美喜

水仙のドレス着たよな石仏

たんぼの綿毛を吹いて子等に見せ

糠と小麦粉鹿煎餅屋三代目

犬抱いて吾子あやすごと腰を振り

枚方市 河田洋子

無農薬虫と毎日知恵くらべ

虫のすがた人にはなぜか縁がある

嫌な事虫の居所見て話す

今でしょ買い替え急ぐ消費税

枚方市 坂本ミヨノ

嫉妬する湯煙ゆれる露天風呂

雪が舞う着ぶくれ母がころんてる

人生を四捨五入する面白さ

知恵袋に人生苦勞詰まりすぎ

枚方市 松原保

夫源病イヤな病を医者と言う

鳥取に金持神社が有るそうだ

身内ではズバット切れないのもんだ

お金持ち偽物食べてもケンカせず

藤井寺市 田付絹枝

雪景色亡貴方其処から見えますか

増税の効果霧中のアベノミクス

菅公を偲び和ます梅一輪

今朝の雪去年は行けたな雪まつり

人のために力になりたい思い秘め  
正直に語る思いに悔いはない  
聞こえてたその一言は真実か  
作曲に関わったには変わりない

松原市 市川雄太

政治家の答弁こたえころころよく変わる  
侘助が凛と一輪自己主張  
三陸のレールに春の遠からず  
一日中五輪五輪のテレビづけ

箕面市 寺井柳童

冷蔵庫無かった頃を知っている  
商店街無くしたスーバーが消え  
今だってレナウン娘歌えるわ  
録画してコマースヤルだけ早送り

箕面市 村田恵子

ガラス細工の輪の中にいるピエロ  
クリニツクのハシゴで増えていくカルテ  
ヨッコラシヨと生きた証のゴミを出す  
ノラが来ない来なきや来ないで気にかかる

八尾市 赤木妙子

節分の豆一週間咀嚼する  
ソチ五輪見ると予定が頓挫する  
啓蟄に妥協の虫が顔を出す  
大阪を丸洗いする都構想

八尾市 前田紀雄

ハミングがつい鼻に出る散歩道  
おいしさの秘伝を捏ねる深い鰻  
節分の翌朝靴に豆三粒  
しまい風呂柚子まといつく湯の香り

大阪府 畑中節子

とろとろとテレビ見ながら夢心地  
いきなりの指名新婦の名が出ない  
青い目の彼をいきなりつれて来た  
定検も問題なしでうまい酒

神戸市 井上忠貞

何気ない仕草にも出るお人柄  
よくしゃべるまだまだいける百までも  
人の持つ物差し違うから難儀  
まず自分大切にする妻のため

神戸市 輿水弘

陽だまりで妻との会話棘取め  
聞いてみる揺れるブランコいいですか  
じわじわと亡父の言葉が皮を剥ぐ  
これからは小言もささり流します

神戸市 富永恭子

残月が心射ぬいた清い朝  
旨い物食べて喧嘩が減りました  
師の愛でだまされたふりしてくれた  
分かれ道決断迫る胸の鐘

尼崎市 中井 楓花

あなただけ信じて咲きたい黄水仙  
タンポポのようにしっかりとふんばろう  
立春に口笛吹いて走りたい  
良くモテる理由はあなたのその笑顔

加東市 岩本 美緒子

亡夫の守りいつまでもあれ道しるべ  
春の彩さわやか緑溶く絵皿  
明日あると信じて眠る安らぎよ  
生き甲斐を重ねて生きる昨今は

川西市 大坪 一徳

給与から羊のように税刈られ  
謝罪会見二十数えて頭上げ  
株自慢儲けを足せば家が建つ  
株上がり賑やかなる同期会

川西市 日野岡 和之

秘密だと言葉の軽さその重さ  
民の汗みな税金に吸い取られ  
持ち上げて使うジョークの裏表  
実りなき人生にもある日本一

三田市 今西 廣子

デイサービス今日も一日意地が張る  
涙腺があれこれ思う済んだ事  
ボランティア明るい私好きになる  
頑張るとらしくないのであわてない

三田市 木村 マユミ

危機一髪神の手が出た有り難さ  
当り前つづく事への有り難さ  
同窓会光るおでこにご挨拶  
金かかる女の顔は請求書

三田市 雑賀 一泉

内緒ごとメタボの腹をふくらます  
晩酌の肴につける手前味噌  
国民と結ぶ約束うわのそら  
早すぎるお迎えなんてお断り

三田市 多田 雅尚

グーチョキパー明暗分ける確率論  
政治家が善処するとは何もせず  
議会から同意得られず直ぐ選挙  
足の爪手の爪ほどは伸びて来ず

三田市 辻 開子

積雪で外出悩み炬燵守り  
具だくさん味噌汁続け若さ維持  
夫と会話突然外出しよといい  
茶柱が立ったよ今日はラッキー日

三田市 野口 晶子

破れた恋の数だけ人を思いやる  
鉛筆の先も私も丸くなる  
神様の悩みは誰が聞くのやら  
お義母さんはずしてほしい色めがね

篠山市 酒井健二

輪を一つ残し繋がるソチ五輪  
愚痴自慢これが最後と聞く酒場  
良い習慣最初は少し無理をする  
皿を見て店の勘定気にかかる

篠山市 稗島照代

和菓子好き漉しか粒かの餡比べ  
新鮮な会話で心ダンスする  
人情に助けられ日日趣味に生き  
お洒落好き元気で闊歩する鑑

篠山市 藤井美智子

見返りはいらぬちよつと愚痴らせて  
飽食へごちそう何か考える  
ロボットが人の暮らしにおせつかい  
うつとりとひばりの声が心地良く

西宮市 株元玲子

晩成を期して今なお歩みゆく  
走りつづけ疲れましたと足笑う  
句の中にキラキラ光る宝あり  
夫留守時計の振り子倍動く

西宮市 藤本直

元氣会名付けてからの先細り  
どの国も勝手な地図を持っていて  
専門外だけ一言評論家  
人も国も不足しているエネルギー

三木市 山口久子

節分に病治れと豆まきを  
今日もまた寒さに負けてこたつ守り  
ニトロ持ち今日もたのしくデイケア  
ああ言えばこういう妻のかべがある

奈良県 安福和夫

待ちわびた初孫授かり涙ぐむ  
ほやほやの初孫抱いて背が丸む  
聞き違えマサカとマタカひと騒ぎ  
次世代を託せるヤング躍り出よ

奈良市 高橋仁志

追加して刷った賀状が無駄となり  
本物の具材を使うおもてなし  
大晦日チャンネル権は孫の手に  
温度計零度までにはまだゆとり

奈良市 前田弘恵

世渡りに三猿真似るむつかしさ  
お日さまを背中当ててのははして  
駆込みで特売品を買いあさる  
この菌では丸かぶりなどとも無理

和歌山市 磯部義雄

睡眠も収入も減るパートママ  
付け髭を取ると優しい人になる  
休肝日忘れて飲んで妻小言  
錆び付かぬようにと脳へ潤滑油

和歌山市 北原 昭枝

鳥取市 近藤 秋星

辛抱を積んだ冬芽が動きだす  
会者定離忘れられない花が咲く  
蟠り目が許してる今朝の窓  
あのひとは元気だろうか水ぬるむ

和歌山市 平田 元三

鳥取市 谷口 回春子

目差すより守り苦しいチャンピオン  
後期入り萎える心に活入れる  
コンビニの味に慣れたと独り者  
連打する鐘期待してのど自慢

岩出市 村中 悦男

鳥取市 津村 律子

試着室マネキンでなく私です  
ワンパターン首ふりながら直す髪  
誰様にもらったものか風邪の床  
介護する母の命の血はぬくい

田辺市 大峠 可動

倉吉市 田中 紀美恵

凡人は凡人のまま高齢化  
冷え症に初東風の詩あたたかし  
追伸や伏せ字が過去を追い払い  
日が沈む思慕一枚をあためて

和歌山県 森下 よりこ

倉吉市 堀 かずこ

有難う無事に迎えた七十七  
食べにくいだろうなでかいハンバーガー  
生きるつもりなくても寿命伸びてゆく  
雨や風気性の荒いモンスタ―

大寒や花咲く春はまだ遠く  
この冬一番の冷え込み何度聞くことか  
実験にされるサルこそ迷惑だ  
春よ来い早く来い来いホームにも  
嘘泣きに財布の紐も緩くなり  
孫が来りやたちまち祖母は七変化  
現役の勘取りもどす孫の守り  
駄々こねる孫の姿はDNA  
年賀くじ当りびつくり一等賞  
ふるさとの雪の深さを聞く電話  
躓いた小石に愚痴も言えぬ足  
プライドを緩めて感が鈍くなる  
ごめんなさいが言えないままで待つ明日  
明日咲こう桜の花がほこらしげ  
今日を終え明日の風にふわり乗る  
明日と言う目標たと持って寝る

泣き虫もやつと冬眠笑顔出る  
幸せよもどつてきてねこの胸に  
ガラス窓息吹きかけて愛と書く  
この胸に破れた夢を抱いている

境港市 中井虎尾

正月はハワイと決めて湯梨浜へ（鳥取）

同期会しまつてた顔出し参加

おもてなし受けたお礼は倍返し

玄關を開ければ闇に白い雪

米子市 生田和之

会報を三つ四つ抱え極く多忙

ジャガイモでたぶらかされた芋煮鍋

わが家にもあつた秘密は守り抜く

福豆を三日がかりで食べ終わる

米子市 池岡たけし

寒い朝早起き癖を忘れそう

思い切りフトン捲って覚悟する

も少しが息災壊すもう一杯

満腹のおなか抱えて悔む朝

米子市 小野鶴子

メーカーせずぼらな私日日マスク

寒ぼたん手編みの薦でデビューする

かじかむ手カップの温もり分け合いて

じいさんに「過保護禁物」言うてある

米子市 加藤正二

老いの皺深呼吸して張替える

年重ね脈までが夜ごと居眠りす

言葉尻拾い合いして溝をつくる

一声が老いの心に火をつける

米子市 田村周子

差し入れの太巻きずしがほおばれず

明日生きる勇氣のことばありがとう

寒の中心の中はほっつかほか

病院の日差しもどこか春めいて

米子市 見山温子

蠟梅の香りと共に春がくる

倦怠期三度呼ばれて生返事

爪を切る夫の背中にも老いを見る

三つ星を食べないことに語れない

米子市 湯浅俊久

心には妄想行きのバスが待つ

一塩でアップさせた人間味

ラジオから昭和の唄を掬い取る

人生の三割ほどを寝て過ごす

鳥取県 飯野菖子

曲がっても折れぬ竹には意地がある

身に毒だ不平言うより前向きに

不平にも負けずチャンスに変えて来た

桜草退屈そうに春を待つ

鳥取県 大塚美代子

趣味一つ持って老後の糧とする

年金日待って友との旅プラン

おはようと笑顔が走るランドセル

表札で亡夫に家を守らせる

鳥取県 下田 茂登子

憎しみ合つて愛し合つてる共白髪  
そこに妻只それだけで楽になり  
絵に書いた地蔵に願いかけてみる  
死ぬ前に逢いたい子供一人居る

鳥取県 田口 清帆

汗涙沁みる背広が捨てられぬ  
解つてるけど止められぬ自己主張  
しみじみと絆の斟酌かみしめる  
冬ごもり春へチャンスを貯える

松江市 相見 柳歩

君に告ぐ恋はするほど下手になる  
遠慮せずやぶから棒に聞いていく  
漫画から跳び出たような美人だね  
眠つてはいないあの世で元気です

松江市 中筋 弘充

早起きが得にならない休刊日  
敗戦投手一人で負けたようである  
体調がよくて主治医に会いに行く  
人見知り絶対しない自動ドア

出雲市 黒目 英男

ドラマーに憧れ遂にリズムとる  
信仰に救われし身の今がある  
ギアチェンジ七色の顔を使い分け  
運命を背負つて生きる我が縁

雲南市 菅田 かつ子

今朝は晴れるんるんの洗濯機  
この上にどう見せる気か付け睫  
目に見えぬ仕事あれこれ忙しい  
ちゃん付けで呼ばれいそいそおばあちゃん

安来市 原 煩惱児

八十路半ば孫から学ぶ生きる知恵  
美女揃い眼輝くソチ五輪  
初受診医者に老化を説かれたり  
国技相撲和製力士の薄い影

玉野市 片岡 富子

断りなく家電故障連鎖あり  
リセットし昔の自分叱咤する  
泣かせると分つていても見るドラマ  
雪花もおしゃべり済んで雨になる

倉敷市 安東 モモ

やせないね正月ぶとりなげく友  
体重計期待を込めて乗ってみる  
ストレスはしゃべつて発散する安堵  
落ちこむと不幸な時を思い出し

岡山県 池田 たか子

病院の椅子は無口と饒舌で  
恐かった父の一喝愛と知る  
豆知識あちこちメモリ間に合わず  
いつの世も昔が良いと譲らない

尾道市 日谷 寛

小宇宙ひとり占めして恋に酔う  
本当の恋を引き立てかすみ草  
さよならの恋だと気付く喉仏  
燃え尽きた恋をいたわる火消壺

防府市 坂本 加代

悲しみは涙枯れてもぬぐえない  
納骨の四十九日で笑い声

悲しみを味わうように持ち歩く  
根っこにも刺激が欲しい花が咲く

香川県 田口 彦六

八卦見をあそび相手にして四月  
小手を打つように師系を聞いてくる  
骰子の目も回春の季とならん  
句は遅筋快刀乱麻とはいかず

松山市 神野 きつこ

冬空にベガサス探す白い息  
実は私リケジョの顔を仕舞ってる  
年上が居てくれるからありがたい  
文庫本開けば見える法善寺

高知市 三谷 待太郎

四捨五入それで今日まで助けられ  
定期預金五パーセントが懐かしい  
「活」ばやりこちらせつせと「柳」活中  
シルバー婚あなたは既に惚けてたね

福岡県 本田 さくら

「猛犬」とあるがかわいい声がする  
ドア開ける「おかえり」といううちのタマ  
水仙が咲いた良いことありそうだ  
早いもの孫の成長春を呼ぶ

北九州市 小松 紀子

生き方のモデルにしたい友がいる  
時どきは命を洗うコンサート  
不器用で二枚舌持ちあわせない  
文章は書けるがおしゃべり出来ません

佐賀市 清水 園實

石にぎり詰碁あれこれボケ防止  
温泉は入浴剤ですます風呂  
父に似ていつもおしゃべりする娘  
買ったまま一度もはかぬ登山靴

唐津市 岩崎 實

久し振り語る間もなし名を呼ばれ  
悪い癖何かあったら舌を出す  
世の中は不思議の風が吹きわたり  
本物の高齢者です生かされて

唐津市 北村 松風

社交家の父は欲なき勇み肌  
名代を見事務めた子に安堵  
米寿ゆく奈良飛行隊青春地  
何時きても心静まる東大寺

唐津市 吉 富 節 子

誘惑に負けて帰りの月寒し  
大寒が私を部屋に閉じ込める  
元気ですネ言われ胸張り見栄も張る  
義母五十年忌弔う事に感謝する

佐賀県 門 井 孝

さびしさは本音で答えぬ友がいて  
断捨離で空いた引出しどう使う  
消費税桜咲くころ本番に  
ソチ五輪メダルもテロも気にかかる

熊本市 杉 野 羅 天

焚き火すら出来ない国に粒子舞い  
株価上げアベノミクスは誰のもの  
小心は無業にならぬように飲み  
孤軍奮闘人恋し人わずらわし

山鹿市 前 田 幸 子

見守ってくれる息子と口喧嘩  
ダイエツトいつつ箸はよく動く  
独り身を案じてくれる恵方の春  
寒椿ヒヨドリ時期を忘れない

札幌市 斉 藤 宏 子

風もなく風花降りて春隣  
ラッシュ時は盲導犬も身を縮め  
寒風にいたわり合った杖の向き  
厳冬の窓に凍りの花模様

札幌市 富 永 恵 子

一枚のコートの行方大掃除  
ウインドウ横目でちらり確かめる  
寒い日は鍋の湯気たて帰り待つ  
出て打たれ出ないで腐る策の内

弘前市 吉 川 ひ と し

寒卵コントしているフライパン  
憎しみが消えて背中雪溶ける  
枯れ葉一枚諭吉の顔に見えてくる  
幸せな一升ビンだ雪見酒

東京都 大 竹 一 良

春の声そつと聞こえる里の道  
お水取り火の粉をあびて息災を  
あちこちとアベノミクスに惑わされ  
ラッキーも実力からの贈り物

東京都 高 岡 弥 生

生かされて今の自分を好きになる  
お見通し嘘をつけない子供には  
人生は何が起ころかお楽しみ  
近いうち子に怒られる時が来る

静岡市 渡 辺 芳 子

このままの自分でいいかなやむ夜  
まだ白紙今日の日記は何書ける  
この老を軽い荷物で終りたい  
冬眠の暮しが長し春よ来い

(三谷圭角さん・脇田雅美さん・樺嶺志さん・三谷たん吉さんの句は49頁にあります)

## 西尾 葉句抄

(定本「西尾葉句集」平成八年発刊)

恋

恋人は刺客のようにより添うて

会うたのも中之島別れたのも中之島

愛人として角砂糖の数も知り

四十の或る日の恋は落ち葉踏む

四十の恋は手形を割って逢い

逃げ腰で四十の恋をしてるなり

暇と金 金と暇とが食い違ひ

折あらば隙あらばと中年いやらしく

萬葉は綺麗に妬いているのなり

目くばせに哀れ五十の血があわて

ボートも二人ベンチも二人中之島

情熱はいっそ無口にしてしまひ

雨傘を忘れて帰る術もござる

カステラと花束

病人の向うむいたをとがめまじ

七度二分見舞の客の好き嫌い

退院へ爪先ゆるい足袋をはき

お見舞に行けば一杯やっており

寝顔だけのぞいて見舞失礼し

検温器はさんで主治医趣味のこと

春になったらと病人も看護婦も

検温を潮時にした見舞客

食後すぐ薬のための飯のよう

# 誹風柳多留一二二篇研究 10

石川道子・小栗清吾

細井龍夫・伊吹和男

山田昭夫

清博美

70 ほへたたけ五兩さがるとせげんいひ

石川 身売りを斬る娘に、泣けば泣くほど身の代金が下がるぞと脅している。

ほへるならほへるとせげん引くなり

明四松3

ふけいきなほへやがるなとせげんいひ

七35

ほへたので二分ちがつたとせげん云ひ

拾七26

細井 賛。売値が下がり、女衾の儲けが少なくなってしまうので。

清 賛。

71 たるひるいやうじをつかいしかられる

石川 樽拾いは酒屋の小僧、まだ子供である。

それが、一人前に楊枝を使って、まだ早い、飯を食つたらさっさと言い付けたことを済ませろ、と叱られている。

あついで茶をのんで、御用しかられる

一一34

はいとうに御用おしへてしかられる

一一38

くだくのを御用見て居てしかられる

末二15

細井 賛。大人の真似をしたがる。

清 賛。

72 まんちうをときんにあてる子ほんのふ

石川 饅頭を額に当てて、ホラ山伏だ、こわ

いゾー、などとからかっている父親であろう。

六月十六日は嘉祥といつて、毎年疫氣を払うため主君から家来に菓子を下賜斬る風習があり、民間でも十六文で菓子を買ひ笑わないで食べる習俗があつたらしいが、これとは関係ないでしょうか。

子ほんのふ小判もたせてこまる也 四13  
からつ手てかんきんをする子ほんのう 二〇一

どりやミ、を喰て遣ふと子ほんのふ 安五松5

小栗 賛。嘉祥でないと成り立たない句とは思わぬが…。

清 賛。「頭巾(ときん)」は、修験者がかぶる小さな布のずきん。

73 りんじうを嫁こわかつてしかられる

石川 まだ若いお嫁さんは人の死ということがこわいのであろう。

それとも、生前さんさん意地悪くされたが、死んでもまだ出てこられたら、等とこわがつているのであろうか。まわりの人が、しつかりしなさい、と。

死水を姫はこわくしほりこミ 明二礼5  
姫がのろい殺しますると男やみ 三〇13

小栗 賛。礎説のいわれる通り、どこまで

深読みできるが、最初の一行で如何？

清 同右。最初の一行だけでしよう。

74 子がござりやす八などいふ神馬引

石川 神馬引きは、浅草寺の観世音の神馬を曳く男。毎日、白丁烏帽子姿で神馬を曳き観音堂を三周した(『新編川柳大辞典』)。

浅草寺境内の楊枝見世の看板娘に気を引かれて、通りかかった神馬曳きに、どうなんだあの子は、などと聞いたのであろう。毎日働いて通つて内実を知っている神馬曳きは、ナア二、一見若い実が実は子持ちだと答えた、というのである。

あれにハな主が御座ると神馬引 三14  
やうじ見世こへいでなぶる神馬引 三14  
よその子のていにもてなすやうしみせ

清 賛。

75 ぞんさいにせけんをおこすつき米や

石川 朝ご飯に間に合わせるための精米もあり、搗米屋の商売は早かつたのであろう。早朝から世間へ何の気遣いもなく大きな音を立

てている。

つき米やぶこつな男式三人 安四信3

米つきのおこすうしろにむすこ立ち

小栗 賛。

しぶく／＼に米やのとなりはやくおき

細井 ドッスン／＼と響いたら寝ではおられない。

清 賛。

76 品川の女郎とんびのわけをき

石川 鳶は鷹と比較して下級な鳥とされていることから、下等な遊女の戯称、それに反し鳳凰は上妓に例えられる(『新編川柳大辞典』)とある。品川の遊女といったところで位置付けは宿場の飯盛女郎である。

吉原の遊女の鳳凰に対して下級な「とんび」といわれたのか、あるいは、品川の上級遊女は張り見世はせず、下級遊女が張り見世をしたことから、張り見世に出る妓をとんびといったものか。いずれにしろ、どうして「とんび」と称されるのかその由来を聞いているのであろう。

吉原ハ鳳凰四ツ谷とんびなり 六七二

めしもりとさらにみへない品かたち

二一ス3

食もりにやよすぎけいせいにハ成らず

高名輪の給仕ハ鳶を用心し

宝12七3

小栗 「とんび」がわからず。飯に下等な遊女の戯称としても、その理由を聞くことの何が面白いかわからない。

細井 客に尋ねているのでしよう。「なんで私たちを鳶なんて言うの。私たちだってちゃんとした女なのに」と身の程知らずに。

清 細井説か。

77 かんどうをよぶてとむらい三日のび

石川 父親の臨終のとき、道楽の果て勘当になった息子は銚子に在った。そこで息子呼び返して葬儀を執り行うことになったが、銚子から帰って来るのに日数が掛かり三日延びてしまった。

かんどうハおふじやうすくめゆるす也

二〇12

政宗があるでとむらひ二日のび 一九11  
かたく公事相手はしかのふねで来る

安二梅2

清 賛。

## 英語 de Senryu ②8

麻生路郎句集 『**旅 人**』

英 訳 吉村 侑久代 Kim HORNE

(岐阜保健短期大学)

大阪へ来て 屋根ばかり 見てみます

*since I lived in Osaka*

*I've been looking at roofs*

*day by day*

足袋の<sup>さ</sup>新<sup>ら</sup>だけが僕に春が来た

*just new tabi have got,*

*spring has come*

*to me*

### ～リバーウィローのため息～ (短詩形文学の国際化4: 速川美竹 (速川和男)の英訳川柳)

英文学・英語学・英学史の研究者である速川美竹は、川柳人であるとともに英訳川柳の第一人者です。現代俳句の英訳を1950年代から手がけています。日本語教師養成用に初めて出版された『日本語ジャーナル』(KKアルク)で、「速川美竹の川柳塾」を一年にわたり連載(1987-1988)し、日英対照で川柳を紹介しました。英訳と洒脱な解説は雑誌を引きたて好評でした。しかしこの連載中、川柳作家からの反応や協力は皆無であり、当時は川柳の国際化に川柳人は無関心であったと、『国際化した日本の短詩』の中で速川は述べています。それから約40年近い現在、やっと川柳人に英訳川柳や海外川柳への関心が生まれてきたように思えますが、どうでしょうか。速川の関わった英訳川柳の代表的のものを挙げてみます。『速川美竹の英訳川柳 開けごま』(柳都川柳社1990)では理解しやすい川柳の英訳、そして日本川柳ペンクラブ編『現代川柳ハンドブック』(雄山閣1998)では、外国人の川柳作家とその著書を紹介しました。2002年には何度も紹介している『国際化した日本の短詩』で、英訳俳句史の概観、現代川柳の英訳を自身の作品も含め紹介に努めました。2003年、999番傘会長の今川乱魚による川柳書『ユーモアは世界を変える』(新葉館出版2003)で、速川は英訳を担当します。「天国も地獄も見ずに癌癒える」(*I recovered from cancer/ Before going/ To heaven or hell*)など二人のユーモアあふれる見事なコンビネーションが頁をつなぎます。最後に私の好きな速川美竹の川柳の一つ、紹介しましょう。

「百年は生きるつもりの本を積む」

*With a thought/ of living for one hundred years./ I make a collection of books.*

(敬称略)

## 恋に目覚める

小栗清吾

無邪気な子供も、やがて恋に目覚める年頃になります。最近では、草食系男子とかいう言葉もあるようですが、江戸川柳では、肉食系で迫ってくる男性に対し、受身の女性があればこれ思い悩むというのがパターンになっています。

くどかれて娘は猫にものを言い 四三

「ねえタマや、このお兄さん、こんなことを言ってるよ。困ったねえ」などと行って、思案しているのでしょうか。

口で言い寄ってくるうちは、娘もまだ余裕がありますが、手を握られたりすると、事態は急迫してきます。

にぎられた片手畳をむしってる 一四三

声も出せずに真つ赤になり、もう片一方の手で畳のケバをむしってもじもじ。最近では、余り見かけない光景ですが。

よしなあと娘一寸ほどゆがみ 七三

「よしなア」と言いながら、ちよつと身体をゆがめる娘。拒否しているのか、それともちよつとその気になっているのか、男としては判断の難しいところですよ。

よしなあの低いは少し出来かかり 初五

こちらは「よしなア」と小声で言つたといふのです。大声で言わないところを見ると、仲良くなれそうだという判断のようですが、どうでしょうか。

馬鹿らしいいやよと暗い方へ逃げ 三三

口では「嫌よ」と言いながら、暗い方へ逃げて行くといふのですから、これは追いかけていけばよさそうです。

かか様が叱ると娘初手は言い 四二

たいていの娘は、「そんなこと言われても、お母さんに叱られるから」と、最初は言うものだというのです。本人は満更でもないようですから、もう一押しで何とかなるかもしれません。

当然のことながら、わかりやすく拒絶される場合も多々あります。

そこから用を言いなよと出来ぬやつ 一四二

男が離れた場所から「ちよつと話したい用があるんだけど」などと言って近寄ろうとすると、「用があるなら、そこから言い

なよ」と冷たく拒絶されたりします。

出来ぬやつおよしなさいと固く言い 三四

娘が「よしなア」ではなく、「およしなさい」と切り口上で言うようでは、全く脈はありません。すっぱりと諦めた方がよさそうです。

しかし、男には見栄がありますので、すぐごと引き下がる態度は取りたくない。そこで、

出来ぬやつマアそう言つて見たものさ 四一

「まあちよつと、そう言つて見ただけのことさ」などと、照れ隠しにごまかしたりします。

遠くから口説くを見れば馬鹿なもの 一八

男性が女性を口説いているのを遠くから見れば、馬鹿な事をしていと思えるものだというのです。ここで「遠くから」は、単に距離的なことだけではなく、当事者から距離を置いた第三者の目で見ると、というニュアンスもあるのでしょうか。

青春時代の真ん中は恥ずかしいことばかり。誰の身にも覚えがある人生の一齣であります。

# 愛染帖

## 新家 完司 選

(投句 276名)

堺市 奥 時雄

熱爛にとよめいているピロリ菌

(評)空きつ腹に熱爛が届いたときの何とも言えぬ「とよめき」。そうか、あれはピロリ菌の悲鳴か。ならば、今夜もやっつけてやるう。

東大阪市 北村 賢子

ハイヒール履いたら次の日は寝込む

(評)足腰の弱い者には拷問の道具のようなハイヒール。体裁などより安全第一。正装でも履けるウォーキングシューズがベスト。

唐津市 坂本 蜂朗

顔を出す鬼と格闘する介護

(評)誰のこころの奥にも潜む鬼。普段は理性で抑え込んでいるが、疲れたときなどに顔を出して、自分も相手も傷つけてしまう。

鳥取市 永原 昌鼓

膀胱の都合で夜中また起きる

(評)若い頃には朝まで一度も目覚めることなく熟睡できたのだが…。老化現象の一つではあるが、寒い夜に起きるのはつらい。

三田市 上垣キヨミ  
街中をきんつばにして雪が止む

(評)すべてを隠す豪雪ではない。街中を柔らかな白い幕で覆ってはいるが、うつすらアノコが見える。まさに「きんつば」である。

弘前市 高瀬 霜石

B級グルメほくも炭水化物党

(評)やきそば、ラーメン、お好み焼き、チャーハン等々。B級グルメの多くは炭水化物。安くてうまいが食べ過ぎにないように！

羽曳野市 徳山みつこ

月末のやりくりならば自信ある

(評)他のことにはイマイチ自信はないが、「月末のやりくり」だけは長年の修練で会得していて誰にも負けない。主婦の面目躍如。

西宮市 緒方美津子

改札機左利きには不親切

(評)たしかに！左利きは少数派なので何かにつけて不便を強いられるが、「苦情を言うほどのことはない」と耐えている。

藤井寺市 鈴木いさお

違和感がある新しいトランクス

(評)新品の綿のトランクスは繊維が固くて何度か洗うまでは違和感がある。よれよれになっても肌に馴染んだ下着は捨て難い。

大阪市 柴本ばつは

あほやなのお金使わず逝かはず

(評)そのように言われないうちに、元気な

うちに旅行に行ったり旨いものを食べたり、この世をもっと楽しもうではないか。

八尾市 宮崎シマ子  
仏飯を上げぬと夫餓死をする

枚方市 伊達 郁夫

引き出しに逃げ回って万歩計

青森市 守田 啓子

三日月に実家の鍵を吊り下げる

西宮市 片山 忠

妻にまで営業笑いしてしまふ

紀の川市 宇野 幹子

三面鏡短所ばかりを写し出す

枚方市 寺川 弘一

貧乏神は機嫌損ねた福の神

大阪府 米澤 俣子

知らぬ間に老婆になっておりました

大阪市 伏見 雅明

核の募その年数にめまいます

和歌山市 土屋起世子

する事があるのに炬燵温かい

三田市 北野 哲男

爺婆を洗うばかりの洗濯機

海南市 小谷 小雪

どきどきを創り出したい薄化粧

倉吉市 牧野 芳光

赤になるたびシグナルが睨まれる

大阪市 栃尾 奏子

観察の結果男はこどもです

河内長野市 藤塚 克三  
ハツカ鉛二つ含んで句をひねる

米子市 中原 章子  
川柳が安否確認してくれる

大阪市 松尾柳右子  
飛行機の音聞きながら作句する

藤井寺市 田付 絹枝  
生姜湯がのどもとノックして通る

明石市 桃谷 和郎  
蒲団から2歩が私の大気圏

札幌市 三浦 強一  
地球取り巻くゴミにゴミの日がない

美文字には少し引かれて選句  
西宮市 牧淵富喜子

半世紀欠かさず米を研いでいる  
足早な二月の窓を拭いている

秋方市 小林 わこ  
渡せず生チョコ眠る冷凍庫

新しい服とシューズで病院に  
鳥取市 夏目 一粹

割烹着似合うリケジョのさわやかさ  
八尾市 中岡 妙

深酔いのたびに心を入れかえる  
運勢をスマホで見てるお手軽さ

高知市 小川てるみ  
わらべ唄敵しい世間教えてる

増税の前に主婦力発揮する  
赤ちゃんの名前がとんと読めません

大阪市 江島谷勝弘  
変わってるバイキンマンが好きな孫

河内長野市 梶原 弘光  
僕よりもアンパンマンが好きな孫

樺原市 安土 理恵  
ちよつと触れてくれたらできた仲なおり

吹田市 太田 昭  
どのように活けても愚痴を言わぬ花

尼崎市 春城 年代  
非常袋のチョコレートだけ入れ替える

貝塚市 吉道あかね  
老眼になって世間が見えてくる

トーストがきつね色ですい朝だ  
岡山市 藤成 操江

その昔履いたヒールが捨てられぬ  
雑草と今年もやるか鬼ごっこ

鳥取市 岸本 宏章  
叱られたことのない子が親になる

僕よりもしつかり絞る洗濯機  
堺市 矢倉 五月

遊ぶにはチョット草書の人が良い  
人前じゃ目立だけですます仲

松山市 神野きっこ  
マー君と気安く呼べぬ大富豪

浜松市 岡田 史郎  
銀盤を掃除しているカーリング

七草なすな唐土の煙来ぬうちに  
休み明け薬を取りに医者回り

神戸市 奥澤洋次郎  
夢さめてこの人ももう会えぬ人

光熱費始末のできる春が来る  
三田市 上田ひとみ

晴れているだけでスキップしたくなる  
ごくたまに女であると思ひ出す

豊中市 松尾美智代  
ふふふふもうすぐ笑う福寿草

黄金も瑠璃も老いの前には色褪せて  
大阪府 井丸 昌紀

半ドアで一目散に走る国  
おもてなし口に出したら恥ずかしい

樺原市 居谷真理子  
半分を見抜いてあとは目をつむる

死に顔はどうぞ寝顔は見せないが  
岡山県 池田たか子

酒飲みの家でよかつた負けず飲む  
CMのサブリ個人差あり過ぎる

棺桶でちと褒め過ぎと聴く弔辞  
河内長野市 坂上 淳司

ダイケアに番長張りに行くお婆  
米子市 後藤美恵子

豊かゆえ合併せずに生きる村  
コーヒートの香り早出の子が残す

八尾市 田邊 浩三  
腰痛に太った女房杖となる

三田市 久保田千代  
野仏にあげる水仙二、三本

旗ゆれて進む方向定まらず  
松江市 石橋 芳山

民意無視右へ舵取る日本丸  
堺市 村上 玄也

右傾化に寒さがしみる七十路  
堺市 大和 峯二

惚け防止と言えば大目に見る家族  
大阪市 大川 桃花

酒と恋 演歌 川柳 株 競馬  
堺市 加島 由一

自信喪失そんな日もあるペンネーム  
鳥取県 細田 裕花

宝ものが名付けたマイネーム  
防府市 坂本 加代

することがないと襲ってくる頭痛  
豊中市 藤井 則彦

初恋は阪妻永久の片想い  
鳥取市 福西 茶子

義理人情昭和は遠くなつたかな  
大和郡山市 坊農 柳弘

トチテタ木口小平を知ってるか  
八尾市 高杉 千歩

叔父も逝き明治の身内みな星に  
河内長野市 松岡 篤

コンサート足の短い人だった  
大阪市 谷口 義

かばい合い老いた犬との朝散歩  
枚方市 松原 保

おもてなしせめて粕汁具沢山  
河内長野市 山岡富美子

おもてなし何はなくとも酒と猪口  
鳥取市 岸本 孝子

申告の季節税務署愛想良し  
豊中市 水野 黒兎

風邪引きをうつさそれそうな電話口  
和歌山市 古久保和子

スライドで仏を説いている和尚  
和泉市 横山 捷也

音量を上げて一人のお留守番  
高槻市 富田 保子

雨音がショパンに聞こえない私  
倉吉市 中村 毅

雪止まずうどんぐつぐつ冬籠り  
河内長野市 谷 久美子

新幹線通りローカル疲弊する  
三田市 多田 雅尚

村に住み都会の風を懐かしむ  
鳥取市 前田 楓花

姑に好かれて嫁ぎ安堵する  
河内長野市 黒岩 靖博

骨のこと考えてする日向ほこ  
三田市 石原 歳子

将来の夢はと訊かれ困り果て  
川西市 山口 不動

あるはずのない意地張っている辛さ  
鳥取県 斉尾くにこ

晩飯の刺身が酒を呼んでいる  
鳥取市 谷口回春子

百葉の長飲み続け白寿まで  
河内長野市 村上 直樹

馬の骨同士で馬が合う飲み屋  
羽曳野市 吉村久仁雄

一本の銚子が絆とりもどす  
倉吉市 岡崎美知江

一杯の酒でも酔える酌次第  
鳥取市 竹口 清信

熱燗二合にプラスチックで二月  
香南市 桑名 孝雄

平熱になるとビールに味が出る  
三田市 堀 正和

よたよたと電柱を抱く千鳥足  
池田市 上山 堅坊

雪しんしん降ってるうちは美しい  
神戸市 田中 章子

旅人に何と豪華な雪景色  
三田市 福田 好文

老いてるが寝顔は今も青いまま  
寝屋川市 鈴木 楽鬼

オリンピック嫌いな国と好きな国  
富田林市 片岡智恵子

中韓が同床異夢で手を結ぶ  
河内長野市 渡邊 修

尾崎市 長浜 美籠  
メール便予期せぬ午後を連れてくる

大阪市 坂 裕之  
足りなさを認めて二人手を繋ぐ

大洲市 花岡 順子  
エプロンの何度やっても立て結び

大阪市 岩崎 公誠  
老化度は調べなくても進んでる

高槻市 富田 美義  
おーいママ呼んでる声も傘寿過ぎ

倉吉市 山中 康子  
自慢した膝だが今朝は泣いている

和歌山市 楠見 章子  
諦める速さが何たつて取り柄

四條畷市 吉岡 修  
新曲の演歌も聞いた気がします

神戸市 能勢 利子  
七億円使い切れずに目が覚めた

和歌山市 磯部 義雄  
パツとパツ二も同居する我が家

大阪市 榎本日の出  
近大のマグロの列に並ばされ

神戸市 大島まさる  
片仮名の多いマニュアル飛ばし読み

鳥取県 大塚美代子  
につこりと笑えば溶ける肩のこり

橋本市 石田 隆彦  
ゆるキャラが愛嬌競う観光地

鳥取県 近藤 秋星  
立春を待ってたように冬將軍

つくば市 嶋本 喬  
三世代そろう雪掻き日曜日

大阪市 榎本 舞夢  
二月まで新年会が続く幸

西予市 黒田 茂代  
まず黙禱から始まったクラス会

高槻市 安田 忠子  
いっせいに楊枝を使う同期会

寝屋川市 平松かすみ  
コツコツと集め役立つベルマーク

長岡京市 日置みどり  
謙遜の中に小自慢見えかくれ

田辺市 岡本 昇  
容姿端麗富士のお山もマグマ抱く

八尾市 村上ミツ子  
水ごくり春の近付く音がする

豊橋市 藤田 千休  
雅号つけ別の自分を生み落とす

和歌山市 上田 紀子  
幸食べる箸からお骨拾う箸

堺市 遠山 唯教  
年寄りが利殖の欲をねらわれる

三田市 尾崎 一子  
嫉妬するこれも女のエネルギー

奈良県 渡辺 富子  
カラフルな葉おはじきしたくなる

大阪市 奥村 五月  
偽装など探してもない道の駅

大阪府 小栢こずえ  
本物を知らず偽物分らない

鳥取県 石谷美恵子  
海を見て反省ばかりして帰る

羽曳野市 永田 章司  
靖国参拝独り善がりのガラパゴス

神戸市 山田婦美子  
豆撒いて逃げる鬼なら怖くない

堺市 澤井 敏治  
幻を見てた白内障の恋

大阪市 藤原千恵子  
一言の助言で十の知恵を得る

米子市 森脇 麗  
ときめきの種をポッケに春を待つ

堺市 増田わこう  
病得て家内の偉さ思い知る

和歌山県 森下よりこ  
道添いの畑はきれいに手入れする

亀岡市 井上 森生  
喜寿越えるコツは芯から笑うこと

西宮市 福島 弘子  
前もって小銭数えてレジ並ぶ

高槻市 左右田泰雄  
特売のチラシ片手に買いそびれ

寝屋川市 森 茜  
ごめんなさい献血車の脇すり抜ける

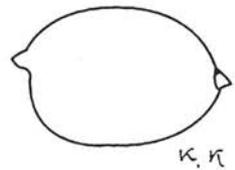
共選欄

檸檬

抄

(薰風書、カットとも)

(投句 380名)



「張り切る」 竹 治 ちかし 選

宮参り妻は朝から忙しい  
 張り切っているのは孫と老い二人  
 祭りまで三日男が燃えている  
 あなたしか出来ぬと言われやる気出す  
 ハレの日に桶いっぱいのちらし寿し  
 一泊の旅へ張り切る春衣  
 張り切って今年こそはも三ヶ日  
 張り切ってた頃の写真もセピア色  
 張り切れと言えず言われぬ歳である  
 張り切って行って帰りはしよんぼりと  
 張り切ってまだフラインクしてる古希  
 張り切れば張り切るほどにボロが出る  
 ハードルを下げて張り切る古稀の春  
 先生が美人ウクレレ買いました  
 お若いと言われて重い荷を背負う

松原市 森松まつお  
 富田林市 中井 アキ  
 岡山市 丹下 凱夫  
 明石市 糀谷 和郎  
 大阪市 枳尾 奏子  
 出雲市 小白金房子  
 堺市 矢倉 五月  
 宇部市 平田 実男  
 豊中市 江見 見清  
 鳥取市 近藤 秋星  
 河内長野市 梶原 弘光  
 羽曳野市 三好 専平  
 鳥取県 西谷 悦子  
 福原市 居谷真理子  
 唐津市 坂本 蜂朗

「張り切る」 大内 朝子 選

春が来たさあ張り切って行く句会  
 張り切って出番待ってるランドセル  
 祭りまで三日男が燃えている  
 四月から一円玉が元気だす  
 パーゲンのチラシはチェックして走る  
 張り切ると糸はもつれていくばかり  
 お若いと言われて重い荷を背負う  
 必要とされて張り切るお父さん  
 娘の縁談張り切る妻に腹を立て  
 張り切って出かけて戻る忘れもの  
 止められて余計むくむく湧くやる気  
 張り切って駆けて転んだ年女  
 町内の花見会計腕に縊り  
 参観日張り切る母に下向く子  
 勇み足こんな筈ではなかったが

大阪市 津村志華子  
 松江市 藤井 寿代  
 岡山市 丹下 凱夫  
 大阪市 大西 晴雄  
 和歌山市 古久保和子  
 大洲市 花岡 順子  
 唐津市 坂本 蜂朗  
 東大阪市 北村 賢子  
 川西市 大坪 一徳  
 大阪市 榎本 舞夢  
 大山市 金子美千代  
 京都市 三宅 満子  
 唐津市 仁部 四郎  
 京都市 榎本 宏子  
 藤井寺市 高田美代子

張り切ってみても儂いシヤボン玉	鳥取市	永原 昌鼓
今年こそ続けるつもり日記買う	神戸市	能勢 利子
肩書がとれて張り切るバスボート	吹田市	木下 敏子
張り切れれば何か少しづつ消える	高知県	小澤 幸泉
選手より張り切っているチアガール	堺市	奥 時雄
張り切って化けてお出かけディナーショー	堺市	澤井 敏治
応援の方が鉢巻迄してる	佐渡市	高野 不二
張り切って突込みあつさり叩かれる	八尾市	内海 幸生
張り切ったわりに報いのない畑	和泉市	横山 捷也
ゴルフ日和今朝は五時から起きている	大阪市	太田としお
宴会になると張り切る隠し芸	鳥取県	大塚美代子
春だ春ネコに負けずに遅しく	大阪市	佐藤 忠昭
宴会になればキラキラ目がひかる	大阪市	江島谷勝弘
張り切り過ぎモグラたたきにあう憂き目	京都市	清水 英旺
張り切って神も仏も友にする	三田市	野口 晶子
やつと一匹釣り上げ急に元気づく	シドニー	坂上のり子
春や春ピンクをまとい君と逢う	奈良県	渡辺 富子
靴が鳴る意中の人とビクニツク	篠山市	酒井 真由
一人だけ張り切り皆に疎まれる	高槻市	片山かずお
張り切った人の隣にいて疲れ	鳥取市	倉益 一瑤
張り切って征って来ますとそのまんま	大阪市	川端 一步
貼り薬少し張り切り過ぎました	泉佐野市	稲葉 洋
張り切った背骨を今宵ねむらせる	倉吉市	山中 康子

一人だけ張り切り皆に疎まれる	高槻市	片山かずお
張り切ってみても儂いシヤボン玉	鳥取市	永原 昌鼓
ライバルが居てこそ今日も頑張れる	唐津市	山口 高明
同窓会張り切りすぎた服で行く	松原市	森松まつお
張り切るとなぜか失敗ばかりする	米子市	後藤 宏之
声援へええ格好をして転ぶ	堺市	村上 玄也
新米のおばあちゃんですよろしくね	三田市	上田ひとみ
独立を目指す庖丁よく切れる	南あわじ市	萩原 狸月
頂が見えて弾みがついてくる	西子市	黒田 茂代
張り切って飛んだつもの水溜まり	和歌山市	玉置 当代
とてつもない夢を抱いて入門書	橿原市	居谷真理子
ふんばって積み残された青いバラ	西脇市	七反田順子
張り切りを演じ心に活を入れ	高槻市	富田 美義
再起への夢にもえてる玉の汗	紀の川市	宇野 幹子
胡蝶蘭張り切っている開店日	三田市	堀 正和
食べるしゃべる参加せずにはいられない	奈良市	大久保真澄
ミステーク張り切り過ぎた勇み足	奈良県	中原比呂志
珍客へ張り切るおもてなしの腕	和歌山市	坂部紀久子
6時半起床 現役続行中	弘前市	高瀬 霜石
張り切って生きると愚痴も出てこない	吹田市	須磨 活恵
張り切って出かけた妻が戻らない	米子市	成田 雨奇
子等帰り落ち着いた頃風邪を引く	堺市	齋藤さくら
張り切るとつい口に出る津軽弁	弘前市	福士 慕情

張り切りは六分四分は明日のため

鳥取市 吉田 弘子

張り切った人生余生自然体

和歌山市 松尾 和香

張り切るとすぐ舞い上がる奴唄

和歌山市 武本 碧

張り切った昭和の紐が落ちている

青森市 守田 啓子

張り切って出かけた妻が戻らない

米子市 成田 雨奇

張り切って階段ひとつ踏み外す

岡山県 田中 恵

張り切って粧し込んだら疑われ

広島市 岸本 清

ライバルの張り切りぶりが気にかかる

四條畷市 吉岡 修

張り切るとつい口に出る津軽弁

弘前市 福土 慕情

張り切って生きた割には報われず

松江市 松本 文子

歯車が張り切りネジがゆるみだす

海南市 小谷 小雪

張り切ると糸はもつれていくばかり

大洲市 花岡 順子

張り切った頃は悪魔も味方する

貝塚市 石田ひろ子

張り切って元気な朝を産み落す

出雲市 伊藤 玲子

手作りのおせちの頃は愛でした

佐賀県 真島久美子

張り切って時々杵を踏み外す

西宮市 牧淵富喜子

張り切って生きるスベアのない命

大阪市 小谷 集一

張り切ってもらう程度の嘘はつく

堺市 内藤 憲彦

張り切って大きな卵ひとつ産む

出雲市 多久和敬子

秀句

張り切った訳は誰にも言うてない

藤井寺市 鴨谷瑠美子

張り切るとついはい出してしまふ文字

米子市 吉田 陽子

彼招く夜は庖丁研ぎ直す

岐阜市 平野あずま

ライバルの張り切りぶりが気にかかる

四條畷市 吉岡 修

張り切って一人芝居に気がつかず

熊本市 永田 俊子

張り切っておしゃれしたのに休診日

岡山県 池田たか子

マドンナの前ではボクも見栄を張る

弘前市 稲見 則彦

張り切りが裏目に出ない事祈る

泉佐野市 稲葉 洋

張り切ると三つ四つは若返る

藤井寺市 太田扶美代

エンゼルに変身明日をノックする

青森県 松山 芳生

夢風船張り切り過ぎてバンクする

和歌山市 武本 碧

目標に磨きをかけているのです

大阪市 立蔵 信子

土踏まず張り切り過ぎていませんか

吹田市 太田 昭

長生きの秘訣こぶしの中にある

今治市 渡邊伊津志

冬蹴ってステップ軽く春の靴

富田林市 山野 寿之

張り切りの美学と思う仁王像

枚方市 海老池 洋

足踏みをした分バネに張り切れる

鳥取市 吉田 弘子

張り切った汗が誇りのポランテア

河内長野市 谷 久美子

死にたくない死にたくない歩き出す

鳥取市 土橋 螢

落ちつけと気負う心に通り雨

高槻市 原 洋志

張り切って行けばこの道光りだす

岩出市 藤原ほか

九条を守り続ける草の根に

大阪市 近藤 正

秀句

張り切って仕事ができる幸せだ

松江市 相見 柳歩

朝日さす張り切る力湧いてくる

大阪府 小栢こずえ

泣くもんか明日という日がきつと来る

紀の川市 楠原 富香

「屋根」

(投句207名)

池 森子 選



インフレかアベノミクスは屋根が無い  
ハルカスの屋根が見たいと鯉のぼり  
一つ屋根同床異夢で五十年  
退職金自分の屋根の下で住む  
我が屋根も今や小さな発電所  
屋根越えて仲間外れのシヤボン玉  
スケッチにするかやぶきが見当らぬ  
屋根から見た寂しがりやの遠花火  
想い出があふれる屋根の下に住む  
屋根裏に過疎の歴史がまつてる  
屋根つけて下さい心濡れてます  
煩惱の四季を覆ってくる屋根  
凸凹がまだ噛み合わぬ一つ屋根  
藁屋にも家系守ってきた絆  
大雨に楽しく歌うトタン屋根  
大屋根に自浄せよとの雨が降る  
屋根走るネズミ小僧の正義感  
シーサーが本土の方へ向きを替え  
大屋根の下に広がる小宇宙  
母さんの気風でくくるひとつ屋根

堺市	増田わこう	大阪府	古今堂蕉子
札幌市	小沢 淳	札幌市	小川 注湖
松江市	丸山 孔一	宝塚市	稲葉 洋
泉佐野市	高野 不二	佐渡市	松山 芳生
青森県	遠山 唯教	堺市	岡崎美知江
倉吉市	真島久美子	佐賀県	五月
堺市	矢倉 美義	高槻市	富田 美義
姫路市	古川 奮水	池田市	上山 堅坊
鳥取市	平尾 菜美	鳥取市	夏目 一粹
河内長野市	坂上 淳司	八尾市	村上ミツ子
和歌山市	武本 碧		

どこまでも青空屋根もはしゃいでる  
捨て猫を雨からかばうヤツデの葉  
お隣の屋根に降り立ったのは魔女  
屋根裏に集い小悪を立ち上げた  
家の字の時に重たいウ冠  
夢いっぱい積木の屋根は真っ赤っか  
仲の良さだけが取り柄の一つ屋根  
泰然と合掌造り雪景色  
茅葺きの屋根に糸図が生きている  
青い鳥彼方の屋根に止まつてる  
雨漏りもドレミの歌もトタン屋根  
一族へ息を吐き出す鬼瓦

大阪府	榎本日の出
奈良市	大久保眞澄
大阪市	栃尾 奏子
米子市	生田 和之
橿原市	居谷真理子
大阪府	津村志華子
藤井寺市	太田扶美代
三田市	堀 正和
河内長野市	山岡富美子
富田林市	中村 恵
大洲市	花岡 順子
長野市	丸山 健三

避雷針装備万全父は屋根  
雨洩りの屋根に詰っている昭和  
屋根裏にそっと隠した過去のしみ  
この屋根がお気に召さない福の神  
母さんは大きな屋根を持っている  
人  
藁屋根の下でピアノのソコを聴く  
地  
生きる意味問うて子猫と一つ屋根  
天  
競売を斜めに切った鬼瓦  
軸  
薄氷を踏んだ過去なら屋根の裏

弘前市	高瀬 霜石
富田林市	中井 アキ
河内長野市	藤塚 克三
鳥取県	石谷美恵子
高槻市	原 洋志
三田市	石原 歳子
奈良県	渡辺 富子
富田林市	山野 寿之

「カンパ」

(投句 199名)

夏 目 一 粹 選



空ビンへ小銭一年貯めカンパ  
奉加帳洪々名前書いてる  
おさい銭は神様へ御礼のカンパ  
赤い羽根付けて人ごみ軽い足  
カンパしてちよつと嬉しくなる歩幅  
ガンバレとカンパで送る夢舞台  
カンパする気力萎えさず消費税  
脳味噌の錆にカンパの潤滑油  
頭金カンパ嬉しい親バカだ  
カンパして朝日を浴びるいい笑顔  
透明なカンパの箱に札光る  
怪しげなカンパに躊躇する小銭  
復興のカンパそろそろ忘れられ  
歓迎会カンパの覚悟して課長  
思い切りカンパし笑顔またもう  
賃上げの効果カンパに笑み洩れる  
一度きりと思つたカンパ断ち切れず  
カンパ強制されてるような消費税  
家計簿のかけら集めてするカンパ  
夢を見る球児のカンパ惜しまない

和歌山市	磯部	義雄
鳥取市	山下	凱柳
京都市	三宅	満子
鳥取県	西谷	悦子
河内長野市	山岡富美子	
鳥取県	加賀田志延	
鳥取市	谷口回春子	
河内長野市	谷	久美子
鳥取県	細田	裕花
大阪市	榎本	日の出
池田市	上山	堅坊
東大阪市	佐々木	満作
八尾市	村上	ミツ子
鳥取県	山下	節子
鳥取市	春木	圭一郎
松江市	小川	注湖
米子市	中原	章子
羽曳野市	徳山	みつこ
富田林市	山野	寿之
鳥取市	岸本	孝子

清らかな音が聞こえる募金箱  
カンパしてカンパされないので誇り  
カンパならハイハイと言う論吉さん  
カンパできることが倅せと思う  
カンパしてあげたい被災地の叫び  
被災した体験あつてするカンパ  
ずぶ濡れへボケットティッシュカンパする  
草の根のカンパに燃えて山動く  
子の嘘を看破しながらのつてやる  
カンパする金はないから奉仕する  
助け合う意識高めているカンパ  
世話になる子どもだカンパしておこう

佳	温暖化地球を救う知恵カンパ	亀岡市	井上	森生
	村を出る孫にばあちゃんするカンパ	奈良市	米田	恭昌
	右へならえ義理のカンパとわかる額	鳥取市	池澤	大鯰
	草の根の主張へカンパしてあげる	大洲市	中居	善信
人	難病を救うカンパが美しい	鳥取市	永原	昌鼓
	懐の寒い人程出すカンパ	河内長野市	坂上	淳司
地	ニッポンへ八パーセントカンパする	鳥取市	福西	茶子
天	北国の人は無言で力貸す	弘前市	高瀬	霜石
軸	貯まるまでカンパは待とうホトトギス			

「はつらつ」

(投句 201名)

佐々木 満 作 選



アスリート汗も若さも弾けとぶ  
金メダル鬻る笑顔が頼もしい  
青空と白銀を縫うジャンプ台  
はつらつとしているレジェンドの葛西  
はつらつとやる気にさせる知恵袋  
故郷の神輿を担ぐ輪に入る  
み仏を信じはつらつ今日あした  
シンクローの脚はつらつと水を切る  
はつらつと歩く道から春になる  
はつらつの同心円でいい夫婦  
妻母の役割終えて今が旬  
よく通る声だ元気が余ってる  
ここからの道はつらつとゆっくりと  
澁刺か自暴か地球元氣すぎ  
はつらつと体内時計指示を出す  
はつらつと命をつなぐ朝の水  
古希すぎてもだはつらつと山ガール  
若者の門出はつらつと風光る  
長靴で元氣にはしゃぐ水溜り  
はつらつと親飛び越えた竹とんぼ

紀の川市 宇野 幹子  
横浜市 菊地 政勝  
羽曳野市 徳山みつこ  
八尾市 村上ミツ子  
三田市 尾崎 一子  
弘前市 福士 慕情  
八尾市 宮西 弥生  
大阪府 米澤 俣子  
奈良県 渡辺 富子  
大阪府 岩崎 公誠  
堺市 矢倉 五月  
大阪府 榎本日の出  
藤井寺市 鈴木いさお  
大阪市 古今堂蕉子  
三田市 北野 哲男  
大阪市 津村志華子  
豊中市 松尾美智代  
鳥取県 山下 節子  
大阪市 奥村 五月  
貝塚市 石田ひろ子

はつらつと歳を重ねてまるとい味  
はつらつの初心を抱いて始発駅  
宣誓の声がはつらつ甲子園  
はつらつと余生を満たす心技体  
練習に汗はつらつと青春譜  
お見舞いにはつらつと少し置いてくる  
はつらつと春に漕ぎ出す虹の權  
尻上りできて五歳の玉の汗  
はつらつとした次世代に託す夢  
移植の樹やっとはつらつ春を告げ  
残り火を燃やしはつらつと生きる  
はち切れる笑顔でいらっしやいと言う  
佳  
「おいしい」と言えば「ありがとう」が返る  
雪解けの水はつらつとして甘露  
感受性みがきはつらつ飛んでいる  
はつらつと夢が弾けるランドセル  
初期化してブランドになる割烹着  
人  
はつらつと音符が跳ねる春の川  
地  
万物の命バンザイする活気  
天  
胎動を抜けて拳が天を打つ  
軸  
はつらつと未来を担う子の巣立ち  
倉吉市 岡崎美知江  
鳥取市 吉田 弘子  
堺市 村上 玄也  
西宮市 足立 茂  
豊中市 水野 黒兔  
明石市 桃谷 和郎  
岡山市 永見 心咲  
西宮市 緒方美恵子  
尼崎市 長浜 美籠  
米子市 後藤美恵子  
鳥取県 西谷 悦子  
和歌山市 柏原 夕胡  
弘前市 高瀬 霜石  
河内長野市 藤塚 克三  
鳥取市 夏目 一粹  
東大阪市 北村 賢子  
河内長野市 山岡富美子  
鳥取県 斉尾くにこ  
香芝市 大内 朝子  
弘前市 今 愁女

# 紫の椅子を羨む

橘高薫風著『檸檬』評

東野大八

六年ほど前だったか、お元気なころの路郎先生へ

「橘高薫風という作家はすばらしい。いまに川柳塔を背負って立つ人になりますよ」といったことがある。

「君もそう思うか、あんなのが五人、いや三人居てくれたらなあ」

と先生が真顔で答えられたことがある。

その彼の句集『檸檬』（れもん）を、通読して、かねての予想にたがわぬ好作家であることを確かめ、私はひとりあたりを見回して、上機嫌になり、傍の妻にさえ

「いい句集だよ、君も眼を通して御覧」と言い出す始末だった。

私はこれまで、数多くの句集に眼を通してきたことだが、ただ一度も、本気になってその句評を書いたことはない。だが、こんどだけは、いまこれから書くようなことを、書かされる破目に、独り陥る始末となつ

た。

薫風という作家を、いつとはなしに注目しはじめた。私の意識外の意識というか、そういうった心の動きを、いまじつくりとせじじつめていくと、それは、かつての日の私自身の若さへと結びついていく。

若いころ、私は重症の文学青年だった。新感覺派時代の横光利一が

「あつ、紫だッ」

と一人の女性に対し魂の叫びをあげた一郎にぶつかった個所があった。この横光さんが大陸へきたとき、若い私はインタビュをとる膝頭のふるえをどうすることもできなかつた。『旅愁』に出てくる、東野とい

うのはそのとき私がさし出した名刺からとられたものである。その旨のハガキを貰ったときには天にも昇る心地で、その紙片を長いこと机の前に、ピンで貼りつけておいたのだ。

余談になつたが、紫のイメージは、そのように強烈な光芒を放つて、今も私の心の奥底に、けんらんと輝いている。

だが、ある權威のある教育者の話に、親のないような、愛に飢えた子は、つねに紫色の絵を描く、というのが出てきた。飢えたる愛のシンボライズされたものが、この色か？愛は知的なものへの飢えでもあるのか、それとも肌合い濃い人の世への渴仰なのか、ロシエルは飢えたる青春の飢餓という言葉を用いているが、私のかつての日のころの奥底には、湿润したその心がつねに潜在していたことはたしかなようだ。とめどなき寂寞のなかの彷徨――。

薫風は、そういうった私のかつての日の、心の風雪と、ほぼ相似た拠点に立つて、黒髪なびかせて、ある寂寥に胸痛めつけられた若者ではないのか。それは、文学か、恋か、人の世か。

―惚れている女、癖はどこですの？

―デスマスクやばり俺は俺という

―豆しほりお俠な恋がしてみたし

これが三十台にかかったころの私の句であつた。はなやくような中にくくもる、哀切―思えば私という男は、今日に立つともは

や昨日への郷愁に立ちどころにかりたてられる。薫風の句は、それと同じ風が吹きわたっている。その奥底には、誰とも知れぬ、エリート香水をふりまいたペーソスの流れ。

— 恋人の膝は檸檬のまるさかな

— 恋なれやわれに盪あるごとし

— 花の香を嗅ぐ顔をして接吻す

— 乱れ髪式部の世より恋は憂き

多情多感な、一人の若者のうた、そのみずみずしさ。もはや、言うすべもなし。

— 春風の帷に吹くごとく懸想かな

— 墓の前刻去るまに去らしむる

— 生れし時灯ありき死に行く時灯あらん

この三句の感覚はS・モームの作品のようにすばらしい。

この作者は、日記体の但し書の句に出色のものが多い、この種のもの総じて深味と味に欠けがちなものだが、彼はその対象のもつムードの把握がまことに巧い。

小出楯重展

裸婦の像わが頬にかたき無精髻

友人結婚

千万の瞳の中の瞳かな

阿波踊

鳥追笠を深くかぶれば恋めきぬ

東京オリンピック

ひた走るアベベ仏陀の相に似る

薫風の世相批判は常識人の折目正しさで、サラリとしていてアクがない。それだけに、ドミエの漫画の如き味合いがある。

— 政治家の顔は自然と相容れず

— 労働歌蟻がうたえば凄かるう

— 弱肉強食鱗皮の鞆持ち

— 学生を矢面に立て国貧し

— 落選の酒は問答無用なり

— 鶯の啼く庭に來た執達吏

— 六法全書の重さと聖書の重さ

まだいくらでもある。書けば、句集すべてを書き連ねていかねばならないので、割愛せざるを得ないが、海女や、鳥取砂丘、そして十二月の句に秀句、名作が多い。私は、これからも、折ある毎にこの句集をひらき、慰めの日々の糧としていくつもりだが、巻頭にある一句にこうある。

— 人生諸柳は日々の風を見ず

彼は自然の中の生身、人間のただ中の孤独世俗の底の哀感を、どうこれからの句日記に書きつらねていくか。私は薫風を終生

注目していききたいと思う。この人が四十五

となり五十となるとき— そうだ私は五十の時の薫風の句を見て死にたいとすら考える。

正直にいつて「この人は短命なのではないか、句が鋭く冷たすぎる」とそのかみ思つたことだつた。しかし、当分、その心配はなさそうだ。

過日路郎忌に彼と茶を飲んだとき、彼はためらいもなくレモンスカッシュをのんだが、いかにもこの人らしい、と私は感銘したことだが。私はそうした彼に、果実の貴族レモンの、誇り高き気負いの情熱のまどかさを感じた。

— 紫の椅子の愁いはわが愁い

最後に、五十歳の薫風に私が期待するのは、レモンの中で句心に腐つたバナナや、トマトや、いもまでが入りこむ人の世の「錆」を身につけた彼に大いなる希望を抱くからであろう。ともあれ、川柳塔の今日から明日は彼の双肩にあるはずだ。いや独り川柳塔ではない、私の欲する最大の柳人として、いまに日本柳壇の輝く太陽となる人だと信じる。まさに視野無限（路郎序）である。（ちとほめすぎたかな） 呵々

（川柳塔 昭和四十一年十二月号より）

# 薫風曼荼羅

木本朱夏

## 師はこの人

読み初めの今年は石田波郷集

薫風

「川柳塔」昭和45年1月号に発表された作品である。時に橋高薫風四十四歳。川柳塔編集長であった。

薫風が読み初めとして選んだ石田波郷は大正2年3月18日、愛媛県松山市生まれ。十五歳で俳句を始め水原秋桜子に師事、明治大学を2年で中退。俳誌「馬酔木」の編集に関わりながら、二十二歳で第一句集「鶴の眼」で鮮烈にデビュー。しかし、太平洋戦争の末期、丙種合格の三十歳の波郷にすら召集令状が届く。

その出征先の中国山東省で左湿性胸膜炎を発症した。そもそも召集の前から左肺門リンパ腺炎に罹っており、「兵隊の激務に耐え得る健康状態ではなかった」と、「わが父 波郷」に長男・石田修大は書く。

雷落ちて火柱みせよ胸の上  
たばしるや鴉叫喚す胸形変

波郷

綿虫やそこは屍の出でゆく門

国民病とも呼ばれた結核は、昭和10年代には死因のトップであり以後は減ってゆくが、昭和23年に最後のピークを迎えた。波郷は戦後間もなく肋骨七本切除という凄まじい手術を余儀なくされ、昭和44年10月21日、五十六歳で没するまで病とは縁の切れない生涯であった。

療養中の波郷はすでに俳人として世に出ていたが、薫風が川柳に出合うまでにはまだ時間がかかる。

昭和63年「川柳塔」7月号編集後記に

一・・・この雑誌（週刊サンケイのこと）には忘れられない思い出がある。当時、私は肺結核の自宅療養を続けていた。（中略）文庫本で多くの作品に親しみ、自分よがりの句や歌を作っていた。週刊サンケイにも短歌欄があり、選者は吉野秀雄氏。氏も結核療養の経験があったので、何か親近感めいたものを抱き投稿を始める。没が続くものの、わが歌が活字になるのを夢見て発行日は本屋へ駆けつける。（中略）冬はまだ暗くて寒いうちから出掛けるほどなのに、ない。今度もないと、これが一年間続いた・・・と記している。

時実新子が発行した「川柳展望」8号（昭和52年2月1日発行）の天根夢草との対談は、薫風を知る上で貴重な資料である。薫風の発言を要約する。

「川柳界のことになると、ほくは病気をさておいて語

れないわけだ。終戦で桐生へ帰って、学校へ行っている。3年生の夏に発病した。学校は桐生高等学校（現群馬大学工学部）で3年で中退している。薫風曰く「ぼくのおやじはお前が文学が好きなら文科へ行つて、それで競争にとられて死んでも本望ではないか、（中略）ぼく自身、銀行員になりたかつた。おふくろが、何せ一人息子やから徴兵の延期になる理工科へ行けと……」。

けれども徴兵延期届を提出するのを忘れ、第二乙種であつたが召集され秋田で三カ月訓練したという。

戦後すぐに肺結核になつたが、何とか元氣になり働けるようになっていた。ところが昭和29年に再々発して明和病院に入院。そこに水谷鮎美の指導する青蛙川柳会があつた。同室の片山鏡水に勧められ作句を始める。

昭和30年の2月句会の課題「乱れ髪」で

乱れ髪式部の世より恋は憂き

が、平抜きに抜けた。処女作である。青蛙川柳会には、病院の事務長で路郎門下であつた西尾青一路や小浜牧人もおり、自然に川柳に興味を持った。翌年には麻生路郎の「川柳雑誌」に投句を始める。初入選は

雄鶏の心初日の出に對い

薫風

毛皮着て貧しい心とも見えず

の2句が3月号に載り9月号、11月号と巻頭になる。

初めて路郎に会つたのは昭和32年4月のこと。薫風は

一・…麻生路郎の句集「旅人」に出会い、路郎の句に

惚れその薫陶によつて穿ちのかつた鋭さ、清冽な氣韻、ふとこぼれたような述懐に魅力を感じ（中略）このような川柳を目指して挑戦したい……

と衝動にかられて路郎の門を叩いたのであつた。

人類は悲しからずや左派と右派

路郎

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

行末はどうあろうとも火の如し

薫風が「師はこの人」と定めた麻生路郎は、いわゆる六大家の一人。明治21年7月10日広島県尾道市生まれ。生母が病弱のため生後ほどなく里子に出された。十歳で大阪にいた父に引き取られ、十六歳から川柳に手を染める。大正13年「川柳雑誌」を創刊。昭和11年7月、「専門家なき世界は発達せず」と川柳職業人を宣言。川柳の社会化に生涯をかけた。

「川柳は人間陶冶の詩である」「いのちある句を創れ」を標榜。また「句はその人のところである。十七音字はその人の姿である。リズムはその人の呼吸である」と、火のような熱情をもって川柳に向き合つた。

晩年の路郎はことに「穿ち」の重要性を説いた。

一・…内を見、奥を見、本質を見、単に風刺に通じる批判的穿ちだけでなく、ユーモアの穿ち、抒情的感觉的穿ち、軽み穿的穿ちなど（中略）穿ちの追求だけでも作家一生の研鑽には事欠かぬ……

昭和40年7月7日没。行年七十六。番傘の岸本水府と

は生涯を通じて、盟友でありライバルであった。

## 雨の思い出

惜しみなく愛は奪えと 曼珠沙華

薫風を敬愛している川柳塔同人・栗原道夫は、改訂・増補『橘高薫風川柳句集』全句索引を編纂。(平成20年10月1日川柳塔社発行)。薫風作品の一句一句に総ルビを付け、初出などを纏めた労作で補注が素晴らしい。

薫風資料として一級である。その106頁に次の記述がある。少し長いが引用したい。

一・一・一九九六年版『川柳年鑑』(1996年7月10日発行・緑書房)に、時実新子・尾藤三柳との座談会「受章句・問題句を斬る」が掲載されている。その中で薫風は「初心時代に、療養生活時代でしただけれど、いろんな本を読んでいまして、有島武郎の『カインの末裔』とか『或る女』にしろ、『惜しみなく愛は奪ふ』というような小説、全集を見たりしていますと、『惜しみなく愛は奪ふ』なかなかいい言葉やな、そこへ曼珠沙華がひらめき、ベッドの上でつくった、そういう連想がひらめいたりしたのを、ああ、一丁できた、と言いながらやっていた時期があります・一・」。

たしかに「川柳雑誌」昭和38年6月号「雨の思い出」にも次のように書いている。当時、薫風子と号して

一・一・にやにやとした傍観的な態度で作句した時代

があった(中略)最初のころ新しがりやで新しい句をつくらんらんと思っていて「春愁の階段ゆるく蝶をなせり」といった新しがりの句をつくったのが路郎に全然通らなかった。一・一・(NHK学園大木俊秀との対談)

薫風の初心時代の作句態度が彷彿とする。

朝顔のファンファーレの中僕は生れた 薫風

橘高薫風・本名薫は大正15年7月11日、兵庫県尼崎市生まれ。幼少時より身体が弱かったという。川柳「平安」に掲載されたエッセイ「小さいあの日に」には、薫風の幼年時代が窺われる。

一・一・「ハナ、ハト、マメ、マス」明治、大正を思わせるあの暗い色をした表紙の国定教科書を、私は五才になるかならずであてがわれ、毎日音読していた。学校へ上がるまでは虚弱であった私は(中略)とりわけ、この教科書を愛好していたのを記憶している。音読の快さを覚えた第一期と言える。小学校時代には教科書に掲載された和歌俳句の類に興味は示さなかったが、六年生のとき、父が私に買って来た本の中の一冊に、川田順編『幕末愛国歌集』があり、それを読んだのが契機で、万葉集、古今集、新古今集、山家集、金槐和歌集(中略)から明治、大正、昭和の有名作家の歌集を読みついで。とりわけ初期に読んだ万葉集の長歌を暗記してしまうほどであった(中略)この時代(六年生―中学生)には俳句・詩にはまっ

たく振り向くことがなかった・・一。

闘病時代になぜ吉野秀雄選の短歌であったのか、謎が解けた思いがする。幼少期に耽溺した万葉集や新古今のリズムが、心地よく身に染みついていたのである。

## 詩歌の本質

入院や わが来し方の土埃

鷺一羽身じろぎもせぬ手術熱

病み上がり 蟬を放してやれと言ひ

病みて長し仏像のごと拭かれおり

胃半分 肺半分の湯呑かな

波郷と同じように薫風もまた右肋骨を八本切除している。波郷の地獄の劫火に焼かれる絶叫のような作品群に比べて、薫風の病床吟は平明で抑制が効いている。波郷のように現実を冷徹に凝視する強さがなかったと言うより、薫風には嫌なこと辛いことは見据えたくないという思いがあったのではないか。

昭和48年12月号の「川柳ジャーナル」に、石田柎馬は薫風との対話を次のように記している。

一・・美意識から離れたような、人と人とのふれあいの哀しみとか、もっと暗いものはお書きにならないの問いに対して「それはやつぱり、多くの眼の前で、今まであんまり暗すぎるやりきれんものばかり見て来たからやろうなあ、きたないものばかり見すぎて来て・・一

と答えたという。「暗すぎるやりきれない、人生のきたないもの・・」の実態は不明だが、それらを内包しているからこそ薫風作品が読む人のところに響くのではないか。

引金をひく一瞬が 恋にあり

草いきれ 万葉の世の相聞歌

大文字 恋のはじめのごとく点く

恋人の膝は檸檬のまるさかな

秋の恋受話器の奥で時計鳴る

詩歌の本質は相聞と挽歌がその両輪をなす、と認識した薫風に恋の句が多いのもうなずける。私信で

一・私の川柳に対する認識は単純で、万葉集から古今、新古今から鎌倉幕末から現代にかけての和歌短歌、それに芭蕉以来の俳句、また、明治以後の詩の諸作品から得た短詩文芸の破調を含めた調和のつとり、自分の句の完成度の基準としていることです・・一と記している。柴原道夫は薫風作品には俳句の影響があると指摘。

一例として次の句を挙げています。

こほろぎのこの一徹な顔を見よ 山口青邨

頑徹な鯛の頭の骨を見よ 薫風

石田修大著「わが父 波郷」(2000年6月・白水社)

と「波郷の肖像」(2001年10月・白水社)を読みなが

が私は、薫風に波郷の翳をみた。

除夜の鐘陥没部位は肋無し

波郷

肋なくなりて今年の除夜の鐘

薫風

吹きおこる秋風鶴をあゆましむ

波郷

檻の鶴 又 眼を閉ずるほかはなし

薫風

薫風は波郷の俳句だけではなく波郷の人生そのものにも共通するものを見出だし、共感を覚えていたように思う。薫風にとって波郷は憧憬の人ではなかったか。

## 知的抒情

さて薫風作品の格調の高さや抒情性、古今を問わぬ博識は、病床から培われたといっても過言ではあるまい。

しかし、初心の頃、路郎は薫風の抒情句を採らなかつた。

「川柳塔」平成7年6月号に書く。

一・・・清新な若い感覚の句を指向した自信作はすべて没で、没個性の句ばかり抜けたが、川柳をはじめて七年、やっと「労働歌 蟻が歌えば妻かろう」「恋人の膝は檸檬のまるさかな」「石くれも三つ積んだら思惟の塔」などの句を取ってくださるようになった・・・。

路郎が薫風作品の特徴は清新な抒情性にあるとみとめながらも、あえて採らなかつた理由は判らない。

「いのちある句」や「穿ち」の重要性を説いていた路郎は、ともすれば感傷に流されやすい抒情の脆弱さや、甘さを警戒したのかも知れない。

「清新なる抒情性」を乗原道夫は「川柳塔」平成23年4

月号「橘高薫風七回忌特集」に「強靱な抒情」と題して持論を展開。先の石田柰馬の発言をうけて記す。

一・・・薫風川柳が人の心に深く染み入るのは、その抒情が浮ついたものではなく強靱であるからだと思う（中略）人の世の暗くきたないものを赤裸々に詠むのが強靱な精神なら、そのようなものを見据えてあからさまには詠まないでおうとうというのも強靱な精神だといえる。薫風川柳が爽やかですががしいのは、人生の暗部を口には出さずにおおうとうという気概から生まれたと思うのである。

恋人がいま肉眼に入り来たる

遠き人を北斗の杓で掬わんか

秋風に傷なきものはなかりけり

旅人も 月も やがては去る砂丘

四面楚歌 故郷は豆の花の頃

薫風自身は「知的抒情」と称して、「川柳平安」（昭和32年11月号）に次のように述べている。

一・・・知的抒情を標榜する短歌誌「白珠」の主宰者（安田青風）のこの澄み切った一首に一目惚れしたわけなのである。現代に生きる作家は現代を詠む。批判詩である川柳の場に於ける社会批判も、単なる報道的時事吟にとどまっただけでは価値がない。人間（生活）諷詠といわれ川柳で、恒久不変の人情を詠むにも、現代に生活する

にふさわしい知的な眼の裏付けがなくては適わぬ。川柳として時代の推移とともに少しずつ変化して行く。より知的に、より知的にと。知的抒情こそ、現代川柳の糧であると言えるのではなからうか。・・一。

紫の椅子の愁いはわが愁い

砂丘有情 お前と月の出を待とう

霊柩車 辻を曲つてから 速し

都会の夜 セロリは母の香に似たり

学生を矢面に立て 国貧し

薫風は昭和37年7月11日、三十六歳の誕生日に第一句集『有情』を出版。清新な抒情性は大きく評価された。

河野春三は「川柳雑誌」昭和38年6月号に

「・・・ただの川柳づくりではなくて、一つの人生途上の苦悩を秘めている作家なのではあるまいか。「紫の椅子の愁い」は即ち彼の作家としての一つの性格であつて、彼がそれを越えてゆくところに、「或いは人間として幾分成長して来た故か」と述懐しても、所詮は詩人として今後も「紫」を一生背負うてゆくのではないか。・・一」と書く。

春三の慧眼は『有情』の作品の背後に潜む薫風の本質を見事に見据えていたといえる。初句集『有情』には紫の高貴な気品と、ユーモアや軽みや、また俗なるものも混在。のちの薫風作品の原点が凝縮している。路郎のい

う「批判的穿ち、ユーモアの穿ち、抒情的感覺的穿ち、軽みの穿ち・・」もまた、薫風の皮膚の一枚になった。

飯を食うさえも勇気の要る日なり

牛小屋に月光 美しき浪費

おしなべて 銀も鉛も 卒業す

棺の出たあとの夕焼 見事なり

キリストの肋に似たる昼寝をし

## 鶴の化身

昭和50年1月15日、薫風は当時としては画期的な試みで「橋の会」を立ち上げた。時に四十九歳。すでに句集は『有情』に続いて『檸檬』『肉眼』と発刊していた。

川柳塔に新風を入れる目的で、外部から革新的な作家を招く勉強会であった。だが薫風の意気込みに関わらず15回で会は解散。タイプ打ちの質素な会報誌であったが内容には見るべきものが多い。

NO・5に室田千尋の「橘高薫風子を語る」の一文がある。一・・・彼の句には気品があり、余情があり、格調高いものですが、もしこの上に、今夜たべる米のない、火のような貧しさがあつたら、もつと巾の広いものになるのではないかと思ひます。・・一。

火のような貧しさは薫風には最も無縁のものであつた。貧しさにより作品の幅が広がるものならば、確かに薫風にとつてはアキレス腱であつたらう。

薫風は「句はその人のころである。十七音字はその人の呼吸である」の路郎イズムを継承、「川柳は五七七のリズム感と、穿ちを基本とする」との信念を貫いた。

平成14年3月に沖積舎発行の『橘高薫風川柳文集』は薫風の川柳塔主幹時代の巻頭言や句集の序文、評論、講演録、エッセイなどを纏めたもの。そのあとがきは「馬車馬のように突っ走った時代の私の足跡であり多くの柳人との遊歴の名残りでもある。振り返っていとおしくはないはずはない。これからのわたくしには老境の短い歲月が残されている」。薫風にはこのあと僅かに三年の人生しか、残されていない……。常に死を口にされなかったが、予感はず人知れず薫風を苦しめたことだろう。

私の脳裏に一枚の写真のように刷り込まれた光景がある。平成11年7月、確か「柳都」の大会で新潟県新津に泊ったときのこと。夜、何かの用で先生のお部屋を訪ねると立膝で酸素を吸入されていた。立膝の癖は路郎ゆずりのものである。夏のこと白いクレープの肌着であったと思う。瘦身の先生のそのお姿は見てはならない鶴の化身のようで、はっと胸衝かれるものがあった。

われに過ぎたり 絢爛と死ねる歳  
昼寝覚めポトリと極楽へ墜ちる

薫風は常に酸素ポンペを道連れに全国を川柳脚さされた。決して病を言い訳にはしなかった。一：肺結核を患って得たのは、柳が風に逆らわぬ自然体と誠意で生きるこ

との大切さでした……。一（「川柳塔」平成11年新年号巻頭言）と、飄々としている。

平成15年発行の句集『喜寿薫風』には、「父母に捧ぐ」と献辞があり、川柳生活五十年に亘る作品から、晩年の薫風が愛着のある三百句を選んだもの。あとがきは僅かに4行、感謝の言葉のみ。

四恩の恵みを受け

存分に川柳をたのしみ

蒲柳の私が喜寿を迎える

ありがたいことです

薫風は暮らしのために汗して働くこともなく、経済的にも文芸の才にも、また人にも恵まれた実り豊かな生涯を送った。常に死は隣人ではあったが、淡々と運命を受け入れ、悠揚迫らざる生き方を示された。

## 人の世や

母刀自の在せし頃ははとじいまの御御御汁おみおつけ

老いらくに吉祥天のぬいぐるみ

師弟あり一人は天に一人地に

掲出句は平成11年2月26日、朝日新聞に掲載された6句の中の3句。薫風らしく言葉も内容も吟味され格調が高い。それに比べて「俳句現代」平成12年6月号に発表された「タツノオトシゴの家」と題した10句のうち3句  
革命さをはじめてコーラ飲んだ日は

ロソンヘグラントババをゲットして

平成の埴輪マモルの宇宙服

カタカナ語を駆使して俳人に挑み、楽しんでるようだ。

「川柳塔」平成12年5月号巻頭言にも、「一句に外来語三つを使用してみる試行錯誤」と説明している。

薫風はどちらかと言えば寡作であった。藤沢桓夫との共著『川柳にみる大阪』（昭和60年7月・保育社）に「多読多作をすべからず」と題して

一・・・多読多作の良いことは事実である。しかし、一時期を過ぎれば多読多作を控え目に、考え考えながら作句し、多読にしても、川柳に関する以外の書物に多く接することが必要・・・と述べている。

自作の一句一句に愛着をもち大切に磨いた。川柳塔に発表した後も、推敲に推敲を重ね改作している。

楽原道夫のエッセイから2、3見たい。

雪うさぎ昭和の雪はもつと白 平成11年1月

元旦や昭和の雪はもつと白 改作

魂魄を天地に分ちち香華かな 平成15年6月

魂魄を天地に分ちちグッドバイ 改作

人生最後の入院をされたのは平成17年2月20日。ベッドで書かれた薫風最後の原稿が手元にある。デイスカウトショップのチラシの裏に、ブルーのインクで認められた、薫風の遺書ともいえるものである。

元旦や男も龍も玉を抱く 薫風

昭和63年の年賀状に書いた句である。勿論のこと龍年であったから玉が抱かれている。戎さんは鯛を抱き、大國主命は兎の苦難を救い介抱して元の白兎に戻された。この世の命は短いようで長く、長いようで短い。苦しいようで楽しく、楽しいようで苦しい。川柳の道も同じである。片肺飛行を余儀なくされながらも、楽しそうに振る舞っていた薫風の本心を覗き視たように思う。

最後に薫風の川柳語録から自戒をこめて。

「作家は過去を踏襲してはならない。新しい句境を常に拓いて行く情熱と精神がなければならぬ」

人の世や 嗚呼にはじまる広辞苑

広辞苑の千万語を費やしても、薫風が見た暗くやりきれない人の世の哀愁、寂寥感を語りつくせはしないだろう。「嗚呼」の2字に凝縮した万感の想い……。

抒情性や穿ちをはるかに超えたところに、薫風作品は香り高く、凜と孤高を保って屹立する。

僕の富レモン一個を棺に入れよ

文中敬称略

薫風子から薫風に改号は昭和40年1月号から

（現代川柳「新思潮」No.121より転載）

# 『麻生路郎読本』余滴 (20)

## 「矢車」と路郎作品 ②

葉原道夫

「矢車」では、創刊以来阪井久良岐のエッセイを巻頭に掲載してきたが、一〇号では巻頭にせず、しかもこの号が最後の掲載になった。

阪井久良岐は、「矢車」一〇号(明治43年1月)の「窺雲齋筆叢(八)」で、「矢車」の句風について、次のように苦言を呈している。

〈▲\*六疊坊君の「履歷書を懐ろにして今日も暮れ」は面白く感じたれども、他に二三賛成し難もあり、尙折々は批評を試むべし、我等は川柳はアル一寸した美感を謳ひし者は、穿ちある川柳に比して感興も印象も甚薄く感ずるなり。

▲俳句と川柳若しくは狂句の混成旅團に似たるは葉柳式なり、矢車の新傾向と云へる者之に似たり

(中略)

▲我等は古川柳の眞諦を世に闡明せんとするに在り、故に時に現代に反抗することを辭せず我は川柳を、樂しむの域に達せんことを希へり

▲さりとて、必しも新しき傾向に反對せず、但し俳想俳調以外に全然新十七字として認めらるべき新しき川柳を作らんとすればなり、俳句の已に發明し得たる者を借用するの知恵のなき加減、月並俳句の如き者、新體詩の十年前の陳想などは一時の發展傾向としては寛假す(筆者註―大目に見ること)べきも甚しく難有からず、思惟するのみ)

\*「矢車」九号(明治42年12月)に發表されたもの。

暗潮

分散の足尾へ行つて片便り

後朝にふと呼び止めて用もなく

繩つきが出てあくる日は貸家札  
年明けの迎もなく田舎編

戀文を持つて破門の山を降り

教誨師驚馬に鞭とは知りながら

履歷書を懐にして今日も暮れ

結核と知れて晴着を日々にきせ

久良岐の言う「アル一寸した美感を謳ひし者」とは、(後朝にふと呼び止めて用もなく)などが、それに当たるのだらうか。「新傾向」という用語が、「矢車」では、この号に初めて登場している。

「矢車」の主要メンバーである中島紫痴郎(明治15年5月24日生まれ)は、当時の川柳界について齒に衣着せぬ発言をしている。それは、「矢車」の指導者であった久良岐(明治2年1月24日生まれ)に対しても同様であった。「矢車」一〇号の「巴西柳界管見」(竹林堂の筆名)では、川柳誌「獅子頭」の批評をした後で、「三年間久良岐は何を成しつ、有りし乎」の久良岐の署名について、次のように述べている。

〈氏(筆者註―久良岐のこと)が東都風俗詩人藤原久良岐と署名したのは少しく不

眞面目の感があつた、此一事を以て氏の人物を疑ふ者も出来たのは惜しむべきである。

藤原久良岐と署名したことを不眞面目だと批判された久良岐が、「矢車」発行者であつた森井六畳坊(後の荷十)宛てに出した私信を、「矢車」一一号(明治43年2月)で「富士見町より」として掲載している。久良岐は、不眞面目だと批判されたことを迷惑だと言ひ、「藤原久良岐」と署名した理由を、次のように説明している。

〈我が國體の正風には加藤と云ひ阪井と云ふ俗姓は用ゐず、必ずや藤原、忌部、源、平、橘等の姓を署すを正式とす、是れ國家成立上の要素なり、故に新年勅題披露の場合に高崎正風は藤原朝臣正風と署せり、余は伊藤系に屬する者故藤原姓を眞面目に署せしのみ、豈一場の滑稽に出でたる者ならん、之をしも疑ふ人を我等は不眞面目として疑はざるを得ず〉

對して紫痴郎は、二二号(明治43年3月)「柳壇月評」(弓之介の筆名)で、次のように批判している。

〈古來俳諧者及川柳家の源平藤橘と署名せるを聞かず、況や宮中に於ても古式に

則る時の外は用ひざるに於てをや、川柳は凡ての拘束より脱したる平民文學なり何んぞ姓の源平の要かある、藤橘と署名したる爲め川柳家の品位を向上せしめたりと云ふを得るか、否寧ろ詩人として人爲的形式的爵位姓名等を署名せざる可からざる者を憐むものなり、之れ氏が熱心の餘りに出たるものならんも既に常規を逸したり、銜氣に涉りたりと人をして思はしむる所なり〉

また、同「柳壇月評」で、久良岐に対して、次のようにも述べている。

〈▲矢車の新傾向に就て兎斯ふの世評があるが我等は自ら信ずる所に向つて飽迄も進まんとする者であるが右顧左視互に戒め合つて敢て川柳の軌道を逸するが如き猪的盲進はせぬ心算である、岐氏は我等の新傾向を俳句川柳狂句新體詩の混成旅團なりと云はれ又\*本郷座式なりと評せられたが或は然らん、舊俳優の如く先師の型を固守しチヨン鬻の資材と小六ヶ敷い形式とを云々するは藝術の發達を妨ぐるものである。我等は古句を研究するは自己を養はんが爲め即ち古句を同化せんとする者にして古句に同化せんとする者に非ず故に資材に没し又は形式を以て資材を拒む者に非ずして材の

上に自由の空想を逞し、自由なる形式に依て美妙なる章句を成さんと努る者なり。

(中略)

岐氏嘗て云ふ十人好みの句は月並なりと。現代より超達せる一大識見ある川柳家の自信ある句又は選ならばイザ知らず今日の場合として川柳の智識ある者の均しく佳と認めたるは佳とせざる可らず、十目の視る所十指の指す所又必ず眞理の存す、詩は普遍的及必然的適意の對象を作るにある者なり獨よがりは詩に非ざるなり、若し強て詩なりと云はゞ大馬鹿野郎か圖抜けた大詩人なり。今日の柳壇に於てさる大詩人と認むる人なし故に十人好みの句も佳句とせざる可らざるなり。

\*本郷座は劇場名。明治35年、春木座を改称し、川上音二郎一座の芝居などを上演し、新派隆盛の原動力となつた。

紫痴郎の久良岐に対する批判に発行者である森井荷十は氣を遣つたのだらう。同号「編輯便」で、次のようにこわつてゐる。

〈▲本誌の新傾向に就き久良岐氏と意見の合致せざるもの有り時に論戰をなすと雖も感情上には些の支障無之候に付爲念



中島紫痴郎・「矢車」一四号の口絵より

実は、この一二号の扉に、記名なしで次の文言が掲載されている。

○川柳は今や漸く創作期に入らんとす  
作者は眞摯なるを要す、娛樂も須らく眞面目ならざる可からず。○川柳は詩なり、作者は詩人なり、故に詩人的態度を以て是れに當らざる可からず○野卑俗悪なるを喜ぶは狂句黨なり、我等は高尚優雅なる明治の新川柳を示し、世人の誤解を正さざる可からず。

この内容からして、紫痴郎の手になるものであることは間違いないだろう。

一二号の「柳壇月評」後半の、(獨よがりは詩に非ざるなり、若し強て詩なりと云はゞ大馬鹿野郎か圖抜けた大詩人なり)という部分を見た久良岐は、自身のことを言われたかと思ひ、発行者の森井荷十のもとを訪れた。荷十は、それを「雑談」久良岐として、一三号(明治43年4月)に掲載している。全文挙げておく。

四月六日夜米國に在る紅花君より送られたレビユ、オプ、レビユの畫を見てると、久良岐氏が久々で來訪せられて、三時間程柳談に耽つた、左は其談話中より適記したもの、文責小生に在り「荷十」

▲弓之介の評(三月號の)は眞面目を飲いてゐる、大馬鹿野郎が大詩人かなど、あれは悪口だ、どうせ川柳をやつてゐる者は大馬鹿かも知れない、それはお互だ、是れに就ては青柳に書いて置た。

▲矢車の新傾向には必ずしも反對してはゐない、唯修辭上に於て非難するのである、僕は既に「五月鯉」一卷四號で君等と略同じ意見を云つてゐるのだ、その後深く古句を味つて今の川柳に至つたので、五月鯉を見れば僕の意見が系統的に分る筈である。

▲古川柳も人情の深みと云ふ目から見れば

面白味が薄い、僕等の川柳も一見つまらぬ様な感じはするが、年をとつて經驗がつみ、其場合に相遇して見ると始めて云ひ知れぬ面白味が生ずるのだ、君も僕の年齢になつて今の句を見れば必ず飽きる様になる、それは今の頭では分る筈がない。

▲沈痛苦悶の句を咏めば受けるかも知れぬが、我等には沈痛苦悶なるものが無い、寶歷時代の江戸趣味に面白味を有つてゐるので全然思想が違つてゐる、作つて作れぬ事はないが机上の空想では面白味が無い、沈痛苦悶などは僅か十七字の川柳では表現出來得まい、小説にでも筆をとる方がいゝと思ふ。

▲「淋しさを花におほゆる年と成り」で僕等は同じ花を見ても青年とは感じ方が違ふ、藝者と遊んでも僕等は騒いでゐる中に面白味があるが、青年には騒ぎよりも第二の目的に面白味がある様な譯で、そこに大なる懸隔がある。

▲古句に囚はれてゐると云ふが、僕とてヨツトに乗て川柳會を開きたいと思ふ、又\*精養軒でも催したいと思ふが、そんな川柳家は無い、川柳に限らぬが、團體の必要があるから一人で思つた處が始まらない

話だ。

▲川柳界には人物が少ない、それに引き換て畫界などは盛んなものだ、小さな會でも名のある人が澤山出席せられる、川柳家でも世の中に認められる人が多く出来れば隨て川柳も認められる譯であるから、大いに修養して欲しいものである。

此外に川柳の發展上や雜誌の經營に就て種々語られた。いつもながら氏が柳界に盡せらるゝ、功勞は謝さざるを得ない。氏の御話に就て小生の意見も無いではないが此處では紹介に止めて置く。

\*フランス料理の老舗。明治5年、築地で創業。明治9年、上野公園不忍池畔に、上野精養軒が誕生。

久良岐は、岐阜の川柳誌「青柳」に「矢車」の批評を書いており、紫痴郎は、それに対する反論を「柳壇月評」でしている。次の文章は、「青柳」4月号を読んで、紫痴郎(弓之介の筆名)が書いたものである。「矢車」一四号(明治43年5月)に掲載された。

(前略)(岐氏)又曰く矢車の新傾向は全然反對ではない何となれば五月鯉に既に

新十七字詩論等に論じた事と大差がないからだ、只其聲調の蕪雜や一種の高等月並や高等當込み真面目のクスグリ等を排斥するので、眞に心中より發した叫びを歓迎すると云ひ、又江戸享樂主義の遺傳を受けた吾人は何を苦んで現代の醜俗惡劣の墮落趣味に隨ふ必要はない、他人が主我張り煩悶し現代がたつたとてソレを眞似る必要はない、併し文壇に攷交渉に川柳は滑稽だと云ひにクスグリの的に理解し娛樂的以上に出ないのも心細いと云つて新傾向が流行するからとて新を喜び奇に走るのは滑稽だと云ふ、以上に依て考ふるに氏は寶曆天明を理想とし之と同化せんとするらしきも又全然其れに満足するとも見えず、要するに一定の意見もなく徒に大言壯語して以て人を壓伏せんとせらるるもの如し、然れども内容に秩序なく曖昧模糊たる所説は傾聽する事が出来ない、三年鳴かず蛭ず有りし氏の再び柳壇に現るや天へも翔られん事と期待したる我等の失望せざらんとするも能はず。(中略)現代を俗惡と痛罵して音に江戸趣味に憧れ何事も江戸ならざる可らず、現代は醜惡なり何も苦で墮落的趣味に従ふ必要はないと絶叫(筆者註「せ」の脱落か)らるゝ、

は既に現代を超越せるに非ず後れたるものなり、故に氏も又氏の云ふ舊俳人の如く世捨人なり隱居の癡言なり、朽木は到底彫む可らざるか。余は現代を超越せる人を大馬鹿と云ひしに非ず、獨りよがりをも強て詩なりと云ふ者あらばそは大馬鹿野郎か圖抜けた大詩人なりと云つたのである、之がシミツタレタ了見とは氏も案外シミツタレタ人なり斯る誤解の今迄に一再にして止らざるは固疾(筆者註「痼疾の誤りか)たる腦病の進みたるなきかを思ふと悲しみを覺ゆる、氏よ御自重あれ御靜養あれ然して健全なる御教を垂れられん事を乞ふ。

久良岐は、紫痴郎との論争以降も、「矢車」の募集川柳の選者を務めたが、それも一八号(明治43年9月)が最後で、「矢車」との縁は切れてしまった。

一方、「矢車」は、詩としての川柳を目指すという旗幟を、より鮮明に掲げるようになった。それには、関西の川柳家(五葉・松窓・日車・半文銭・青明・水府・路郎等)の参加が少なからぬ影響を与えたものだと思われる。

(次回に続く)

# 初級教壇

題一 苦 勞

山 口 光 久

どうしたら川柳が上手になりますかとよく聞かれます。そんな特效薬があったらみんな上手になり、下手な人はいないでしょう。

麻生路郎先生も言われていますが、上達のコツは多読多作をすること。

多読は素直に多くの川柳を読むことです。が、どんな川柳でも読めばいいというのではなくありません。師は「人生を凝視した独創的な作品を一句一句内容を批判的に読むと同時に、句の表現技法に眼をとめるべき」と述べられています。批判的に読むことはでたらめに濫読するではありません。

柳誌、個人の句集、句会等での佳句や三才を常に抜き書きして一冊の句帳を作り、その句を繰り返し精読味読するのです。読むといても黙読ではなく声を出して読むことです。すなわち音読すれば音律が自分で判り句の音数のくぎり方も判るようになります。

川柳塔本社句会でも何人かの方が各兼題の佳句、三才の句をノートされています。

## 【添削】

原大雪で雪国の苦勞身にしみた モモ

「〇〇で△△た」とすると往々にして報告句になりがちです。中八になつています。

他の言葉を探してみましよう。

添大雪に除雪の苦勞身にしみる

原苦勞人本根を包むオブラート (高道) 子

良く纏まっていますが「本根」は「本音」

で誤字です。誤字は選の対象にもなりません。気をつけましよう。

添苦勞人本音を包むオブラート

次の二句も誤字の句です。

原金婚で禺痴の多くも泡と消え (渡) 修

「禺痴」は「愚痴」の間違いです。

添金婚で重ねた苦勞泡と消え

原蹟いて捨った苦勞愛でした (富) 恵 子

「捨った苦勞」? 「捨った苦勞」でましよう。

捨てたと捨ったでは大違いです。

添蹟いて背負った苦勞から芽生え

原母気丈寡婦で五人の子を育て つな子

「母」と「寡婦」はダブリますのでどちらかを省きましよう。

添気丈な寡婦やと五人の子を育て

原御苦勞の一言を待つ電話口 喬

添御苦勞の一言欲しく待つ電話 心 咲

原針穴に通らぬ糸がうらめしい

添針穴に通らぬ糸に一苦勞 ミヨノ

原共働き苦勞も底い晴れがある

添共稼ぎどんな苦勞も半分こ 亜希子

原白髪に苦勞させただねと言ひ

添白髪へ苦勞させたと話しかけ

原信じてる無駄な苦勞はない事を (高) 弥 生

添人生に無駄な苦勞は無いと知る

原人生はシナリオの無いある苦勞 (畑) 節 子

添人生にシナリオ無いがある苦勞

原疲労感笑顔に固執した結果 恭 子

添無理をした作り笑いに疲労感

原電話鳴り介護突然やってくる 晶 子

添母倒れ突然介護やってくる

原苦勞した母は言わない笑つてる

添苦勞したことは言わない母達者 加 代

原ありがとう苦勞吹き飛び良薬だ 律 子

添ありがとうが苦勞に耐える良薬だ

原この苦勞幸せの種蒔いている 文 香

添しあわせの種を蒔いてる苦勞人

原綱取りへ泣くも笑うも一苦勞 勝 治

添綱取りへ稽古けいの一苦勞

原末っ子はいろんな苦勞せずにすみ 開 子

添末っ子は苦勞を知らずのほほんと

原ひと苦勞していたような昔ごと 安子

添今は昔苦勞したのを誇張する

原顔の皺苦勞を消したいいい笑顔 義雄

添人知れず耐えた苦勞の顔の皺

原苦勞などしたことのなのお姫様 武人

添姫様も言うに言われぬ苦勞持つ

原苦勞した分だけちよつと気が強い (備) 正子

添苦勞した分だけ芯が強くなる

原子育ての苦勞がわかる親の今 志津子

添親になり母の苦勞が身に沁みる

原苦勞でも家庭円満先を見る 照代

添円満な家庭をきずく苦勞人 (備) 洋子

原幾多の苦勞も忘れる子らの顔

添幾多の苦勞忘れさせます子の寝顔

【少しの工夫で良くなる句】

原ねぎらいのご苦勞さまの声嬉し 満知子

添ねぎらいのご苦勞さまが糧になる

原買つてた苦勞だけでも重すぎた 忠貞

添買つて出た苦勞だけれど重すぎた

原めつきりと取り越し苦勞増えてきた 友子

添めつきりと取り越し苦勞増えた喜寿

原ご苦勞さんその一言で元気である (柑) 恵子

添ご苦勞さんその一言で出る元気

原苦勞して貯めた大金使えない 紀美恵

添苦勞して貯めた大金詐欺にあう

原米寿まで苦勞した甲斐幸多い (山) 久子

添米寿まで苦勞した甲斐今至福

原素振りさえ見せないさすが苦勞人 元三

添素振りにも見せぬさすがは苦勞人

原雪降り終つたけれど除洗あり 洋一

添雪降りし終つたけれど除染まだ

原苦勞して育てたはずのドラ息子 一泉

添苦勞して育てたはずが今ニート

【入選句】

子に苦勞孫に苦勞で年も暮れ

子育ての苦勞話を嫁とする

ご苦勞さん言われてうれし甘つたれ (株) 玲子

先輩の苦勞話に励まされ

小遣に四苦八苦する奇数月 紀雄

苦勞して築いた今を大切に

親に苦勞させてのほほん生きて古希 英男

トンネルを出てから苦勞だと思つ

残業に駅が優しくご苦勞さん 孔一

君のためひとつ苦勞をしてみよう

値上りに主婦の苦勞が菜に出る (見) 温子

汗しずく母の背中が曲がりすぎ

苦勞とは思ふな夢の一里塚 楽鬼

子供にも少し苦勞をさせないと

苦勞人ひとの情けを知っている 利子

散々な苦勞をしたという十指 惠

苦勞などしたくなかつた指の節 狸月

幸せは苦勞の種が咲かせます 回春子

愚息でも親の背中を知っている (中) 修

苦勞した甲斐ありました優しい子 のり子

【佳句】

片減りの靴は苦勞を知っていた ひとし

苦勞した涙は見せぬ石地蔵 忠士

開拓の汗を刻んだ納屋の鍬 (斎) 宏子

苦勞した母に感謝の金メダル (山) 弘子

晴れ姿親の役目も終わりです きつこ

【今月の推せん句】

苦勞など見せない母の座り胼胝 石田ひろ子

苦勞など微塵も見せない母は立派と言う

ほかありません。座り胼胝が効いています。

苦勞した分だけ稔り倍になる 小栢こずえ

苦勞したことに神様はちゃんとお応えに

なるでしょう。努力した結果は倍にも三倍

にもなつて返つてくること間違いないです。

汗かいた苦勞は言わぬ靴の底 北原 昭枝

靴は主の気持や性格を代弁します。必死

になつて働き汗をかいた様子を靴は十分汲

み取るでしょう。佳い句になりました。

【私の句】

作業着が苦勞をちゃんと知っている

# 川柳塔鑑賞

同人吟梅崎流青

— 3月号から

さくらの季を全身で感じながら歲月の速さを思う。何か季節に追い越されていくような感じさえ覚える。伝統の「川柳塔鑑賞」のバトンは手に重い。

無駄なこととしてきたからの味になる

斉尾くにこ

何の障害や挫折を知らぬ人に道を探ねる気にはなれぬ。下流に転がる川底の石の丸さは色々なものにぶつかつた証。この丸さは「無駄なこと」の証でもある。

てのひらを葉書のように見ていたり

栗原 道夫

振り向きもせずただバイバイと片手を上げて去っていく人。上げたてのひらが白く眩しい。てのひらのメッセージを読む。あつ、いつか見た仏の掌と重なる。

淋しさを誰かのせいにしたかつた

居谷真理子

膝を抱いた姿勢のままの部屋の片隅。傷つけ合い、罵り合ったことなど孤独の

冷たさに比べれば。体温の温さを求め街の灯りに群れる群衆の何と多い事よ。

米櫃はもうすぐ死語になるだろう

高瀬 霜石

明日の米が米櫃に無くとも歌を作り続けた歌人がいた。「石持で追われた」歌人はまるで貧しさを楽しむように歌を詠った。米櫃も故郷の訛りもやがては死語。

ヘイトスピーチ不毛以上のものを生む

高島 啓子

いつからこのような潤いのない世の中になったのだろう。自分と違うものを認めようとしないうヘイトスピーチ。東京都市知事候補の応援弁士、NHK経営委員の「人間のクズ」に何の発展性があるう。

透き通つたまんまで冬が立っている

石橋 芳山

一斉に針と化した冬木たち。春が来るまで息を、そして声をこらす。透き通つた内部には春待つみどりを抱きながら。

どんぐりを拾つて風の子になつた

森 茜

風の子、といわれた頃のようにどんぐりの独楽で遊んでみた。勢いよく回る時は微動だにしない澄んだ音。そしてよけて倒れる独楽に自身を重ねてしまう。

古老がくれた山の彼方の吊し柿

川本 畔

自然の恵みはいくつもあるが吊し柿はその代表といつてよいだろう。その味はまさに相伝の味。柿が熟すころになると陽が沈む山の彼方に思いを馳せる。どこかで遠い鐘の音。

人間の忘れたことを猿に問う

竹治ちかし

パチンコ屋の駐車場に置き去りにされた幼児、などほとんどでもない事件が起きる度霊長類ヒト科の知能を思う。「おや貴方にも影がない」と人間に猿がいう。

捨ててきた里にほつこり包まれる

中井 アキ

古里はやさしく迎えてくれるだろうか、との思いを胸に駅に降り立つ。風も光りもあの時のままで。山も小川も鳥のさえずりも。何より友の声に緩む涙腺。

昼間つから飲まねばならぬ訳があり

早川 遡行

何かと理由をつけておるる昼酒。昼酒の訳などあとでついてくる。酒に逃げる男の弱さなどどこか親近感さえ覚える。「昼間つから」の促音が秀句に押し上げた。

日の流れ水の流れを見ている

神夏磯典子

水の流れに合わせ昨日と同じ今日が流れていく。どうして人の心だけは泡立ち逆巻く波を立てるのだろうか。たんたんと花筏を運ぶ水の流れと人の心との対比。

無駄口は吐かぬこけしのおちよほ口

津村志華子

雪深い民話の里をとつとつと語るこけしのおちよほ口。こけしにまつわる話は囲炉裏を囲む口伝によつて後世へ。その中に、口減らしのための「子消し」が「こけし」と呼ばれるようになったことも。

明日もまた朝日を拝むこと願う

山本加お里

何の変哲もない家族同士のおはようが最も平和な日々だった、と3・11の被災者。今朝の朝日が明日見られることの幸せを教えてくれた大震災でもあった。

懐かしいけれど悲しくなる軍歌

村上 玄也

あの頃の戦意高揚の軍歌が今では悲しくさせる。それは戦争の愚かさを知ったから。今もまた「聖戦」の果てどこかで肉親の亡きがらに立ち尽くす人たち。

陽炎の辻で卑弥呼とすれちがう

山岡富美子

邪馬台国の女王卑弥呼。近畿と九州に残る卑弥呼伝説。吹く風に誘われ立って来た陽炎の辻。確かにすれ違ったのは卑弥呼。それとも神獣鏡のいたずらだったか。振り返ってみなければとゆらり陽炎。

雲までが幸せそつな色してる

雪本 珠子

そんな日がたまにはあつていい。昨日と同じはずなのに今日は幸せそつな雲の色。違うのは心がマリのように弾んでいるから。幸せを運んでくれた一通の手紙。

湯のたぎる音心地良い冬座敷

島田千鶴子

耳を澄ませば釜鳴りと雪の溶ける音。この音さえも日本の伝統文化。鳥の囀り、虫の音にこころを洗う。海外では虫の音は「騒音」。愛でる文化はないという。

寒椿一輪落ちて明日を知る

富田 保子

大地に転がる椿の赤が教えてくれるもの。「明日も確実にやってくる」ことの危うさである。裏を返せば「今のこの一瞬を輝かせ」を知る。今日を大切に。

故郷に下着を干したままの僕

吉村久仁雄

下着は決して恥ずかしいものではないが人には見られたくないもの。下着は風にも飛ばされず今も干されたままなのか。「下着を干したまま」の措辞は秀逸。

斎場のけむり真つ直ぐ寒に入る

山崎 武彦

けむりが真つ直ぐ、ということとは存分に生きたからでもあろう。だが一般には「地を這うけむり」の何と多いこと。この「真つ直ぐ」は「けむり」と「寒に入る」にもかかわらず意味合いを深くした。

おじいさんが病気になるって荒れた土地

松本 文子

篤農家といわれたおじいさん。伝来の田畑を守ることをまるで使命のように働き続けた。全国に広がる荒れた土地の大半はどこまでも農政の劣化といえよう。

# 水煙抄鑑賞

— 3月号から

谷 口 義

炭酸はすっかり抜けました背中

真 島 久美子

炭酸が抜けてすっきりしました。これ  
からが久美子さんの世界です。やはり背  
中からでしたか。期待しています。

一回転すると非常口が見える

東 横 ますみ

一回転が良かった。発想のユニークさ  
に感心しました。切れ味の良い句。

ええ仕事する人でした今日の通夜

柴 本 ばっは

良い仕事された人は人望もあり惜しま  
れた事でしょう。淡々と語りかけるよう  
な句の作り方。さすがベテランの味。

お静かにあとひと押しで句が出来る

丸 山 孔 一

句は出来ましたか。分かりますその気  
持。お静かに願います。

羽のある男ばかりを好きになる

栃 尾 奏 子

時実新子さんの句、「手が好きでやがて  
すべてが好きになる」を思い出します。  
羽のある男も魅力的。理屈抜きで。

わが運は天に任せて髭を剃り

近 藤 秋 星

この心境になれば占めたもの。髭でも  
剃って、桜でも見に行こう。

応接の熊と一緒に家人待つ

高 杉 力

大らかなご主人。置物の熊との対比が  
面白い。ユーモアのある軽みの句。

いい人になってみせます死んでから

湯 浅 俊 久

死んでからで十分です。ご心配なく、  
悪友が必ず言ってくれます。

そこそこのことは叶うという神籤

吉 道 あかね

そこそこ叶えて下さるなら。頼り甲斐  
のある神様に違いない。よかった。

バトカーもコンビニへ来るお昼前

嶋 本 喬

テレビ等で刑事が菓子パンや御握りを  
食べるシーンを見受ける。納得する句。

その先をぐつと呑み込む喉仏

栗 田 忠 士

啖呵の一つも切りたいところが喉仏  
が止めた。言わなければ良かったと思  
うことばかり。これで良かったのです。

自分のためだけに働く家事その他

森 下 よりこ

もう遠観されています。一人暮しも堂  
に入りました。その他の方が忙しい。

寝正月出来ぬ相棒食へさせる

下 田 茂登子

ほとんどの旦那様はお正月でも三度  
きつちり召上がる。食べさせるは痛快。

ブレないで生きるわたしの自尊心

川 島 良 子

末席が性に合ってる生欠伸

原 洋 志

降り立った駅に覚悟が待っている

魂のとぎめく方へ走り出す

楠 原 富 香

手の内を晒して明日呼び寄せる

有 澤 嘉 晃

信号を渡る授業もある田舎

関 よしみ

花 岡 順 子

# 民族の詩歌 (22)

## — 蟻あり通どほし —

### 三好 專平

最近、世阿弥の謡曲百番（山岩波・新古典文学大系）を全部朗読する機会を持った。そうして改めてその面白さに魅かれると同時に、これはやはり「詩」であると思った。ジャン・ルイ・バローは「能を観て死ぬほど感動した」と語った。それは、所作について言われた言葉だけれども、詞章についてもいえるのではないかと思う。古典のつづれ織りの美しさである。△韻▽の美である。

百番すべては、何らかの意味で和歌と関係を持つが、和歌そのものをテーマにしたのは「蟻通」一編のみである。

蟻通神社を舞台とする能だが、その前に

少し神社のお話をさせていたたく。泉佐野市長滝にあつて、蟻通明神とも言われる。昔、熊野詣で沿いにあつて、にぎわつたという。第二次世界大戦では、明野飛行場になり、現在は元の位置に復元した。立派な能舞台を備える。祭神は大国主命で、弥生時代からある。

神社名の由来は、唐土ちゆうとの王が日本をかすめ取ろうとして孝行者の中將に三つの難題を突き付けた。その一つに、「七曲りの管くだに糸を通せ」があつた。大きな蟻に糸をつけて穴に入れ、蜜を嗅がせて穴を通して、難題を解決したという話から来ている。枕草子にも載っている。

さて、能は、歌道を極めようと和歌の神玉津島神社（住吉）参詣のため旅立った紀貫之が馬に乗つたまま蟻通神社を通ろうとすると、神の逆鱗に触れ、たちまち天地鳴動し、馬が倒れ伏してしまつた。そこへ一人の宮守があらわれて、「歌の上手ならば

歌を詠め」という。

雨雲の立重なれる夜半なればありとほしとも思ふべきかな

と詠む。「あな、面白」と宮守は感心し、和歌について話し合う。

註を加えるならば、古今和歌六帖（平安中期）には、

かきくもりあやめもしらぬ大空にありとほしをば思ふべしやはとある。

能はつづく、

へおよそ、歌に六義あり、云々

へされば、和歌の言葉は 云々

へ和歌は神慮に叶ふべし

などとうたいあいながら、能は終わる。

古今和歌集の「目に見えぬ鬼神もあはれと思はせ」という古典を踏まえた能である。

シテは宮守の老人で、ワキは貫之である。



貴重な記録「合同句集」(3)

本欄No.38と39でも同じ表題で合同句集について書きましたが、「川柳塔創刊90周年記念合同句集」の応募締切り日が近づいてきましたので再度取り上げさせていただきます。

この合同句集は川柳塔社同人だけではなく、誌友や一般の方々も参加できます。前号までは、今回の合同句集に参加できない「亡くなられた同人」についての思い出を記しました。同人ではない方々もたくさん旅立っておられます。

小銭入れだけがふくらむ旅帰り 田中 好啓  
 いちまいの皿にわたしを載せて出す 泉 比呂史  
 呼びつけてそんなつまらんことかいな 岩井 三窓  
 スーパーの花で仏の日を飾る 中田たつお

鎖もうないが定時に目を覚ます 小寺竜之介  
 ほめられた手相握って年老いる 福代 天雀

いずれも川柳塔社と深くご親交いただき、親しくお話しさせていただいた方々ばかりで、掲載の15句を拝読しますと改めてそのお姿や笑顔が甦ります。書棚から個人句集を一冊ずつ探し出す手間をかけることもなく、また、句集を出しておられない人の作品をも偲ぶことができるのは合同句集の素晴らしいところでしょう。

また、私のホームグラウンド鳥取県は、人口の割には川柳塔社同人の多いところですが、10年前に刊行された「川柳塔創刊80周年記念合同句集」に参加されながら昨年までに亡くなられた先輩や友人が幾人もおられます。

米寿から自転車おりに杖になる  
 閑人がトップニュースを提げてくる  
 どの屋根の葺もみんな仲が良い  
 まごついた親孝行でいいですか  
 人間の生きざまゴミが曝け出す  
 おーい雲息子の嫁が決まったぞ  
 例会日近いカラオケ熱入る  
 大地から広がる春のシンフォニー  
 生命線の続きをペンで書きたした  
 皆さんそれぞれの15句をすべてをご紹介したいところが  
 すがスペースの都合でやむを得ません。このように改めると  
 名前を挙げてみますと、10年という歳月の重さ、そして恐ろ  
 しさのようなものまで感じます。このような感慨を抱かせて  
 くれるのも合同句集の力というものでしょう。

冒頭でも述べていますが、この合同句集は川柳塔社の同人  
 だけではなく、誌友や一般の方々も参加できます。また、応  
 募作品は既発表句（平成16年以後に発表の句）でも新作でも  
 構いません。多くの皆さんが川柳に取り組んできた証として、  
 この記念誌に15句を記してくださいませよう重ねてお願  
 い申し上げます。

乾 喜与志  
 武田 帆雀  
 中原 汲香  
 中原 諷人  
 西村 黙光  
 最上 和枝  
 本吉 宗光  
 徳田ひろこ  
 田中 亜弥

・ 締切 平成26年4月10日(木)  
 ・ 体裁 B6判・上製本・八〇〇頁(予定)  
 ・ 参加費 五千円・掲載一人15句(自選)

案内書(申込書)をお持ちでない方は、本誌奥付けの「川柳塔社」にご連絡ください。振替用紙と共にお送り致します。

# 本社三月句会

三月六日(木)午後一時  
アウイーナ大坂

啓蟄と言えど、真冬の寒さがぶり返した六日、三月句会は百十四名(投句十名)の参加で開催。初出席は大坂市の、大西泰世さん、あまのとーなさんのお二人。

今月のお話は、新家完司副主幹「パワフル川柳」と題し、力のある、元氣のある川柳を軽妙な口調で紹介。元氣の代表といえは「大坂のおばちゃん」と、いきなり会場を心をしづかみ。

啓蟄におばさんが出て立ち話  
おばちゃんと電車だんだん派手になる  
句も楽しいが、完司さんの解説に笑いが絶えない。おしやれ・食欲・カラオケ・運動・医者通いと楽しい句の紹介が続く。

デュエットの権利で腰に手を回す  
この句にはしばらく会場の笑いが止まらなかつた。

月間賞は、大西泰世さん(大坂市)  
(司会—真理子・善純)(協取—千代・勝弘)  
(受付—茂・柳昌)(清記—まつお)

## 席題「肉」 坊農 柳弘 選

PPP肉の行方が気に掛かり  
ステーキを食べた食べたひとときり  
久し振りにステーキ食べた誕生日  
ストレスの度にお腹が丸くなる  
肉たっぷり付けて明るく離婚印  
約束を果たす気は無い二重あご  
類の肉笑顔の型に付いている  
力こぶ見せてあげよう子沢山  
念入りに肉付きの顔化粧する  
鈍い男に肉肉肉で攻めていく  
死ぬまでに酒地肉林に遊びたい  
満面の笑みに皮肉をこめておく  
酒地肉林の真つ只中に居る孤独  
愛の鞭師の肉筆に励まされ  
並肉の家族もめずにみな元氣  
登る日は朝からお肉山ガール  
はみだした肉も大事なわたしかも  
肉薄の論戦ほしい被災地に  
四月から牛井安くなるらしい  
肉じゃがが世界遺産と胸を張る  
肉じゃがで男を軽く引つかける  
独り身の肉布団乞う寒い夜  
仲違い苦肉の策で切り抜ける  
申カツのご法度二度漬けはアカン  
贅肉が無くて痛がつてるお尻

武 臣  
瑠美子  
美智代  
武 彦  
進  
完 次  
恵  
ひとみ  
瑠美子  
万紗子  
修  
理 恵  
保 州  
美 籠  
ばっは  
美智代  
紀 乃  
はこべ  
勝 弘  
裕 之  
楓 楽  
泰 昌  
唯 教  
寿 之  
恵

キロ百円妻の贅肉買わされる  
書道展苦肉の策で賞を盗る  
冬のはりはり私の得意鍋なのよ  
付くとこにつけばウフフにかわる肉  
食欲に骨を斬らせて肉を斬る  
梅肉で風邪が治せたのは昔  
持つ人が持てば凶器に肉叩き  
酒池肉林めたば街道まっしぐら  
高根の花です鯨肉もわたくしも  
肉親と思えばよい腹が立つ  
肉褌裨脱いでふわりと春を着る  
コケッココ！夜はお鍋に変身よ

黒 兎  
黒 兎  
わ こ  
奏 子  
正 雄  
見 清  
朱 夏  
蕉 子  
あや子  
ダン吉  
朝 子  
ばっは  
ダン吉  
寿 之  
玄 也  
理 恵  
たもつ  
かずお  
かずお  
かずお  
富美子

兼題「仲間」 矢倉 五月 選

憧れの人おぼちゃんの仲間入り  
個性豊かで仲間意識は楕円形  
仲間となら恥も掻き捨てケセラセラ  
いざという時は悪友だけ頼り  
金のある仲間をひとりつれて来る  
貸し借りがちよびりあって無二の友  
内緒ごと話し仲間の輪に入る  
外国で日本語聞けばみな仲間  
レジンドを生んだ仲間の大飛翔  
仲間にはいません下戸とお金持ち  
ウーロン茶飲んで仲間の世話をやく  
同病の仲間が出来た医者通い  
会費が欲しいようだ仲間にしてくれた  
ケータイで仲間ごっこしてひとり  
被災地をてきばき茶髪いる仲間  
どん底へ仲間のくれるクモの糸  
青春の友また一人千の風  
上下を脱いで地域の仲間入り  
善人が一人いるので輪が出来ぬ  
外されたおかげで自立できました  
人類はみんな仲間のはずなのに  
老いてなおどんぐりのまま群れている  
仲間から離れたくない回遊魚  
札びらを切つて仲間にはずされる  
九条を仲間外れにするなんて

完 司  
森 子  
久美子  
保 州  
月 子  
柳 弘  
紀 乃  
好  
敏 治  
いさお  
耕 治  
玄 也  
かすお  
富 子  
弥 生  
洋  
寿 之  
直 樹  
楓 楽  
理 恵  
保 州  
理 恵  
好  
朋 月  
榊 和 夫

メール打つ仲間外れになりそうで  
七十億みんな他人でみな仲間  
また一人群れから欠けたかごめの輪  
草の根の仲間を増やす平和論  
どの指に止まるか思案赤とんぼ  
本当の友が居るか指を折る  
引き潮で残つた仲間ほんまもん  
ノーと言えぬ仲間を持っておりますか  
仲間割れすると酸素が減つてくる  
仲間から戴きました笑い皺  
いい子だが仲間作りが下手なだけ  
否応なし後期高齢の仲間入り

六 点  
富 子

兼題「沈む」 古今堂蕉子 選

その扉あけて入つていらつしやい  
仲間外れほんとの僕が見えてくる  
象さんの詩皆仲間まどみちお  
人間が仲間はずれになる地球  
杖になり鞭になり合う友がいる  
人  
○□△もいていい仲間  
地 エンディングノートに名前書く仲間  
天 九十周年きつと仲間で盛り上げる  
軸 決勝戦すんでしまえば皆仲間

寄せ鍋の底に沈んだカニの足  
沈着を装つている初デート  
どつしりと不沈空母のような妻  
沈むときは落語を聞きに参ります  
大切な人を失う夜がくる  
温暖化大王いかが浮上する  
地球沈没きつと犯人核だろ  
何はさておき沈む話は止しとくれ  
にこやかな顔に撃沈されている  
上書き保存もう初心には戻れない  
ガン告知剛気な男沈ませる  
沈むなよボーダーラインです人  
民主主義積んだ苦勞が沈みかけ  
沈むだけ沈んで具になりました  
沈む人浮く人みんな並みの人  
沈まぬよう君とアンパン半分個  
陽が沈む来るか来ないか花時計  
浮き沈みない幸せを刻む針  
海底でケルン積んでる被災者よ  
深々とソファアに沈み込む油断  
胸の中まだ戦争が沈んでる  
いじめかな沈んだ顔で子が帰る  
飲みに出る時間ですよと陽が沈む  
諍いの間沈んでいた金魚

忠 昭  
遠 野  
義 子  
日 出  
千 枝 子  
一 步  
万 紗 子  
美 籠  
富 美 子  
泰 昌  
たもつ  
修  
郁 夫  
安 和 夫  
万 紗 子  
六 点  
はこべ  
哲 男  
武 彦  
瑠 美 子  
あ や 子  
完 司  
正 雄

上澄みも沈殿物もわたしです  
陽が沈む事も楽しい二人連れ  
沈む気を払うお酒という薬

スキップの足元妬む落し穴  
四捨五入どっち付かずの陽が沈む  
たかじんの死沈み込んでる北新地

ダム底から今も聞こえる祭り笛  
増税が浮き輪に穴を開けそうだ  
浮上するために相手を沈めねば

ご先祖が花見しているダムの底  
瓦礫から津波に沈む音がする  
謙遜が過ぎると軽石が沈む

ビットコイン一気に入気落ちました  
脱原発不沈の太いベンを持つ  
洗濯機アルミ貨一つ産み落す

毎日が妻の手順で日が沈む  
慰めが過ぎますもつと沈みます  
人

シーソーは沈んだままで終わらない  
地

沈没の友を担いでラーメン屋  
天

お見舞のこちらが沈む帰り道  
軸

沈ませた腹の虫から泡が立つ

すみ子  
まつお  
かずお  
恵

柳弘  
宏造  
俣子  
富美子

克己  
真理子  
進  
柳弘

富子  
敏治  
哲男  
宣子

久美子  
弘一  
耕治  
堅坊

一  
治  
坊

兼題「めらめら」 池 森子 選

アベノミクス株にめらめらする預金  
めらめらと燃えるトーチを消す戦  
めらめらと戦火が絶え間ない地球

胸の火が燃える春がやってくる  
めらめらといつても燃ゆる女偏  
結局はめらめら燃えて灰になる

その刹那めらめら燃えるごと夕陽  
ささくれた十指でめらめらに対峙  
めらめらもキラキラも消す倦怠期

猜疑心めらめら老いの中花  
めらめらと火花が飛んで飛んで春  
歳月のところどころで燃えました

めらめらと互角になるまでの妬心  
片笑窪愛を燃やした跡がある  
冷めた目の奥にめらめらある野心

めらめらとすぐ燃えたが悪い癖  
袖口を突き出る今日という拳  
一字ずつ炎になって行くレター

消えることなし胸中の聖火台  
めらめらと燃える気力は残してる  
メラメラの恋を封印して嫁ぎ

大人の恋めらめらよりもふつふつと  
めらめらめら本音スバリと出てしまう  
その薔薇はめらめらさせるトゲがある

灯明がめらめら仏壇の吐息

宏子  
はこべ  
朋月  
朋月  
義子  
英旺  
賢子  
アキ  
遠野  
直樹  
良子  
わこ  
あきこ  
恵  
千代  
万紗子  
あきこ  
好  
完司  
万紗子  
千枝子  
みつ子  
葉子  
瑠美子  
柳弘

宏子  
はこべ  
朋月  
朋月  
義子  
英旺  
賢子  
アキ  
遠野  
直樹  
良子  
わこ  
あきこ  
恵  
千代  
万紗子  
あきこ  
好  
完司  
万紗子  
千枝子  
みつ子  
葉子  
瑠美子  
柳弘

宏子  
はこべ  
朋月  
朋月  
義子  
英旺  
賢子  
アキ  
遠野  
直樹  
良子  
わこ  
あきこ  
恵  
千代  
万紗子  
あきこ  
好  
完司  
万紗子  
千枝子  
みつ子  
葉子  
瑠美子  
柳弘

宏子  
はこべ  
朋月  
朋月  
義子  
英旺  
賢子  
アキ  
遠野  
直樹  
良子  
わこ  
あきこ  
恵  
千代  
万紗子  
あきこ  
好  
完司  
万紗子  
千枝子  
みつ子  
葉子  
瑠美子  
柳弘

宏子  
はこべ  
朋月  
朋月  
義子  
英旺  
賢子  
アキ  
遠野  
直樹  
良子  
わこ  
あきこ  
恵  
千代  
万紗子  
あきこ  
好  
完司  
万紗子  
千枝子  
みつ子  
葉子  
瑠美子  
柳弘

宏子  
はこべ  
朋月  
朋月  
義子  
英旺  
賢子  
アキ  
遠野  
直樹  
良子  
わこ  
あきこ  
恵  
千代  
万紗子  
あきこ  
好  
完司  
万紗子  
千枝子  
みつ子  
葉子  
瑠美子  
柳弘

宏子  
はこべ  
朋月  
朋月  
義子  
英旺  
賢子  
アキ  
遠野  
直樹  
良子  
わこ  
あきこ  
恵  
千代  
万紗子  
あきこ  
好  
完司  
万紗子  
千枝子  
みつ子  
葉子  
瑠美子  
柳弘

宏子  
はこべ  
朋月  
朋月  
義子  
英旺  
賢子  
アキ  
遠野  
直樹  
良子  
わこ  
あきこ  
恵  
千代  
万紗子  
あきこ  
好  
完司  
万紗子  
千枝子  
みつ子  
葉子  
瑠美子  
柳弘

砕け散る魂だろうめらめらと  
雪女白い炎となつて果て  
近寄れば伏せた火種が目を覚ます

負けん気がめらめら前の背を覗む  
ジェラシーを燃やす女の赤い爪  
めらめらを見せてしまえば負けになる

めらめらとわたしは溶ける息づかい  
めらめらが夕陽の中に溶けていく  
鬼達が闘志を燃やし踊つてる

悪人は尽きず地獄の火も絶えず  
火柱の炎の重さ沸点に  
広げるとめらめら燃えあがる手紙

紫にめらめら戯れてはならぬ  
めらめらの少し手前にある動悸  
春はめらめら色エンピツもクレヨンも

めらめらを集めて炎えるシクラメン  
めらめらが欲しくて握手ばかりする  
人

痲癩が震えて壁を這い上がる  
地

穏やかに炎押さえた低い腰  
天

ジェラシーを攪拌玉子焼きにする  
軸

燃えるだけ燃えねば春に届かない

完次  
真理子  
哲男  
すみ子

俣子  
五月  
瑠美子  
義

恵  
完司  
よしみ  
耕治

理恵  
柳弘  
泰世  
朱夏

蘭幸  
よしみ  
哲男  
アキ

アキ

兼題「怖い」 河内 月子選

年々後妻の怖さを思い知る 富美子  
 ほんとうに旨いところとふぐのキモ 一文  
 あちこちでアンネの日記引き裂かれ 富子  
 今度こそ本気でですよと妻が言う 好  
 働くだけの父はとつても怖かった 好  
 手鏡のスッピン顔にぞっとする シマ子  
 子育てのママには怖いものはない 敏治  
 補聴器を外せば何も怖くない 武彦  
 有り余るお金あります怖いです ばっは  
 学校の先生こわく偉かった 美智子  
 ビットコインやっぱり怖い奴だった アキ  
 この歳で正直怖いです歯医者 善純  
 こっぴどく叱られるより怖い無視 洋  
 新細胞死ねなくなればどうしよう 直樹  
 想像はすまい互いの十年後 理恵  
 五輪終え平和の仮面脱ぐお国 はこべ  
 台所我慢が音を立てている 千代  
 犯人は地味で穏やかそうな人 眞理子  
 怖そうなオッチャンじつはオパチャンだ 見清  
 なんやかや言うても怖いなあ死ぬの 朝子  
 堂々と仕掛けを見せた蜘蛛の網 靖鬼  
 今朝もまた脳縮む音聞く怖さ 公誠  
 フランスは怖くて嫌とかたつむり 俣子  
 兄ちゃんが横にいるから怖くない 六点

もう何度読んだか手術承諾書 耕治  
 ストレスを溜めると怖い人になる アキ  
 街角の甘い誘いに嵌まる罟 寿之  
 怖い順女房に地震津波火事 (安)夫  
 母ちゃんの勘が一番怖かった 万紗子  
 饅頭もこわいが酒はなお怖い いさお  
 口きかぬ妻ほど怖いものはない いさお  
 こんなにも優しくされてねむれない ひとみ  
 美しく撮れて遺影にするという 靖鬼  
 隣国が軍備予算を積み増した 公誠  
 ごくまれに優しくされるから怖い 六点  
 怖いもの見たさで通帳をひらく (柿)夫

ボケるのも歩けなくなるのも怖い 完司  
 怖い顔でゴメンねこれは生まれつき かずお  
 ホラーより怖いワイフの無言劇 淳司  
 チョー怖い誰でもよいと言うナイフ あや子  
 晩酌の止め役いないから怖い 朋月  
 怖いなあ妻がだんだん若くなる 武彦  
 人間がとても怖いと言う地球 富子  
 天 私より怖い奥さんいたはった 久美子  
 軸 怖くとして父ちゃんに金出さず

兼題「見学」 小島 蘭幸選

見学でお土産くれたからファン 遠野  
 キャンプ見学トラの雄叫び聞いている 柳昌  
 見学でいっぱいもろた試供品 則彦  
 カルチャーの見学妻と鉢合せ 武彦  
 樹木葬妻が下見をすと言おう 美智子  
 見学会お食事会がメインです あや子  
 縄文杉生きる力をくれました 富子  
 父の職場見学した子立ち直る 富子  
 見学の筈がいつしか輪の中に 紀乃  
 フクシマを見て審議せよ再稼働 直樹  
 見学もせずにあの世を語る僧 俣子  
 きみを覗き見てから老いの火を学ぶ あきこ  
 台所見せてそれから仲良しに 章子  
 逝く前に見学したい黄泉の国 美智代  
 恐る恐る句会見学して以来 耕治  
 スカイツリーまだ見学の列続く 六点  
 見学はそこそこ地酒探すなり 義子  
 老眼鏡手に古書展に小半日 公誠  
 人生の自由見学飽きたら 千代  
 ロボットが熟練士の技盗む 富子  
 ホスピスを見学痛も悪くない 楓  
 いつだって君はそこから見ていたね ひとみ  
 内視鏡で我が体内を見学す 完司  
 沖繩の基地見学で目が覚めた 一歩  
 見学のつもりでちょっとお見合へ としお

宇宙人の修学旅行だよUFO  
洗脳の予定見学者を募る

見学はビール工場だけに  
北新地は見学だけにする財布

子の距離で静かに眺められている  
ケアホームの帰途は無口の老い二人

ちよつと下見に賽の河原へ行つたまま  
宇宙人そつとハルカス見学に

大和路を往けば私はもう卑弥呼  
まなうらに摩文仁の丘がはなれない

一度見においてが霞網でした  
ヒト科絶えた地球見学しませんか

鶴を折る一部始終を見えています  
佳

発掘の見学をする葱坊主  
千枚田褒めちぎるのは見学者

ええとこやと墓地を見学して帰る  
花見ツアー墓地見学のバスでした

離れめぐり町家の音が温かい  
人

ペンにぎり締める回遊魚の時間  
地

見学のつもりこの世去り難い  
天

見学の果ては陽炎立つ岬  
軸

野外授業がずっと続いているこの世

朱夏  
奏子  
勝弘

真理子  
泰昌  
茂

公誠  
富美子  
進

あや子  
五月  
ダン吉

朱夏  
完次  
好

耕治  
敏治  
よしみ

あきこ  
榎和夫

大西  
泰世

## 句会 燦 燦

筒 一 上 井 読む 2月句会を

うたたねの天使が春の咳一つ 蕉子

うたたねとは「転た寝」。まことに古雅な言葉になってしまつた。今どきは「マイスリー、ハルシオンなんか普通量では寝られへんねん」という睡眠困難時代。微かな咳を一つして、眠り続けるエンジェルが羨ましい。

玉手箱開く前から総白髪 黒兔

白髪とは申せ、由井正雪ふうの豊かな総髪だ。玉手箱の煙をたとえ百年分浴びたとて、びくともしない頑健な老骨。

背開きにされているのに気づかない 保州

背筋に沿って切り裂かれ、ただのダボハゼだと衆目はとくに一致しているというのに、わたしだけは本物の鯛でありますと自認し続ける嫌な女の物語。

とんがつてとんがつた子の丸い膝 奏子

ぼちゃぼちゃつとした可愛い姿ではあるけれど、今夜もこんなに母に盾突いてくる娘。やっぱり親に似たとしか言いようがないと、溜息が混じる。

カミソリの異名が消えてから久し 蘭幸

「えらい早う死によつた」と言われてみても、必ずしも不幸であるとは言いい切れまい。鈍刀になって生き永らえるよりは。

じつくりと焦げ目をつけてくるチャンス 義

ピフテキに例えればウエルダンである好機。さてどの辺りから切つて食おうかと、舌なめずりをして待つていたチャンス

針供養とうふに罪が刺してある よしみ

今はもう唯のイベントとして生き残っているだけの過去の風習に人間の原罪を重ね、興行きのあるイメージを演出された。

# 老心ゆづり

毎月24日締切・35句以内厳守  
掲載は原稿到着順となります。  
楷書で誤字のないようにお願い  
いたします。  
編集部

## 和歌山三幸川柳会 武本 碧報

ほどほどの微罪重ねてまだ生きる  
静電気起こさない距離わかまえる  
身の丈に合った暮らしの髪斗袋  
ほどほどにしるともう一人の自分  
ほどほどをついつい忘れ泥まみれ  
ほどほどというファジーな彩がむずかしい  
ほどほどで妥協している向う腔  
ほどほどに効かす手加減塩加減  
ほどほどに三食たべて冬こたつ  
ほどほどに生きて来たから敵がない  
ありがとうだった五文字で足る介護  
4Bで十七文字のドラマ編む  
地上では短く生きた蟬の殻  
十七音字に心の内を見抜かれる  
手短に言えば五分で済む話  
乗車順ほんの短い間が待てぬ  
毎日がショートコントで日が暮れる  
どん底で千変万化する希望

起世子 八重子 ひろ子 豊 菜摘 碧 富香 准一 昭枝 弘子 俣子 みつ江 義雄 当代 町子 義泰 和子 高夫

朝シャンが弾む望みがかないそう  
点滴の雫数えて湧く希望  
風車の小さな希望きつと風  
一粒の種に希望を託すべし  
少女の夢ポツと点して絵ロウソク  
一ランク上に希望の星がある  
ひたむきに定めた道を男なら  
今ひとりでつかい道になるだろう  
決められた寿命とと思う花の首  
気安くは売りには出せぬ僕らの首  
首の皮一枚だけの愛である  
いたずらの度に掴んだ首根っこ  
露天風呂に公金らしい顔並ぶ  
断捨離へ首の垢まで拭いておく  
繋った首に保証がついてない  
打ち首は覚悟火の橋渡り切る  
モテイリアニの首の長さは愛ですか

### 竹原川柳会(広島)

古田 太虚報

孫娘白馬の王子についてゆく  
馬の瞳の奥に確かな信じ合い  
あの人は馬が合ってるお友達  
脚線美わたし競走馬だったのよ  
馬車馬のように働いたのも昭和  
馬歳に翔けるでつかい夢ひとつ  
還暦のうまの息子に嫁が要る  
嫁く娘へ白無垢の意味聞かす祖母  
白百合がすつきり咲いた良い日だな  
ほほ笑んでる白い産衣はどんな夢

イセ 幸子 きく 純子 章子 絹子 寛 丹吉 宏夫 智三 美羽 美枝子 昇 幹子 次根 みね 保州

百歳になつたら白に戻れるか  
冠雪の富士山白という威力  
法話聞くゆらりとゆれて全部聞く  
廻り道全部肥やしになる若さ  
「君が全てだ」百万回も聞いたのに  
全部好きハーフの孫という平和  
新年へスイッチ全部オンにする  
愚痴全部聴かせて妻は逝きました  
願い事一つにしよう初詣  
大好きな人との会話「ひらかな」で  
初春へ夢の扉が開きます  
のんびりと猫と新聞読む至福  
安産のお守りを買うときめきよ  
おかわりはおいしい証拠お母さん  
齢よ齢中まで白くなる頭

### 米子住吉川柳会(鳥取) 渡辺多美子報

松の木が剪定されて春を待つ  
嫁はなし息子を語る露天風呂  
私の奇妙誰かに見抜かれる  
目のやりばこまった孫の胸あたり  
黙々と刻む私の砂時計  
千鳥足星はなんでもお見通し  
話す意味分らないけど拍手する  
世の中はよくにもできることがある  
地震台風地球に熱い炎さえる

### 川柳塔打歌(鳥取)

野口 節子報

登美枝 幹 未延子 宏之 紀の治 ひろし 多美子 公一 正二 厚子 栄香 貞子 史子 一路 力 歩美 寛 笑子 あゆみ 敬子 輝恵 規代 比呂子 蘭幸

気の抜けた拍手ばらばら有難う

ばらばらと諭吉数えて縄暖簾

ばらばらとめくっただけで絵が動く

ばらばらばら屋根は葺の音楽会

うその皮ばらばら剥けて友が去る

ばらばらの拍手で送る辞任知事

ばらばらと過去甦る日記帳

フグの毒ふりかけてある秘密法

住所録ばらばら寒くなつてきた

鳩尾にばらばらりと散る残花

ばらばらと俺の山河に毒が降る

亡き夫の星を探して空仰ぐ

三徳山仰ぎ見るだけ煙る神

仰ぎ見る道は遠いぞ険しいぞ

星空を仰いで探す若田さん

困つたら天を仰いで深呼吸

師は仰ぎたたえられたと誤解する

神様がドア開けるまで天仰ぐ

仰ぐ師に黒板消しが落ちて来る

眩しいね空を仰いでごまかした

すり鉢のくぼみで天を仰いでる

さよならに月を仰いだ迷い道

壇上を仰いで今日は敗北者

長らえてまだまだ見たい明日の夢

明日がある約束ないが多分ある

株投資するより明日の金がある

あすもある言つて暮らして傘寿の賀

若者よ明日のために肉を食え

明日がある無いかも知れぬ八十路坂

公惠

清啓

龍枝

紀美惠

滋

美美子

紀の治

完司

節子

石花菜

美代子

恭子

久芽代

耕治

陽之助

玲坊

美知江

野蒜

道子

久江

三津子

くにこ

重忠

貴恵

義人

善江

岳人

和子

棒切れは捨ててあすから潔く

明日の朝目が覚めるのか覚めんのか

数の子のどれも明日を待っている

明日こそしっぺ返しを食らいそう

いずも川柳会(鳥根) 竹治ちかし報

神の国何処を掘つてもお湯が出る

湯引きした魚ほんとの味を出す

湯通しをしてからわたし柔かい

足湯して落ちる夕陽も見て帰る

お風呂だよ日本人で良かったね

いい湯だな怒り疲れもとけていく

どの顔ものつべらばうになる湯船

熱い湯に溶かした迷い呑んだ朝

憧れの人があがらぬ夢に出た

憧れたセーラー服も祖母ちゃんに

若き日の憧れそつと胸の奥

憧れているとは知らぬすんだ月

憧れた自由独りは寂しすぎ

憧れは死ぬまで持つてゆくつもり

憧れの我が家を守る鬼瓦

逆立ちしてもジャンスタルクに勝てません

憧れはあこがれとして今日を生き

憧れは夕焼雲に消えたまま

憧れだった青いリングはもういない

深海魚空の青さに憧れる

迷惑をかけて生きてるのんき者

消費税上がるのん気で居られない

のんきすぎ顔は知つてる名を忘れ

重利

照彦

芳光

盛桜

章峰

シゲ子

昌枝

美千代

博美

幸子

幸子

敬

健柳

夢生

志津

喜子

玲子

弘子

志ける

寿代

あきら

文子

テル子

寿美

治代

敬子

蘭水

前 たもつ 選

一巻の終りを飾る絵が画けぬ

原発は止めるとでかい初日の出

美しい町並み人情味も厚い

いつの日か口ポットがする墓参り

新しいからとふわふわ飛びつかぬ

不用意に本音を吐いて睨まれる

百均で金を天下に回します

願ひ事妻には言えぬこと二つ

明日の為今日の全部を使い切る

地獄門目指してエツサホイサツサ

石花菜

佳句地十選 (3月号から)

矢倉 五月 選

がらがらと捨てた未練が戸を開ける

じつくりと聞いたなら二人とも悪い

悪運も控ねているうち甘くなる

百均で金を天下に回します

背なの荷も減つてゆつくりのぼる坂

厳肅な式でもスマホいじつてる

いきなりに対処出来ない歳になる

ネットから覗き見している別世界

新芽みな歡喜の顔を天に向け

反省を拾つて夜が白け出す

晴美

美代子

武彦

比呂子

永久

修

かずお

弘子

宏造

地佳平

石花菜

一湖

さくら

小雪

弘子

すみ子

まつお

利子

玄也

洋

晴美

のんきだね本音は棚においたまま  
反省をすれどんのん気が顔を出す  
のん気ではおれぬ九条かわるかも  
のん気者知らず知らずに歳をとる  
戯れを許す時効が疼き出す  
許すこと許されぬこと柿熟れる  
許す種さけて許しを乞いにゆく  
許すより忘れるほうが性にあう  
閻魔さんの許しが細ぼそ生きて  
許したら水柱ゆっくり溶けていく  
歳月と水の流れに許される  
神でさえ許さぬことも許す母

川柳塔なら

坊農

柳弘報

歩きつつ想いに耽りけつまずく  
楽しみを散歩の道で拾つてる  
歩こう会帰りはいつも居酒屋へ  
夢幾つまだあたためる胸の中  
糖尿薬代わり日に万歩  
小遣いで何時もスパークする夫婦  
いいチャンス二人でゆっくり歩こうよ  
カラフルな夢のつぼみが春を呼ぶ  
大嫌い写真は事実つきつける  
五十年見合い写真に操られ  
夫婦喧嘩夢でも妻に負けている  
要注意絶えず火花を出す女  
アルバムを開ければセピア色笑う  
まだ夢の続きか妻が美しい  
ピンボケを心霊写真と勘違い  
父の拳火花点いたり消やしたり

美江子 紀恵 ちえ 多喜 妙 桂子 佳子 俊直 煩悩児 歌子 しみえ ちかし

自分探しひたすら心の中歩く  
古ぼけた写真に恋を閉じ込める  
女三人寄ればスパークするうわさ  
強烈なスパーク恋は無量大  
寒中の速度で歩くことにする  
颯爽と歩く空元氣だけれど  
ライバルと火花散らした頃が華  
星月夜光源氏の香の音  
寝返りを打って逆夢裏返す  
袋叩きにしたい男が写つてる  
残り火に未完の夢を暖める  
セレナーデ奏でる思い出の写真  
6Bの杖を頼りになお歩く  
束の間を一緒に歩くだけでいい  
戦場の修羅を扶ったカメラアイ  
堂々とおねしよに託すでかい夢  
上向いて歩いてごらんほらひかり  
百行の記事より一枚の写真  
ソプラノとバスがスパークする会議

川柳塔唐津(佐賀)

仁部

四郎報

娘婿還暦祝鯛御膳  
三次会以後は知らない空財布  
国民を騙した罪は倍返し  
学力がまた月曜日休みです  
夫逝きて穴の深さを知りました  
パチンコの釘師に今日も操られ

川柳ふうもん吟社(鳥取)夏目

一粹報

生きのいい鯛を捌いた手で祈り

孝子 将文 富子 克己 信子 柁子 寿之 紀子 順啓 完次 隆盛 惠美子 堅坊 理恵 成子 恭昌 朝子 真理子 國治

人間のもろさを包みこむ両手  
倍返しなど望まない母の愛  
作句ルール読めば読む程筆止まる  
一線を引くと風みな他人めく  
ルール無視流れ逆らう稚魚が群れ  
目には目を千年続く倍返し  
拉致問題しびれがされる日本中  
我が亭主ルール違反の常習だ  
老いらくの恋にしびれて我れ忘れ  
介護され老母がやんばい顔をする  
やんばいならぬが除夜の鐘が鳴る  
身の丈に見合う暮らしへ大根煮る  
貴方さえ居ればこの世も極楽だ  
孫を抱く心はいつもやんばいだ  
恋のルール味わうスリルする違反  
倍返し位で足りぬ恩が有る  
夢の中大金掴みやんばいぜ  
ときめきもしびれることもない平和  
人格にしびれて酔って師と仰ぐ  
まだあったしびれる心地健在だ  
いつまでも逝つたあの子にしびれてる  
どう妥協しても所詮は世代の差  
介護から離れて一人旅つづく  
ユーモアのセンスを常に磨きたい  
毎日食う蟹を生簀に飼っている  
届け物倍返しされ気が重い  
ルール違反へ注意をすれば逆ギレす  
段々とルール崩れる単身者  
人生ゲームルールどおりに上がりたい

無限 一瑤 天翔 雅女 とも湖 野蒜 文子 清信 凱柳 金祥 妻子 美恵子 回春子 文香 地佳平 弘康 美佐枝 薰 正子 隆浩 毅 昌鼓 圭一郎 蟹郎 春名 由美子 孝二 節子

昭和と一桁夫婦のルール崩さない  
ヒミツ法句作り覚悟しているか  
しびれる頃は青春時代だったかな  
話しぶり皆の心をしびれさせ  
やんばいな歳を忘れていた至福

高知川柳社

小川てるみ報

五十年たつと迎える人まばら  
防人はスクランブルに命懸け  
迎えうつ矢に人情がつめ込まれ  
帰省子へ好物を盛る皿の数  
みんな皆おいで暖炉は燃えている  
戸口まで迎えに出たい福の神

川柳塔おつばこ吟社(香川)川崎ひかり報

思い出の人いつまでも年とらず  
じれつたい話量が欠伸する  
秘密保護壁八百の大本営  
わが人生亀の歩みで半世紀  
つばみから花咲きそして母になる

川柳塔まつえ吟社(高根)相見

柳歩報

酔うて寝ていたから空気がうまい朝  
弾んでる子供の笑顔いい空気  
深呼吸幸せいっぱい夢いっぱい  
夫婦です空気のような日もあった  
夕焼けの空気欲しくて外に出る  
色々あったおんなじ空気吸い乍ら  
本心は見せない夜のサングラス  
モザイクの中で行き場のないメガネ

サングラスはずしてみればバンタかな  
フレームを替えて気分も春の色  
サングラス私の色で世間読む  
あの人はメガネかけたら少しシャイ  
オリオン座メガネはずして仰ぎ見る  
散歩道日々伸びる芽春拾う  
忠告は捨てず拾って胸に置く  
こんな俺拾うてくれた春がくる  
長い人生しあわせ拾う力瘤  
そわそわとコーヒークップ掻き混ぜる  
そわそわと焦らぬ人の底力  
そわそわと開ける祝いの熨斗袋  
月末になるとそわそわする財布  
待ち合わせそわそわなんてしてないよ  
下駄箱で春だはるだと赤い靴  
懐かしいなあそわそわもセピア色  
父と母の優しさ落ちている実家  
ちようちよちようちよ一度っきりの愛で飛ぶ  
畳み込んだ愛情だれにでも注ぐ  
沢庵の愛と塩振り重い石  
愛なんてとつくに忘れハトポツポ  
ごちそうさん愛の形はてんこ盛り

川柳塔さかい(大阪)村上

玄也報

鬼たちもみんな白髪になりました  
海外で身振り手振りで土産買う  
鬼さんは年中クールビズで居る  
貧乏をして人間が強くなる  
にこやかにほほは笑む妻の変化球  
爺はパスはばは鬼いる広辞苑

川柳塔さやま(兵庫)北澤

稠民報

掃除の鬼小金貯めてもゴミ溜めず  
貧しいが元気な妻が横にいる  
賑やかに本音言い合う平和な日  
さみしくて鬼と遊んでみたくなる  
海越えて煌めいているアスリート  
貧しさも慣れてしまえばさくら色  
にこにこのほつべに合わぬ減らず口  
定年後仕事の鬼の孤独感  
お下りの服に隣の子の名前  
酔い醒めて元の貧者に舞い戻る  
清貧は三日もすれば飽いてくる  
鬼になる前はいとしい妻だった  
一人ちやう貧乏神が同居人  
犬一頭飼って貧しさ中くらい  
二月チョコほんのり匂う平和だな  
澄みきった瞳に鬼も手が出せず  
日本の誇り永久平和主義  
不平不満心貧しくなつてゆく  
子供には貧しいことは言うてない  
介護され仏の顔になった鬼  
仕事の鬼と言われた人も認知症  
逃げ腰に本音がばれた下手な嘘  
人間が本当の鬼かも知れぬ  
似顔絵は本人無視の変な鼻

川柳塔さやま(兵庫)北澤

稠民報

賽銭が背中にあたる初詣で  
おもいきり亡夫呼びたい時がある  
便利さに慣れて元には戻れない

敏治  
清  
さくら  
世紀子  
みつこ  
日の出  
八千代  
光

輝山  
静枝  
草庵  
ゆき  
知恵子  
注湖  
桂子  
青帆  
幸代  
たけし  
長吉  
久絵  
千里  
柳歩  
美智子  
幸子  
弘充  
博子  
左余  
とも子  
寿代  
子

としお  
一文  
唯教  
清晋  
健吾

和幸  
誠一  
時雄  
舞夢  
素頓馬  
澄空  
扶美代  
五月  
由一  
かりん  
月子  
朋月  
玄也  
雅明  
俶子  
天笑

なだめつつ出来た買物痛い足  
 便利よう使われてますとお婆さん  
 便利さに飽きて炭火で秋刀魚焼く  
 よう来たといつも便利に使われる  
 うっとり太古を偲ぶ化石群  
 犬と猫ホテルに預け旅カバン  
 試着室高値の方でおもいきり  
 ニコニコと介護にかける恩返し  
 日向ほこ猫も私もうつとりと  
 便利さに馴れ有りがたさ忘れてる  
 若返り走ってみたいなおもいきり  
 腕相撲おもいきり底力  
 おもいきり生きたと母は百を越え

南大阪川柳会

津守

柳伸報

美紗子 哲男 稠民 真由 勇 多美子 開子 可住 かほる 幸子 ちかゑ 照代 美智子 弘子 タカ子 和雄 志華子 忠昭 たもつ 庸佑 恭昌 昌紀 あさ子 栄子 修実 郁夫

さりげなく褒める言葉にとげがある  
 ほめ殺しなんて姑息な手を使う  
 誉められて満開に咲く自尊心  
 とまどきは自分を褒めて立ち直る  
 体重計正しい数字出ています  
 かあちゃんの指示はいつでも全部マル  
 輪の中で正しく生きてきて孤独  
 信号を守れと孫が袖を引く  
 高リスク抱えたジュニア家を出る  
 百歳から見れば七十まだジュニア  
 国会を二世議員が闊歩する  
 レッス川柳ジュニアからシニアまで  
 七年後ジュニアの力花ひらく  
 発想の転換ジュニアからヒント  
 悪いとこばかり継いでる私の子  
 伝統へジュニアもただの弟子である  
 ジュニアには残してならぬ負の遺産

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西

茶子報

更紗 克己 歌留多 楓 典子 直樹 集一 正春 なぎさ 一歩 直子 いさお ルイ子 柳伸 勝弘 東風 あや子 小鹿 芳光 盛桜 美ツ千 螢 鈴 照彦 蟹郎 弘子 西和子

先ずは梅私も虫も有頂天  
 炬燵からはじまる縁もひと昔  
 純愛の映画で釣った悪い妻  
 春炬燵みんなおしゃべり大好きだ  
 お茶が出そうしはらく正座して待つか  
 北の狂気は幽痒いまままで成るものか  
 炬燵の中の秘密はきつと語らない  
 里芋の告白聞いて痒くなり  
 照れたのねカッパ頭を掻いている  
 妙な気が起きそうな気が映画館  
 柏餅先ずは葉っぱの香りから  
 赤いバラもらってハート痒くなる  
 誉めちぎり痒さが我慢できません  
 映画館ガラガラで風立ちぬ  
 先ず顔をもつともらしく嘘を言う  
 韓ドラを一人占める我が小部屋

富柳会(大阪)

古田

千華報

咲和 実満 茶子 八重 孔美子 はるお 幸代 すみれ 富久江 京 かおる みさ子 満 岩和子 いさお 美代子 和子 登子 慶子 武人 奏子 千恵 晴美 高鷲 壽峰 正治 伸雄

虫の音も弱りわが身と重ね合う  
心ならずもお世話をかけている私  
胸きゅんも今は昔の恋心  
天辺に座る文句のない器

月皓皓荒ぶる波を愛とする  
あれこれと世話をしている時が華  
招かれたけれど鎧を着てゆこう  
今日だけは赤い実になるセレナーデ  
子に世話をかけないように万歩計  
夢いくつ悲しみいくつ編む絆  
車よりモデルに目がゆく試乗会  
忘恩をため込んでいた倍返し  
デジタルの世界に手書き年賀状  
未知数の希望握った子が生まれ  
風を読み雲のころは百態に  
秋深し冬が手招きするばかり

逆立ちをしても分からぬ画家の意図  
屋根のない家で季節を知らず住み  
相合傘すり寄りすぎて濡れ男  
腹八分これができない裏事情  
予報士の的中日本冷凍庫  
ゴミ出し日猫追い払う役終える

川柳大坂 森松まつお報  
かんできを閉む笑顔はみな無邪気  
かんできはたまにストープ代わりする  
カンテキの煙でむせた裏長屋

彦次  
アキ  
文重  
欣之  
未知  
澄子  
千華  
よしみ  
寿之  
信子  
常男  
清  
七朗  
惠  
紅紫朗  
森子

煮物には最適でんなかんできは  
鈍い奴鋭いよりはましだけど  
三日程してから腹が立つてくる  
大声で鈍い細胞追っ払う  
父に似ず何故か息子は鈍臭い  
鋭さも良いけど鈍い方が好き  
節分に裸電球温かい  
三ツ星も裸にされる偽メニユー  
悲しさにお風呂で一人泣きました  
裸なら技と力の大相撲  
裸木がそーっと抱いている冬芽  
寒かろに一条纏わぬ雪だるま  
裸みて身体求める年でなし  
赤裸裸に思いぶつけてから絆  
天国へ裸で行けぬと銭をため  
裸など見たく無いけど気に掛かる  
予定どおり生きたなあとは冬火花  
朝一番今日の予定をすり合わせる  
徳利の絵が描いてある予定表  
予定表小唄カラオケ山のぼり  
予定外のコトを待ってる一人旅  
予定表なかなか夫と噛み合わせる  
見落としては無いか保険の落とし穴

美千代  
美行  
雅美  
まみ子  
百合  
かつ子

珠生  
勝弘  
まつお  
紀雄  
五月  
和彦  
川童  
わこ  
蕉子  
柳弘  
美濃  
朝子  
かよこ  
義子  
喜楽  
一歩  
温子  
堅坊  
芳香  
隆司  
黒兎報

離陸する瞬間が好きバスポート  
まだ達者歳の数だけ豆を噛む  
噛み合わせぬ日もそれなりに老夫婦  
春近い嫁ころころとよく笑う  
ころころとコース外れて行く老後  
掌にのればそのまま転がされ  
ころころと妻の機嫌は七変化  
ころころと笑う彼女は若くいる  
英語では「目がころころ」は何と言う  
ころころと段差無くとも転ぶ古稀

ほたる川柳同好会(大阪)水野  
三陸にレールの響き春戻る  
陸路行く北海道は一直線  
夕焼けが応援してる陸上部  
噛めぬ歯と聞こえぬ耳の共白髪

正代  
春代  
長一  
柳童

美智代  
正子  
勝  
順子  
桂子  
久子  
幹治  
純子  
信男  
黒兎

八尾市民川柳会(大阪)土田 欣之報  
知覚から少年たちが神風に  
いただきますごちそうさまのよいリズム  
合わす手の中で溶かしている心  
紆余曲折やがては戻る元の位置  
僕の脳万能細胞無限大  
躓いた石に器を磨かれる  
鍋の底磨いて今日の句読点  
ありがとうの一言胸の灯を点す  
あのときの女神今ではおばちゃんに  
虎落笛突然の計報が届く  
磨くから光るほつとくから錆びる  
雪解けの会話は神さまがくれた  
たましいは天合掌は母の骨

川柳同好会みらい(鳥取)吉田 陽子報  
眺めより距離を考え墓地を買う  
終活へ車一台まず減らす

和之  
陽子

珍客の土産めんどろ予感させ

いのししが我が家穴場とかき散らす  
一つでも輝きたくて本開く

いらぬ世話同居くつきり線を引く  
美しく老いるためにも金が要る

五千七十五日して薄れ  
いろいろな出会いのおかげ生きている

反対の肩を寒風通り抜け  
まぐれでも勝てば嬉しいものです

野党より妻の反対手敵しい  
三代代温度差あつて距離保つ

手の豆が建てた家で手さあどうぞ  
映え渡り沈む夕陽に手を合わせ

鉛色空が人間押しつぶす  
不幸癖祝い喜ぶこと出来ぬ

希望の灯消えそう花を買いに行く  
勝ち負けは問わぬ命があればよい

倉吉川柳会(鳥取)

竹信 照彦報

節分になると静かな鬼婆

節分が来ても鬼さへ顔見せぬ  
増税で豆と一緒に福も逃げ

税上がる撒く豆の数減らしとこ  
炒り豆も鬼も殺せぬ老入れ歯

節分に父さん鬼に早変わり  
金刀比羅宮節分祭の小豆粥

山陰の土は無口で粘っこい  
憲法が土足で部屋に這い上がる

土下座中あかんべしてはなりません

葵

あゆみ

章子

美恵子

嘉子

敦子

美香

慶一

華蓮

真青

澄子

安子

菜美

和代

一眸

汚染土は行き場ないまま年が明け  
土が舞うシリアの神が泣いている

土つけば野菜は売れる力士泣く  
お火渡り土ふまずだけ無事だった

土こねて国宝になる人もある  
農に生き農に没して土となる

転ぶなど洗脳される我が身です  
痩せ細る子にかじられた脛洗う

洗髪をするたび減つてゆく髪の毛  
愛の手で洗えばみんな丸くなる

折れそうな心洗いに寺へ行く  
巳の年を洗い流して馬はねる

明日は雪大根洗う手が赤い  
きつかけを掴んで出来た逆上がり

きつかけは仲人口に騙されて  
誉め言葉きつかけくれた祖母は星

きつかけがめでたく実る日はいつか  
ウインクして恋をしかけたのは貴男

脳トレのきつかけ探す年となり  
きつかけが無くても行けるのがあの世

わかあゆ川柳会(鳥根) 松本はるみ報

コンビニのあかり浮世の動と静  
苦も楽も代々見詰めたこの屋敷

紙風船夢の続きの狂い咲き  
ネガティブな気持はそつとこみ箱へ

デートです濡れて嬉しい春の雨  
愛着の服が眠っている箆笥

並木道自然の風が背を撫でる

智恵子

恭子

光

玲坊

醉芙蓉

悠子

雄大

由紀子

けいこ

紀美恵

茶子

美知江

萩江

龍枝

美代子

雲流れ思いは若さに逆らわず

川柳花の輪(大阪)

岡本

薫報

来年の話して鬼が大笑い  
同窓会笑顔と会費忘れずに

九条に不戦誓つた筈の国  
誓つても三日坊主が顔を出す

誓います共に白髪と言つたはず  
オヤジギャグ笑つてくける嫁が居る

友ありて誓い守れぬ休肝日  
つらい事実に変える友がいる

惚れさせた罪を感じて笑えない  
腹の底から笑い弱気の虫を吐く

古希すぎて浮気しない誓約書  
お国訛りで笑いはじける湯治宿

わたくしの歴史を刻む笑い皺

サークル檸檬(大阪)

松尾美智代報

酒肴揃えて待つてますあなた  
熱燗という良薬があればいい

この寒さ酒を飲むより他になし  
不揃いのリングも個々に味を持つ

淡々と生きるも影も裏切らず  
一生分飲んだ盃捨てられず

セピア色写真逢いたい風ばかり  
牡蠣味噌で熱燗すすむ外は雪

アイラブユーお酒飲まずに言えますか  
良心を先ずは酔わせて昼の酒

昌

陽

やすの

泰子

公子

昭好

みちる

薫

あや乃

楽鬼

克衛

勇太朗

一幸

敬子

房子

亡母の梅遠い日が綻ぶように  
酒の席洩らした言葉後を引く  
異次元へ迷い込ませてくれる酒

六甲川柳会(兵庫)

伊勢田

殺報

いつまでも失くしたものは数えない  
出番です押入にある割烹着  
気付かれぬようにポックリ逝くつもり  
傷付けぬ思いやりから嘘一つ  
外へ出た鬼が行く場所思案する  
手作りのチョコへ愛情でんこ盛り  
さりげなく高価な石が似合うひと  
三寒四温まだスランプを抜け出せず  
明日開く番は明日を疑わぬ

盛夫  
康子  
武彦  
千賀子  
殺

怒つても拗ねてもかわい子の仕草  
深呼吸して決断のドア叩く  
社長来てなごんだ空気引きしまる  
議題から逸れて会議の場が和む  
カラカラの空気を揺らすすだれ餅  
指名され空気読めずに本音言う  
パパとママどちらも好きと空気読む  
空気にも慣れて飛び交うランドセル  
寡黙だが空気のような人が好き

智恵子  
みつ子  
無限  
清之  
和郎

万華鏡で西方浄土覗き見る  
目もくらむマネーを積んだヤンキース  
手間かけたセガレオヤジをたしなめる  
都構想五億もかけて民意問う  
嘘ついて出掛けた先に妻がいた  
車中メークそれほど時間無かったの  
特注の介護をします親だから

淳司  
弘光  
克三  
久美子  
藤正子  
篤

長柳会(大阪)

坂上 淳司

はびきの市川柳会(大阪)永田 章司報

柳昌報

見て下さい自慢するとこありますか  
封印のままで膨らむ遺言書  
十七歳の夢が膨らむソチの空  
嬉しさとそわそわ交じる表彰台  
膨らまずホッペ不満があるらしい  
味噌汁のおいしい朝に感謝する  
一番の自慢は川柳蔵書です  
孫自慢押さえた自分褒めてやる  
いきむ声聞いた分婉室の前  
朝までにノルマこなしてひと眠り

光男  
美代子  
いさお  
フジ  
悦子  
さくら  
敏  
登志子  
ちづる  
高鷲

その時は吐くかも知れぬ火の言葉  
酒二合本音吐くにはちようどいい  
100分の1秒許さない水  
落葉踏む古い記憶の足ざわり  
うっかりと踏んだ二月のチョコレット  
踏み台の親を介護で恩返し  
踏み台ではありませぬ今昼寝中  
物欲に負けて汚れた金箱む  
正論を吐いてむなし風に会う  
白樺かと思まがう樹々が大阪に  
本物を空気の中で選り分ける  
他人をゴミというあなたは何ですか  
人間が物差しつくり揉めている  
本物かどうか疑う癖がつく

喜久子  
雄太  
美喜  
千鶴子  
かつ美  
シルク  
久仁子  
ダン吉  
泰子  
庸佑  
みつこ  
みつこ  
アヤ子  
章司

こっそりと妻の掌の中演じてる  
こっそりと手助けしたい子の苦境  
こっそりがバレて特ダネおおやけに  
カンニングはうまくできたが全部ベケ  
こっそりと開けて見たい君の胸  
こっそりとないかい事きかせてよ  
古希の会こっそりメモを渡されて  
こっそりと出かけたあとの影法師  
午前さま特技となったしのび足  
でまかせに生きられぬから疲れ気味  
風船にでまかせ詰めて消えた愚痴  
でまかせは現世に残すみやげです  
株高も庶民に重い物価高  
奮発のチョコで思いをぶちまける  
癌完治祈って母は百度踏む  
若いネと言われる度に出る元氣

文香  
寿朗  
弘茂  
邦子  
洋一  
繁義  
和子  
能子  
政一  
博史  
洋次郎  
順子  
美恵子  
利子

あかつき川柳会(大阪) 山本 柳昌報

柳昌報

扶美代  
和代  
信男  
哲男  
希久子  
鉄心  
大気  
秀夫  
敏子  
和子  
寿子  
英夫  
信二  
隆昭

いつまでも失くしたものは数えない  
出番です押入にある割烹着  
気付かれぬようにポックリ逝くつもり  
傷付けぬ思いやりから嘘一つ  
外へ出た鬼が行く場所思案する  
手作りのチョコへ愛情でんこ盛り  
さりげなく高価な石が似合うひと  
三寒四温まだスランプを抜け出せず  
明日開く番は明日を疑わぬ

盛夫  
康子  
武彦  
千賀子  
殺

万華鏡で西方浄土覗き見る  
目もくらむマネーを積んだヤンキース  
手間かけたセガレオヤジをたしなめる  
都構想五億もかけて民意問う  
嘘ついて出掛けた先に妻がいた  
車中メークそれほど時間無かったの  
特注の介護をします親だから

淳司  
弘光  
克三  
久美子  
藤正子  
篤

はびきの市川柳会(大阪)永田 章司報

柳昌報

見て下さい自慢するとこありますか  
封印のままで膨らむ遺言書  
十七歳の夢が膨らむソチの空  
嬉しさとそわそわ交じる表彰台  
膨らまずホッペ不満があるらしい  
味噌汁のおいしい朝に感謝する  
一番の自慢は川柳蔵書です  
孫自慢押さえた自分褒めてやる  
いきむ声聞いた分婉室の前  
朝までにノルマこなしてひと眠り

光男  
美代子  
いさお  
フジ  
悦子  
さくら  
敏  
登志子  
ちづる  
高鷲

その時は吐くかも知れぬ火の言葉  
酒二合本音吐くにはちようどいい  
100分の1秒許さない水  
落葉踏む古い記憶の足ざわり  
うっかりと踏んだ二月のチョコレット  
踏み台の親を介護で恩返し  
踏み台ではありませぬ今昼寝中  
物欲に負けて汚れた金箱む  
正論を吐いてむなし風に会う  
白樺かと思まがう樹々が大阪に  
本物を空気の中で選り分ける  
他人をゴミというあなたは何ですか  
人間が物差しつくり揉めている  
本物かどうか疑う癖がつく

喜久子  
雄太  
美喜  
千鶴子  
かつ美  
シルク  
久仁子  
ダン吉  
泰子  
庸佑  
みつこ  
みつこ  
アヤ子  
章司

あかつき川柳会(大阪) 山本 柳昌報

柳昌報

いつまでも失くしたものは数えない  
出番です押入にある割烹着  
気付かれぬようにポックリ逝くつもり  
傷付けぬ思いやりから嘘一つ  
外へ出た鬼が行く場所思案する  
手作りのチョコへ愛情でんこ盛り  
さりげなく高価な石が似合うひと  
三寒四温まだスランプを抜け出せず  
明日開く番は明日を疑わぬ

盛夫  
康子  
武彦  
千賀子  
殺

物ものに囲まれ心落着かぬ  
厄介者いゝえあなたの親なのよ  
年金に鬼より恐い物価高  
日日紡ぐ長い私の物語

物じやない人です介護受ける方  
しつかりと抗議のペンを持ち直す  
家に統なくてよかつた反抗期  
悪態は吐いたら口に戻せない  
反抗を愛しの地球始めてる

反抗期母におんなを見た日から  
原の謀反赤ちゃん帰り凄い知恵  
原発も秘密法にも反抗や  
言論の府にして公器木鐸だ  
近未来ヒト科の命無限大

反抗期母がきつちり受けて止める  
暖房が欲しいと熊が言うてます  
二の足を踏んで儲けが遠ざかる

城北川柳会(大阪)

近藤

逆風にひるまず加速する勇氣  
財布の中小銭ばかりでさわがしい  
この頃は娘に説教されている  
鬼は外追ひ出されそう豆の数  
うっとり恋の微熱に溶けて春  
落ちてゐる財布が僕を試して

逆立ちで人生観ると偶にいい  
口説くのがややもどかしい総入れ歯  
折りに触れ道理を説いて子を育て  
新細胞死ねなくなるという不安

紀乃  
たかこ  
一志  
直子  
篤  
廣子  
堅坊  
花笑  
ひろし  
克己  
忠昭  
美智子  
九条男  
紀雄  
美世子  
茶助  
和雄

正報

秋香  
あさ子  
一步  
志華子  
郁夫  
修  
縣作  
実  
満作  
直樹

太いから二人で食べた恵方巻  
約款に触れず保険屋梅をほめ  
成人の日華一輪の愛らしさ  
真つ白な明日があるから生きられる  
逆境を越えて自信に満ちた顔  
募金する財布善意に満ちている  
豆撒いて冬の出口へ鬼を追う  
ろう梅の香にうっとり春の立つ  
亡妻に似た花嫁姿送り出す  
青雲の門出見守る春の雪  
説得を逆らつて出た雪の朝  
大黒柱家族の中であたたかい  
苦は楽の種だと説いて信じない  
財布ごとボンと投げ出す太つ腹  
雑草の命は風に逆らわず  
大口あけはき出す癖のある財布  
何あろうと逆らいませせん風見鶏  
マンデラさんうっとり聞いて泣する  
もこみちにすべて少々負けている  
寸鉄の説教だから心打つ  
美しい森の財布を握る水  
うっとり眺めるだけのカニとフグ  
温泉に浸りうっとり野生ザル

川柳塔すみよし(大阪) 森松まつお報

踊る気はないのに踊る妻の笛  
麦笛の旋律青春が蘇る  
口笛で合図とりあう橋の上  
いざとなれば我家まとめるホイッスル

弘風  
洋志  
千恵子  
典子  
賢子  
朝子  
柳弘  
公子  
克己  
武彦  
麗  
ルイ子  
倫子  
榮子  
集一  
美智子  
堅坊  
野鶴  
勝弘  
正  
求芽  
五月  
いさお

好奇心か細い笛も聞き咎め  
ブライドを捨てた私に笛が鳴る  
食卓に離婚届が置いてある  
孫昼寝音を立てずに目で合図  
青い目にさかさ箸は通じない  
乾杯を合図に若さ盛り上げる  
指丸め口に近づけさあ行こか  
何らかの合図とされるこの試練  
鐘がやて年越す合図美し国  
指揮棒の振りおろされてシンフォニー  
渡り鳥どんな合図で旅立つの  
監督はヒッピンと打てとサイン出す  
じわじわと爪まで年を取ってくる  
ジワジワと頭の地肌見え出した  
薄紙をじわじわはがす回復期  
生き甲斐がじわじわ預金食い荒らす  
じわじわと湧く地下水も川となり  
恋ごころ爪の先まで燃えている  
若い日の無茶がじわじわ効いて来た  
小指ほどの新しいこと出来ぬ日々  
新しい気持ちで路郎読み返す  
新年も陽はまた昇る仮設にも  
新しい料理に主人はじめない  
新米が旨い旨いと炊き上げる  
新刊書抱いて淋しい寝正月  
杉玉で新酒知らせる三輪の里  
新しい道切り開く熱い汗  
新しい花もいつかは散るさだめ  
ランドセル新しい夢詰め込んで

由一  
ゆみ子  
美世子  
和代

半銭  
芳香  
蕉子  
公平  
公平  
桃花  
美籠  
五月  
克博  
妙子  
直子  
典子  
裕之  
シマ子  
勝弘  
朝子  
五月  
かりん  
温子  
いさお  
公誠  
昌紀  
志津子  
満知子  
篤子  
一步  
安代  
賢子  
日の出  
舞夢

踊る気はないのに踊る妻の笛  
麦笛の旋律青春が蘇る  
口笛で合図とりあう橋の上  
いざとなれば我家まとめるホイッスル

良い事を教えて今日も元氣出す

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井 宏造報

生き下手の夫婦に冬の陽がぬくい  
ほつかりの雲よ遊んでくれないか  
運鈍根信じて種を蒔いている  
頼られて頼って生きている雪が舞う  
ぬくぬくと育つたせいもお人好し  
センスより値段で自慢する時計  
日向ぼこ母は阿弥陀の顔をして  
いただいたチヨコ妻に残らず食べられる  
本命には二段重ねのチヨコ贈る  
どこであれ置かれた場所で花咲かす  
運命線にも引込線がある筈だ  
風に乗る富士より高く泳ぐ風  
寮歌に酔うオールドボーイの高い下駄  
瓦礫から助けられてくれた他人の情  
ねんねこで絆深める母子草  
りセットに甘えて今日を生き延びる  
バレンタインワサビの効いたチヨコ貰う  
高低差無くても転びそうになる  
マスコミが勝手に騒ぐメダル数  
他人事と思つてましたオレオレは  
世間には出来た嫁だと言つている  
息をつく暇もなかつたポツクリ死  
チヨコレート渡す女のはたし状  
ふところのぬくぬく恋も焼芋も  
他人だが身内みたいでつい甘え  
しがらみの狭間を抜けてきた他人

順子

求芽

いわゑ

無限

わこ

じろう

茂

千賀子

武臣

宏造

文香

比ろ志

毅

弘子

一徳

美津子

千代

遼子

武彦

勝弘

正和

哲男

嘉代子

忠

淑子

歳子

秋果

ふる里に他人の顔で迎えられ  
参つたと言う気はないが高齢期  
国会で文書読むなら私でも

腰痛に杖を頼りに出る句会  
高い税金がついたのは定年後  
高いけどメタバをおそれ野菜買  
わたくしを磨く他人という砥石  
チヨコレート虫歯になると断られ

京都塔の会

樹本 宏子報

あれはたしかそれはたしかみなおぼろ  
今日の無事明日も続くと思わず  
本命をチヨコ味からも確める  
確かです生まれてくる子あなたの旅  
サポートは受けずに行こう黄泉の旅  
電気ガス確かに消して旅に出る  
生きるってお腹がすくんだね確か  
盲導犬ひとつの目となり杖となり  
鏡見て自分の姿確める

求芽  
輝美  
美佐子

受験生に家族も呼吸合わせてる  
ベテランを頭に据えただけの策  
チンパンカンパン中学入試も難しい  
殺生な頭を輪切りするカメラ  
長年の情でサポートする夫婦  
入試など老いの坂には無い安堵  
気は確かですがもの忘れはします  
理屈抜き頭で勝てぬ口で勝つ  
露天風呂に捻子の緩んでいる頭  
不確かを確めに行く曲がり角

紀華  
則彦  
泰夫  
知栄

めぐ  
葉子  
紀乃  
弘之  
満子  
宏子  
保子  
啓子  
みどり  
公子  
文代

紀華  
則彦  
泰夫  
知栄

もてなしの仕上げ茶粥とおこうこと  
難問をさらさら解いて得意顔  
癒される日本庭園和の美術  
さらさらと口から嘘がついてでる  
唇が乾く彼女がまだ来ない  
都心には危険なだけの雪景色  
高僧の流れのような筆運び  
笑つても泣いても落ちる砂時計  
さらさらと墨痕淋漓遺言状  
バランスを崩すと風がよく通る  
やじろべえ重たい方に妻の顔  
核の数なんのバランスなんですか  
夕陽見る世界に言葉など要らぬ  
引き続く介護に心乾きだす  
代筆ならさらさら書けるラブレター  
激情を理性でとめるバランス感

美佐子  
紀華  
則彦  
泰夫  
知栄

もてなしの仕上げ茶粥とおこうこと  
難問をさらさら解いて得意顔  
癒される日本庭園和の美術  
さらさらと口から嘘がついてでる  
唇が乾く彼女がまだ来ない  
都心には危険なだけの雪景色  
高僧の流れのような筆運び  
笑つても泣いても落ちる砂時計  
さらさらと墨痕淋漓遺言状  
バランスを崩すと風がよく通る  
やじろべえ重たい方に妻の顔  
核の数なんのバランスなんですか  
夕陽見る世界に言葉など要らぬ  
引き続く介護に心乾きだす  
代筆ならさらさら書けるラブレター  
激情を理性でとめるバランス感

美佐子  
紀華  
則彦  
泰夫  
知栄

もてなしの仕上げ茶粥とおこうこと  
難問をさらさら解いて得意顔  
癒される日本庭園和の美術  
さらさらと口から嘘がついてでる  
唇が乾く彼女がまだ来ない  
都心には危険なだけの雪景色  
高僧の流れのような筆運び  
笑つても泣いても落ちる砂時計  
さらさらと墨痕淋漓遺言状  
バランスを崩すと風がよく通る  
やじろべえ重たい方に妻の顔  
核の数なんのバランスなんですか  
夕陽見る世界に言葉など要らぬ  
引き続く介護に心乾きだす  
代筆ならさらさら書けるラブレター  
激情を理性でとめるバランス感

美佐子  
紀華  
則彦  
泰夫  
知栄

もてなしの仕上げ茶粥とおこうこと  
難問をさらさら解いて得意顔  
癒される日本庭園和の美術  
さらさらと口から嘘がついてでる  
唇が乾く彼女がまだ来ない  
都心には危険なだけの雪景色  
高僧の流れのような筆運び  
笑つても泣いても落ちる砂時計  
さらさらと墨痕淋漓遺言状  
バランスを崩すと風がよく通る  
やじろべえ重たい方に妻の顔  
核の数なんのバランスなんですか  
夕陽見る世界に言葉など要らぬ  
引き続く介護に心乾きだす  
代筆ならさらさら書けるラブレター  
激情を理性でとめるバランス感

美佐子  
紀華  
則彦  
泰夫  
知栄

もてなしの仕上げ茶粥とおこうこと  
難問をさらさら解いて得意顔  
癒される日本庭園和の美術  
さらさらと口から嘘がついてでる  
唇が乾く彼女がまだ来ない  
都心には危険なだけの雪景色  
高僧の流れのような筆運び  
笑つても泣いても落ちる砂時計  
さらさらと墨痕淋漓遺言状  
バランスを崩すと風がよく通る  
やじろべえ重たい方に妻の顔  
核の数なんのバランスなんですか  
夕陽見る世界に言葉など要らぬ  
引き続く介護に心乾きだす  
代筆ならさらさら書けるラブレター  
激情を理性でとめるバランス感

美佐子  
紀華  
則彦  
泰夫  
知栄

もてなしの仕上げ茶粥とおこうこと  
難問をさらさら解いて得意顔  
癒される日本庭園和の美術  
さらさらと口から嘘がついてでる  
唇が乾く彼女がまだ来ない  
都心には危険なだけの雪景色  
高僧の流れのような筆運び  
笑つても泣いても落ちる砂時計  
さらさらと墨痕淋漓遺言状  
バランスを崩すと風がよく通る  
やじろべえ重たい方に妻の顔  
核の数なんのバランスなんですか  
夕陽見る世界に言葉など要らぬ  
引き続く介護に心乾きだす  
代筆ならさらさら書けるラブレター  
激情を理性でとめるバランス感

美佐子  
紀華  
則彦  
泰夫  
知栄

もてなしの仕上げ茶粥とおこうこと  
難問をさらさら解いて得意顔  
癒される日本庭園和の美術  
さらさらと口から嘘がついてでる  
唇が乾く彼女がまだ来ない  
都心には危険なだけの雪景色  
高僧の流れのような筆運び  
笑つても泣いても落ちる砂時計  
さらさらと墨痕淋漓遺言状  
バランスを崩すと風がよく通る  
やじろべえ重たい方に妻の顔  
核の数なんのバランスなんですか  
夕陽見る世界に言葉など要らぬ  
引き続く介護に心乾きだす  
代筆ならさらさら書けるラブレター  
激情を理性でとめるバランス感

美佐子  
紀華  
則彦  
泰夫  
知栄

もてなしの仕上げ茶粥とおこうこと  
難問をさらさら解いて得意顔  
癒される日本庭園和の美術  
さらさらと口から嘘がついてでる  
唇が乾く彼女がまだ来ない  
都心には危険なだけの雪景色  
高僧の流れのような筆運び  
笑つても泣いても落ちる砂時計  
さらさらと墨痕淋漓遺言状  
バランスを崩すと風がよく通る  
やじろべえ重たい方に妻の顔  
核の数なんのバランスなんですか  
夕陽見る世界に言葉など要らぬ  
引き続く介護に心乾きだす  
代筆ならさらさら書けるラブレター  
激情を理性でとめるバランス感

美佐子  
紀華  
則彦  
泰夫  
知栄

もてなしの仕上げ茶粥とおこうこと  
難問をさらさら解いて得意顔  
癒される日本庭園和の美術  
さらさらと口から嘘がついてでる  
唇が乾く彼女がまだ来ない  
都心には危険なだけの雪景色  
高僧の流れのような筆運び  
笑つても泣いても落ちる砂時計  
さらさらと墨痕淋漓遺言状  
バランスを崩すと風がよく通る  
やじろべえ重たい方に妻の顔  
核の数なんのバランスなんですか  
夕陽見る世界に言葉など要らぬ  
引き続く介護に心乾きだす  
代筆ならさらさら書けるラブレター  
激情を理性でとめるバランス感

美佐子  
紀華  
則彦  
泰夫  
知栄

益子

五月

欣之

庸佑

福子

和友

弥生

英旺

ふりこ

朝子

美津子

昭

いさお

益祥

香代

清

和也

玄也

仁緑

笑司

信二

幸子

ダン吉

隆昭

珠子

遠野

大輔

倦怠期続く乾燥注意報

大吉に賞味期限は書いてない  
盆栽のバランスに見る小宇宙  
風情ある町に溶け込む人の情  
さらさらと記憶こぼれて行く恐さ  
余生とは思ってたほど楽でない  
独特の風情を醸す水墨画  
食べ頃に乾いて旨し一夜干し  
愛枯れてハートかさこそ音がする  
さよならと乾いた声で背を向ける  
乾燥肌かゆくて掻いてまた掻いて  
被災地の春の小川もさらさらと

豊中もくせい川柳会(大阪)藤井 則彦報

ほんやりとライバル見てたのが誤算  
再々婚羨望の目が突き刺さる  
くち車孫に乗せられすぎ乗車  
ゴミ出しも粹な男の手さわよさ  
無印でほんやり雲と遊んでる  
ほんやりは妻に向けての護身術  
座りびな楽していいなと立ちびなが  
臨終でほんやり映る皆の顔  
ひとり生きひとり渡って灯を守る  
ほんやりと日向ほこして抜く鼻毛  
安らかに眠れる死後も悪くない  
ハルカスがほんやり見える四国から  
夕陽浴び突っ立っている物忘れ  
ケータイも無くってほんやり過ごす幸  
羽が欲しいと鳥を見上げるモグラの子  
いいおんな花柄マスクよく似合う

保州 宏之 裕之 弘子 英夫 ひろ子 正幸 みつ江 美籠 康信 義泰 則彦報 庸佑 徹 時子 薫 ヨシエ 武彦 美佐子 健二 きらり 幹治 美津子 一喜 堅坊 則彦 紀華

羨ましかれどざりとして突然死  
やんわりと言うから油断してしま  
アイマスクしても眠れるまで喋る  
羨ましい神も味方に付けた人  
マスクして目元きれいな人と知る  
散歩道背筋伸ばして春探す  
七度目のジャンプへ光る銀の尾根  
ほんやりに見えたか助け舟がくる  
春や春黄色い声の遊園地  
羨んであげ句の果ての負け惜しみ  
まっすぐに背筋伸ばして藍を着る  
羨んでみてもせんない力の差  
握手してハグで再会温める  
母介護笑顔形状記憶して  
ほんやりの明かりの下はみな美人  
いい風が吹くまでマスク外さない

川柳さんだ(兵庫) 田中 章子報

オリンピック目指す児ばかり保育園  
五輪には魔物が棲むと言う波乱  
耐えぬいた選手の話にまた涙  
若者は五輪の魔物ものとせず  
ええとこの奥様タイプ苦手です  
ややこしい話は妻へ言うてんか  
生きる道苦手も得手も呑み込んで  
居るだけで守る役目を担う夫  
見た目にも彩飾る和の御膳  
生いたちは言わないでおく守りたい  
マイペースわたしは私いいじゃない  
ボス猫が守る団地のテリトリ

求芽 美籠 見清 千鶴子 耕治 靖鬼 かずお 正彦 久子 葉子 歌留多 千恵子 美智代 千代 哲男 キヨミ 恭子 章子 耕治 正和 ヨシエ 宣子 雅尚 幸香 ひとみ 淑子

守るもの何もないのよブライドも  
レシートのお二人様で揉めている  
レシートを集め夫のあらさがし  
飛び火した恋レシートからはれる  
あれこれと言って渾金が講釈師  
あれこれと欲は出すまい寺参り  
あれこれと馳走の上を迷い箸  
あれこれと文句言う人もういい  
あれこれ言うな夫はじつと耐えている  
万両を活けて気分はお金持  
日本一割烹着似合う黒木華  
母気丈寡婦で五人の子を育て  
下手な字を落款印でカバーする  
朝帰りする猫だれも叱らない  
古女房まんざら捨てたもんじゃない  
ゴーストが偽装のドラマ仕立てあげ  
我家でも過去が平和を脅かす  
二次会でスマホ片手に缶ビール  
嘘一つ仕舞い忘れて顔に出る  
足腰の痛さこらえて内科医へ  
不揃いのリンゴも個々に味を持つ  
へそ曲り治すクスリがまだ効かぬ

川柳塔みちのく(青森) 稻見 則彦報

梅干しの穴が開いている握り飯  
振り向けば転んだ跡の穴ばかり  
晩酌に抜け穴がない日本酒  
胸の穴塞いでくれた友の酒

富夫 徹 ちあき 武彦 美籠 野薫 一子 朋月 忠 歳子 雄太郎 つな子 俊昭 好文 晶子 祐康 和雄 雅司 廣子 一泉 光久 順子 五楽庵 柳子 吞舟 慕情

吹雪かれてあたふたしてる冬梅  
のんびり屋友と会う日はあたふたと  
あたふたの人生だった昭和録  
あたふたと一人芝居の衣替え  
苛立った心鎮める終い風呂  
焦らないやがてもつれた糸ほどけ  
メ切日迫って焦るベンの肝胝  
導火線短くなって来て焦る  
焦ったら空を見上げてみることにだ  
青空へ夢を抱いた津軽風  
生きてゆく自分の命抱きしめて  
熟年も大志を抱く種子を選る  
人生は岬で抱いた波しぶき  
夢ひとつ抱いてこの坂のほります  
青空がぎゅっとわたしを抱きしめる  
松葉杖つくと情が身に染みる  
ざんざんとひまわり咲いて耐えてます  
耐えてきた科白を抱いて消えてゆく  
酒ちびり今夜も砂を吐きながら  
七度めの干支を迎える妻元氣  
パパとママ世代交代ジジとパパ  
学帽が出て来て被り鏡見る  
夫婦箸来し方語る掘り炬燵  
うつらうつら母は地球の外の風  
死に化粧母は素顔のままでもいい  
しつこさはゼロ 血はどろどろ

ひとし  
初枝  
井蛙  
つとむ  
洋子  
小とみ  
花匠  
龍馬  
一呑  
一湖  
隆樹  
花峯  
則彦  
芳生  
綾子  
黙人  
霜石  
きよし  
龍人  
雅城  
ふさゑ  
氏加子  
美鈴  
和香子

大山滝句座(鳥取) 新家 完司報

選手より清く正しいあみだくじ  
石花菜

腹立つと欠点ばかり見る眼鏡  
首筋の皺を隠せる冬が好き  
土踏まず胸撫で下ろす蟻の列  
ラッキーになれる4回転ひねり  
いい顔の写真一枚決めてある  
待つ春は紙ヒコキに乗ってくる  
大雪の後の春日に来る雪崩  
春風の選曲ミスが降らす雪  
晴れの日は何処眺めてもああ平和  
病みあがりゆらり地球が傾いた  
今日は晴れ句会のみんな春の顔  
冬晴れ間ガラスのハート拭いておく  
認知用頭の中でかくれんぼ  
関取がゆらりと露天風呂を出た  
あの方へ一番好きなチヨコ選ぶ  
娘の縁談選り好みする歳でない  
知恵袋からばあさんが出て来ない  
八の九九舌を噛むよな消費税  
のど仏に老母叱るなど止められる  
欠伸して脳の中まで掻き混ぜる  
皇室の方は買い物選べない  
春の税鳥になりそう我が財布  
青空にもう許そうと思うこと  
まだ生きる免許更新した米寿  
幸せは自分基準で計れない  
氷張る所を選び子が歩く  
大雪に国難きびし日本国  
選り好みする余地はない病院食  
飛行機は墜ちず泥棒にも遭わず

楓花  
美恵子  
野蒜  
芳山  
紀の治  
くにこ  
照彦  
麦青  
和子  
大鯨  
幹啓  
熊四郎  
七七  
玲坊  
風露  
由紀子  
博子  
典子  
蟹郎  
雄大  
けいこ  
恭子  
幸子  
重忠  
鈴野  
久子  
恒子  
すみゑ  
完司

川柳藤井寺(大阪) 鴨谷瑠美子報  
税務署へ家計簿持って泣きに行く  
これ以上税上げるなら一揆だぞ  
相続税当てにしているのんびり暮らす  
消費税上がる前にと思うけど  
揺り籠から墓まで税がつきまとい  
四月から飲み会ひとつ減らさねば  
きつちりと税が引かれるパート代  
節税を目指し脱税する錯誤  
増税の対策僕は知っている  
有名税払うあなたは偉い人  
たばこ税払い続けてやる意地で  
税関を飛び越えてくる鳩の群  
足音高く一円玉が闊歩  
突然の花束わたしどうしましょ  
前略と書いて続かぬ親不幸  
前略で好きすきスキと打つメール  
前略よりも梅の蕾が先である  
恋の文前略なんて書きません  
デコイチの釜が歌った労働歌  
嘘つきな貴男は釜で一煮立ち  
冬のキッチン圧力釜に頼りきり  
閉ざされた心が開く釜のめし  
被災地で命洗った鉄の釜  
初釜で京の雅に酔う一日  
炊き出しの釜のまわりにある絆  
七合炊き今は二合で済む暮し  
初釜に伸びた背筋をたしかめる

美代子  
いさお  
紀雄  
アヤ子  
龍一  
勝弘  
ちづる  
彦弘  
雄太  
悦子  
光男  
信二  
フジ子  
みつこ  
婦美枝  
六点  
瑠美子  
ヨシ枝  
一歩  
奏子  
扶美代  
弥生  
清之  
絹枝  
キキ  
英夫  
喜代子

温泉地五右衛門風呂で冬景色  
いただいた蟹釜ゆでの刑に処す

川柳あまがさき(兵庫) 加川 靖鬼報

言い負けた夫只今ふて寝中  
目が覚めて今日も生きてる隣見る  
馴染めない背中あわせに座る仲  
洗る子の背中を押して塾にやる  
顔を見て背中を見せて教育を  
吊り燈籠拗ねて咲かない娘を照らす  
生来の怠惰このまま来世まで  
無為にして世間に拗ねた青春期  
やつてみたい拗ねてからんで泣く仕草  
拗ねられてすぐ妥協する甘い親  
背中美人迷っています追い越しを  
ずるずると添うて梅なく二十年  
立春へはほほ笑み交わす梅の鉢  
世を拗ねてわが身をどこに置くのやら  
失望を招く現実直視せず  
ストープにこたつ猫より丸くなる  
ふと見せる寂しげな背に過去を見る  
いい夢の続き見るため目をつぶる  
老梅の凜と咲くを見伸ばす背な  
朝ドラに元気をもらおう出社前  
立春も寒さをしのぐ真知子巻  
拗ねた顔上手にあやす母の愛  
ずるずると終りの知らぬ父の酒  
笑つても拗ねても可愛い歳三つ  
確約をずるずる伸ばし自虐する  
拗ねている人は四五日ほつとこう

尚男 まつお

里江 恭子 つな子 千代子 富夫 晶子 咲貴 蕙子 洋子 寿美子 柳明 泰子 幸香 健二 雪菜 和子 初音 純 よしひさ 野薫 靖鬼 五月 勝巳 奮水 耕治

血の絆愛しく脆く波を打つ  
鬼は外中国産の豆を撒く  
いつか来た道へずるずる行く政治  
赤い血をたぎらせているおじいさん  
手も足も出せぬ拗ねてる妻の乱  
言い過ぎと言葉足らずで揉めている  
体内にたぎる物あり命の灯

翠洋会(大阪) 佐々木満作報

見送つて安堵も悔いもある介護  
介護する命の鼓動受け止める  
突然逝くせめて介護を少しでも  
介護する経験もなくされる身に  
フィナーレは介護を受けず迎えたい  
万感をこめる握手が泣いている  
赤ちゃんに手を握られて乗り過こす  
義理握手選挙のあととは知らぬ顔  
とりあえず握手それから腹さぐる  
安眠の薬は今日のあの握手  
裏切りは話のタネに限りた  
裏切れば必ずはまる落し穴  
裏切つたり裏切られたり嫁姑  
裏切りに隠した胸が疼いている  
税上げて裏切らないで使い道  
裏切りのつけに夫を絞首刑  
裏切りは世の常なりと慰める  
裏切りを覚悟でつくる飯を炊く  
失敗を反省辿りつくり初心  
終章へ米寿の歩幅遅々として  
節分も心の鬼は追い出せぬ

ヨシエ 歌留多 見清 朋月 美籠 かずお キヨミ すみ子 満作 舞夢 げんえい 和夫 理恵 眞澄 知之 楓楽 日の出 公平 捷也 桃花 弘子 紀子 蕉子 浩二 昭 正雄 千歩 善之

命明朗今日けんめいに生きている  
居心地がよいか居ついた猫ひる寝  
孫が早やりケジョになると頼もしい  
車社会へ冷たく雪が降りつもる  
目に見えぬ藤の努力の金メダル  
ほんのりの言の葉添えた母の文  
砂時計までも早いと思う歳  
早春の風はきりりと身を正す  
目も耳も七十年で機能薄  
NHKに送り込まれた古代人  
待ち合わせいつも早めに行つて待つ  
早とちり口より先に手が動く  
人間を丸く磨いていく嫉  
結び目のほどけぬ帯に残る悔い  
善根を重ね未来を風にする  
古いのが幅利かせる骨董屋  
足すものは無いようちには君がいる  
わたくしが町内会の生き字引き  
頑なに古い男を押し通す  
内戦のシリア眠れぬ二十四時  
老いてゆく時間ばかりが早くなる  
ラスベガス視察旅行が隠れ糞  
見栄張つてみても等身大の影  
子供との絆を今も桐の箱  
自分だけなんだか歳を早くとる  
寒空に春の足音遅運として  
混乱に便乗してまだ騒ぐ  
おさがりて育つやんちゃな土踏まず

川柳ねやがわ(大阪) 籠島 恵子報

志華子 照子 恭昌 希久子 富子 朝子 尚世 鈍甲 さち子 ルイ子 壽峰 高鷲 仁 忠央 修 かつみ 仁清 祥昭 秀雄 弘風 賢洋 銀杏 美智子 美江 寿子



句会名	日時と題	会場と投句先
岸和田 川柳会	19日(土) 吟行 陽気・緩む・囁目吟	【いよやかの郷】 集合 南海岸和田駅前 9:30 JR東岸和田駅前 9:45
川柳塔 みちのく	19日(土) 17時締切 贈る・いたずら・インテリ	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 稲見則彦
川柳 藤井寺	20日(日) 14時締切 沿線・芸・席題は共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線藤井寺下車南へ徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	20日(日) 13時30分開場 頑張る・張る・欲	淡輪17区集会所 南海みさき公園駅・徒歩6分 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
豊中 もくせい 川柳会	21日(月) 13時40分締切 人目・頑張る・そのまま 自由吟	豊中市中央公民館 3F 阪急曾根駅南東・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
川柳クラブ わたの花	25日(金) 10時開場 手玉・包む・嘘・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0012 八尾市小阪台町1-4-8 西川義明
川柳塔 すみよし	26日(土) 14時15分締切 縁・ウインク・選ぶ	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子
和歌山 三幸川柳会	26日(土) 12時30分開場 中・素直・茶碗	和歌山商工会議所 4階 第2会議室 〒640-8570 和歌山市役所西隣 ニュース和歌山編集部「和歌山三幸川柳会」
川柳 ねやがわ	27日(日) 14時締切 野党・闇・再建・自由吟	寝屋川市立総合センター 4階 第1研修室 京阪寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
はびきの 市川柳会	27日(日) 14時締切 昼・選ぶ・うかうか・完成	陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東・徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうもん社 吟	27日(日) 13時30分開場 スマホ・不意打ち・いいのよ	開発ビル 2F ホール 鳥取市片原1-107 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金洋
南大阪 川柳会	28日(月) 18時開場 童話・つまむ・古い・雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京都 塔の会	28日(月) 14時締切 モラル・財・転ぶ	京都ハートピア 地下鉄九太町駅⑤出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽
松露 川柳会	28日(月) 19時30分締切 泉・春霞・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口194-2 山本正光

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

## 4 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　ら	3日(木) 14時締切 掬う・宴・電気	奈良市立中部公民館 4F 奈良市上三条23-4 近鉄奈良駅④番出口・徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
城北会 川柳会	5日(土) 14時締切 仏・洗う・あけすけ・自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄谷町線千林大宮駅下車③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富柳会	5日(土) 14時締切 大地・やがて・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 TEL 0721-25-0603 川柳とんだばやし富柳会 池 森子
倉吉会 川柳会	5日(土) 14時締切 ざっと・細い・登る	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 まつ え社 吟	5日(土) 13時45分締切 川・魔法・消す・こそこそ	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町366 錦織禮子
ほたる 川柳 同好会	8日(火) 13時30分締切 力・浮く・あっと驚くこと	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール 螢池駅駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
川柳 あまがさき	8日(火) 14時締切 粘る・下心・つくづく・自由吟	尼崎女性センター トレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
あかつき 川柳会	11日(金) 14時締切 掴む・桃・小川	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル 2階) 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口から3分・道路向い側 〒599-0232 阪南市箱作1586-14-102 森村美花
川柳塔 さ　かい	11日(金) 13時開場 眩しい・ヒント 折り句=わかよ	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也
川柳大阪	12日(土) 14時締切 痛い・昔・錯覚	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川柳塔 打　吹	12日(土) 14時締切 唇・はしゃぐ・ぼやく	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
八尾市民 川柳会	13日(日) 14時締切 切符・運・探す・雑詠	八尾神社内 西郷会館 3F 近鉄八尾駅西口・徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
川柳塔 わかやま 吟　社	13日(日) 14時10分締切 兼 題=予告・アイドル・挟む 課題吟=袋・カバン	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼 題 〒640-8453 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森東2-208-5 楽原道夫
西宮北口 川柳会	14日(月) 14時締切 就職・避ける・へとへと 5月大会事前投句「福」締切 4月25日	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩3分 プレラにのみや 〒662-0084 西宮市樋の池10-18-104 福島弘子
川柳 さんだ	15日(火) 13時30分締切 新品・バランス・切る びかびか・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和

# 柳界展望

★第65回大阪川柳大会は平成25年12月16日、大阪市立住まい情報センターで開催。参加者149名。本社同人秀句。

板尾 岳人  
長い長い堀の向こうで  
咲く薊

★川柳塔わかやま吟社平成25年度 四賞

葵水賞 牛尾 緑良

一度だけ光ったごみのみ  
自尊心

あおい賞 乘原 道夫

ケータイは鞆の中に旅  
半ば

たちばな賞 米澤 俣子

隠そうと蓋をするから  
煮こぼれる

課題吟賞 武本 碧

例外もあるとすすきの  
穂が笑う

★木津川計先生は3月7日、大阪自由大学主催セ

ミナーに於て「ど根性」から含羞へ「帝塚山派」への評価について講演。定員を超す聴衆を湧かせた。

★三宅保州氏（理事・海南市）は、よみうり和歌山文化センター「川柳初心者講座」及び、和歌山放送カルチャースクール「川柳初心者講座」の講師に就任。

★木本朱夏さん（副理事長・和歌山市）は、小樽川柳社「こなゆき」3月号にエッセイ「本の楽しみ」を発表。

☆毎日新聞2月26日夕刊のコラム、「浮世の波間で」に、麻生霞乃の「飲んでほしめてもほしい酒をつぎ」が取り上げられた。

▽柳界動向△  
○川柳塔みちのくは、齊藤あゆみから福士慕情氏に主幹を交代。事務局長も小寺花峯氏から稲見則彦氏に交代。新事務局は〒

0368275 弘前市城西1-3-10 電話0172-3618605

○きやらぼく川柳会と、米子住吉川柳会は合併し四月一日より「きやらぼく川柳会」として発足。  
会長 竹村紀の治  
副会長 政岡未延子

## ▽お詫びして訂正△

▼3月号上段13行目、伊藤絹子↓伊東絹子

▽新誌友紹介△  
東京都 川本真理子  
紹介者 奥田みつ子  
山口市 増田ケイ子

## 新同人紹介

肥山 一文  
肥山 一文  
一岳人・富美子・直樹・淳司推薦

紹介者 小島 蘭幸 三原市 鴨田 昭紀  
宝塚市 井上 明美 常任理事会 3月6日(木)

紹介者 長浜 美籠 ①第20回川柳塔まつり②岡山県 高岡 茂子 拡大会議の報告と今後の

紹介者 倉吉市 新家 完司 処理③平成27年本社句会  
岸和田市 伊藤 龍枝 常任理事会日程④定例確

紹介者 松崎 大輔 認事項⑤各部報告事項⑥雪本 珠子 次回 4月7日(月)AM10時

## 第141回 大阪川柳の会

日時 4月14日(月) 午後1時開場・2時締切

会場 大阪市立総合生涯学習センター 第一研修室  
宿題(各題2句・席題なし)

「葉桜」浜 知子・「友」三村 舞  
「地味」江見 見清・「鍵」住田英比古

会費 1000円  
欠席投句 4月12日まで 会員に限る

〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706

本田 智彦 宛

「川柳塔」は大正十三年の「川柳雑誌」創刊から数えて、平成二十六年で九十周年を迎えます。これを記念して合同句集「川柳塔」を発刊致します。

合同句集は昭和四十九年以来十年ごとに刊行し、今回は平成十六年に続く第五集となります。同人・誌友はもちろん、一般の方々のご参加も歓迎致します。一人でも多くのお申し込みを心からお願い申し上げます。

川柳塔社

☆刊行 平成二十六年七月一日発行

☆締切 平成二十六年四月十日(木)

☆体裁 B6判・ハードカバー・上製本

八〇〇頁(予定)

☆参加費 五千円(句集一冊呈・送料込み)

☆掲載句 一人 十五句(自選)

☆申込 所定用紙に掲載句(平成十六年以降の発表句、または未発表句)を記入し、

左記川柳塔事務所へお申込み下さい。なお、参加費は同封の払込用紙でお願

いします。

☆送付先 〒543-10052

大阪市天王寺区大道一―一四―一七

花野ビル二〇一号

川柳塔社 合同句集係 宛

TEL・FAX(〇六)六七七九―三四九〇

### 第3回 東北川柳文学大賞

- ▼応募資格 東北6県在住者(大震災の避難先は可)
  - ▼応募要領 未発表新作10句(題材自由)を1篇とし、全体の題をつける。応募は一人何組でも可
  - ▼応募用紙 A4の原稿用紙に縦書き。タイトルと住所・氏名・電話・所属結社を明記(整理の都合上、A4の用紙厳守)
  - ▼投句料 1篇あたり1000円(現金・郵便小為替)
  - ▼選者 西潟賢一郎・木本 朱夏・佐藤 古拙 佐藤 岳俊・渡辺 松風・山田 不及 大河原滴翠・雲石 隆子
  - ▼締切 5月15日(木)当日消印有効
  - ▼賞 大賞=賞状・記念品・副賞として句集の発行権(100冊)授与
  - ▼表彰 第32回東北川柳連盟川柳大会の席上(7月13日予定)
  - ▼応募先・問合せ先 〒980-0011 仙台市青葉区上杉2-4-8 朝日プラザ上杉313 川柳宮城野社内 東北川柳連盟 TEL/FAX 022-227-0575
- 主催 東北川柳連盟

### 第11回 大野風柳賞作品募集

- 雑詠 五句(未発表作品)
- 審査 大野 風柳
- 審査方法 選句は記名選とします  
五句一組として総合力で賞を決めます  
全員の入選句を発表誌に掲載します
- 表彰 大野風柳賞 一名(受賞作品のミニ句碑・賞状・表彰式交通費)  
準賞 三名 奨励賞 七名
- 締切 4月25日 消印有効
- 参加費 1000円(小為替)(発表誌6月号希望者は500円加算のこと)
- ★投句用紙自由
- ★7月6日(日)の柳都全国大会席上にて表彰
- 投句先 〒956-8691 新津局私書箱15号 柳都川柳社 宛

# 編集後記

★人生は二幕三幕ほどがある。  
よい 薫風

★現代川柳「新思潮」代表の岡田俊介さんは、お住まいも橘高薫風先生と同じく豊中市。濃紺のスーツに包まれた瘦身は先生を思わせてハツとする。「新思潮」121号は「現代川柳を飛翔した作家たち」を特集。昨年八月号編集後記にも書かせて頂いたが、現代川柳の発展に寄与した六人の作家を採りあげている。

★薫風論は私が担当。正直のところ私には荷が重すぎた。桑原道夫編纂「改訂・増補『橘高薫風川柳句集』全句索引」と、道夫さんのご協力がなければ書きおせることは不可能であった。「麻生路郎読本」も「全句索引」も川柳塔社の貴重な財産で

ある。

★平成17年4月24日に先生が亡くなられて八年が過ぎた。先生をご存じでない同人も多いと聞く。

岡田俊介さんのご厚意で「新思潮」から「薫風曼荼羅」を転載させて戴いた。先生の人となりの一端をご理解いただければ、先生の警咳に触れた者として、この上ない喜びである。

★今月の川柳塔鑑賞者の梅崎流青さんは、「川柳葦群」代表。北原白秋がこよなく愛した福岡県柳川市在住。新聞記者を定年退職後は、釣りとお謡いと野菜作りと温泉など、悠々と人生を楽しまれている。ご多忙な中を鑑賞頂き有難うございました。

★三月号小島蘭幸主幹の巻頭言「約束」の石部明さんは昭和14年、岡山県生まれ、現代川柳の旗手で

## 誌友として思うこと

現役時代は仕事が理系であったため、縁のなかつた川柳に手を染めて一年。未だ塔社の句会に参加したこともなく、えらそうなことは言えないのですが、本誌に気になることがあります。

その第一は、私自身の作はもとより、全体にテーマや感性が老人くさく感じられるものが多いということ。いわゆるサラリーマン川柳の鋭さと比べて、活き活きした

感じが少なく、若い人の共感を得にくいように思われます。

第二は川柳を普及させ塔誌を展させる方法について。パソコン、スマホの世代にはネットでの投句を考慮する必要はないでしょうか。苦勞して現在のシステムを作り上げられた先人に対して、無礼の発言と受け止められるかも知れませんが、川柳を老人だけの楽しみにとどめず、若い人々に広め普及して欲しいと考えて、思い切つて記しました。(嶋本 喬)

## ひとつと

あった。「麻生路郎読本」の評論をお願いしたときも、「もちろん書かせて頂きます」とご快諾くださった。それから間もなくの、平成24年10月27日急逝。享年七三。明さんはどのような路郎論を展開されたのだろうか。惜しみて余りある好漢の死であった。(朱)

「川柳雑誌」第三号(大正十三年四月発行)の編者。周年を迎えたいものであ

「川柳塔」「水煙抄」「自投句を。」(勝)

# 川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(6月号)地名

市都  
道府  
県  
姓  
雅  
号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201



# 檸檬抄投句用紙

「美人」（4月15日締切）

6月号発表

大内 朝子 選 — 共選 — 竹治ちかし 選

B A

--	--

B A

--	--

地名

市都  
道府  
姓雅号

地名

市都  
道府  
姓雅号

切らないで下さい

きりとりせん

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

左右に同じ句を書いて下さい



## 作品募集

6月号発表 (4月15日締切)

川柳塔 (8句)	小島蘭幸選
水煙抄 (8句)	川上大輪選
愛染帖 (3句)	新家完司選
檸檬抄「美人」 (2句)	竹内朝子共選
一路集 (3句)	指宿千枝子選
丹後屋	森松まつお選
「三 角」	山口光久担当
「ブレイ」	
「怪しい」	
「あつさり」 (3句)	
初歩教室	

7月号

檸檬抄	「リラックス」
一路集	「牙える」「テーマ」 「栄 養」
初歩教室	「趣 味」

## 本社4月句会

とき 4月7日(月) 13時開場・13時40分締切  
 ー開場時間、締切時間を変更していません。ご注意ください。ー  
 ところ アウィーナ大阪 4階 金剛  
 天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441  
 おはなし「旅と川柳」  
 兼題「溝」  
 席題「化ける」  
 「ぎゅっ」  
 「白」  
 「合 図」  
 山 口 光 久 選  
 鈴 木 い さ お 選  
 吉 岡 修 選  
 太 田 扶 美 代 選  
 居 谷 真 理 子 選  
 奥 田 み つ 子 選  
 小 島 蘭 幸 選  
 会 費 1000円  
 投 句 料 500円(切手可)  
 (各題2句以内)

## 本社5月句会

7日(水) 午後1時から  
 兼題「血」「タッチ」「からから」  
 「拌 む」「愉 快」

## 第32年度 夜市川柳募集

第11回 「ヒント」 日 野 愿 選  
 ハガキに3句 4月20日締切  
 投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3  
 河内天笑方 川柳塔さかい

### 「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
  - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
  - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
  - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 八百円(送料84円)

半年分 五千円(送料共)

一年分 九千八百円(同)

二〇一四年(平成二十六年)四月一日発行

発行人 小島和幸

編集人 木本朱夏

印刷所 美研アート

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一七

花野ビル201号室

発行所 川柳塔社

電話(06)六七七九三三九〇番

振替〇〇九八〇一四二九九八四七九番

ご応募ありがとうございました。入選の皆様には賞品をお送りいたします。

## 第7回 オニザキ「ごま川柳」入選句発表

川柳塔社主幹

小島蘭幸選

健康食品トップを走るゴマの価値  
 パワー全開ゴマのおかげで箸進む  
 世界遺産和食にごまは欠かせない  
 ごま抜きで健康長寿語れない  
 嫁ぐ娘に持たす秘伝の胡麻レシピ  
 食卓に花一輪とごまの瓶  
 おにぎりのゴマに亡き母見えてくる  
 留学の子にも持たせたごまの瓶  
 ごまバラリ旬のお浸し母の味  
 ゴマ尽くしサブリメントはもういらぬ  
 亡母のごまいつも青空くれました  
 お醤油はちよびりゴマはふんだんに  
 三ツ星もごまの香は宝です  
 ごま振られおむすびコロコロと笑う  
 奥ゆかし日本料理とゴマの味  
 湯豆腐に胡麻味噌添える冬の膳  
 黒ごまを目に愛敬があるたまご  
 擦り胡麻の香が精進の膳で栄え  
 おもてなし仕上げは胡麻で締めましょう  
 無形文化遺産だ母のごま料理

### 【準 特 選】

ひと粒のゴマにも宿る仏様  
 和の心和食にごまは欠かせない  
 【特 選】  
 和洋中ゴマは世界で愛される

大阪	古今堂蕉子	豊中	水野 黒兎	出雲	松田 眞弓	札幌	三浦 強一	河内長野	山岡富美子	礼幌	三浦 強一	弘前	稲見 則幸	藤井寺	鴨谷瑠美子	尼崎	河原野折杭	河内長野	山岡富美子	大東	谷口 東風	堺	増田 和幸	弘前	船見 憲央	大阪	高瀬 霜石	橋本	石田 隆彦	松原	森松まつお	河内長野	藤塚 克三	倉吉	岡崎美知江	青森	三浦 進	弘前	只野ゆきこ	堺	澤井 敏治	大阪	西出 楓楽	京都	三宅 満子	八幡	今井万紗子	栃木	岡野 初枝
----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	------	-------	----	-------	----	-------	-----	-------	----	-------	------	-------	----	-------	---	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	------	-------	----	-------	----	------	----	-------	---	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------

## 杵つき製法の「すりごま」 オニザキの

# ごま

長い間親しまれてきた  
 オニザキの「すりごま」は、  
 名称を変更し、パッケージ  
 を一新いたしました。

オニザキのすりごまは、  
 元々すり鉢ですったゴマで  
 はなく、杵と臼を使った杵  
 つき製法で出来た「すりご  
 ま」です。

今までと変わらぬ、風  
 味豊かな味わいをご堪能く  
 ださい。



株式会社 オニザキコーポレーション  
 〒862-0951 熊本中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL ☎ 0120-30-5050